宮古市埋蔵文化財調査報告書25
Archaeoiogical Researches in Miyako

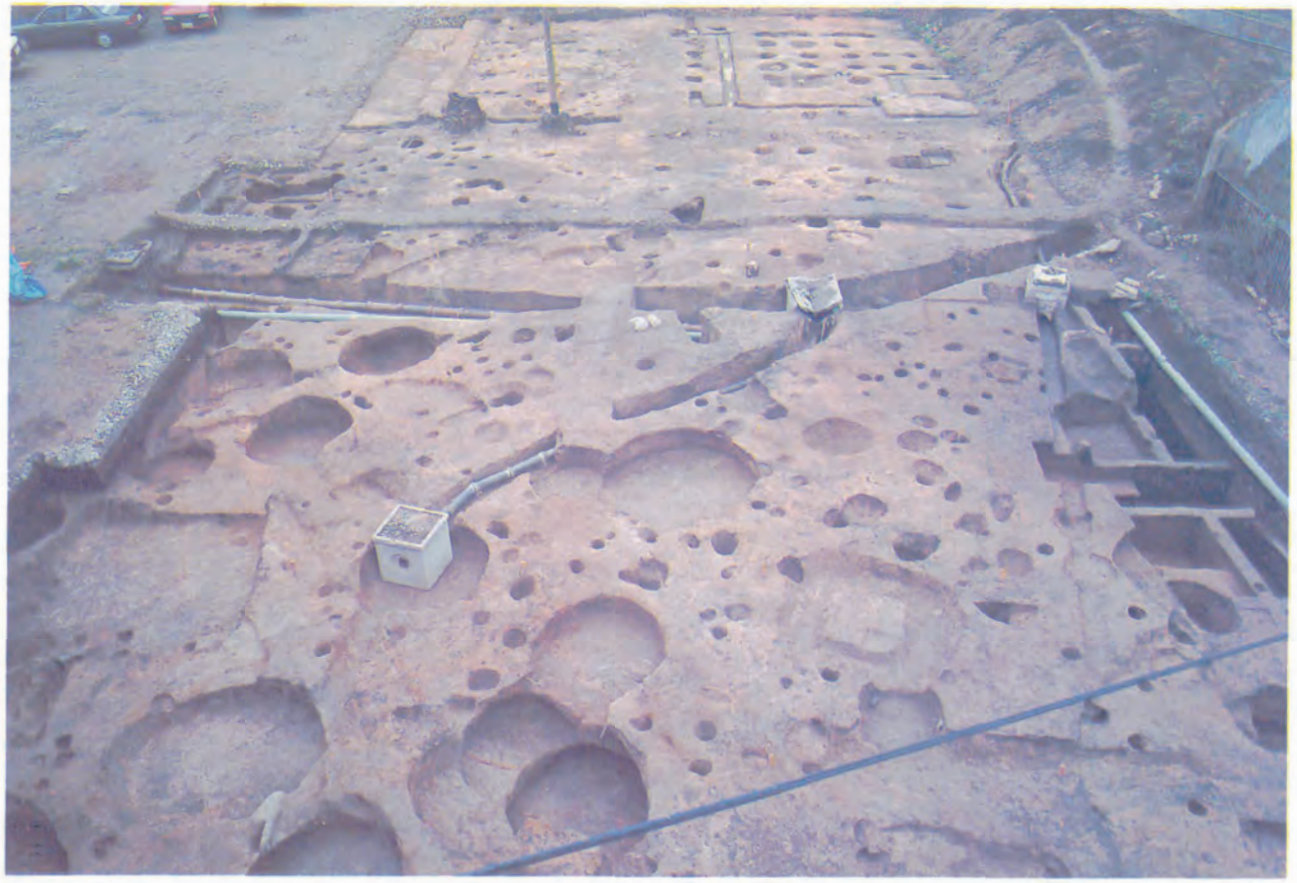
鍬ヶ崎館山貝塚

—平成元年度発掘調査報告書—

1990.11

岩手県宮古市教育委員会

The Board of Education Miyako, Iwate Pre.



調査区全体

第1002号竪穴住居跡

第15号土坑跡

第15号土坑跡集礫

自然遺物ブロック

イガイ出土状況

遺構外出土土器①

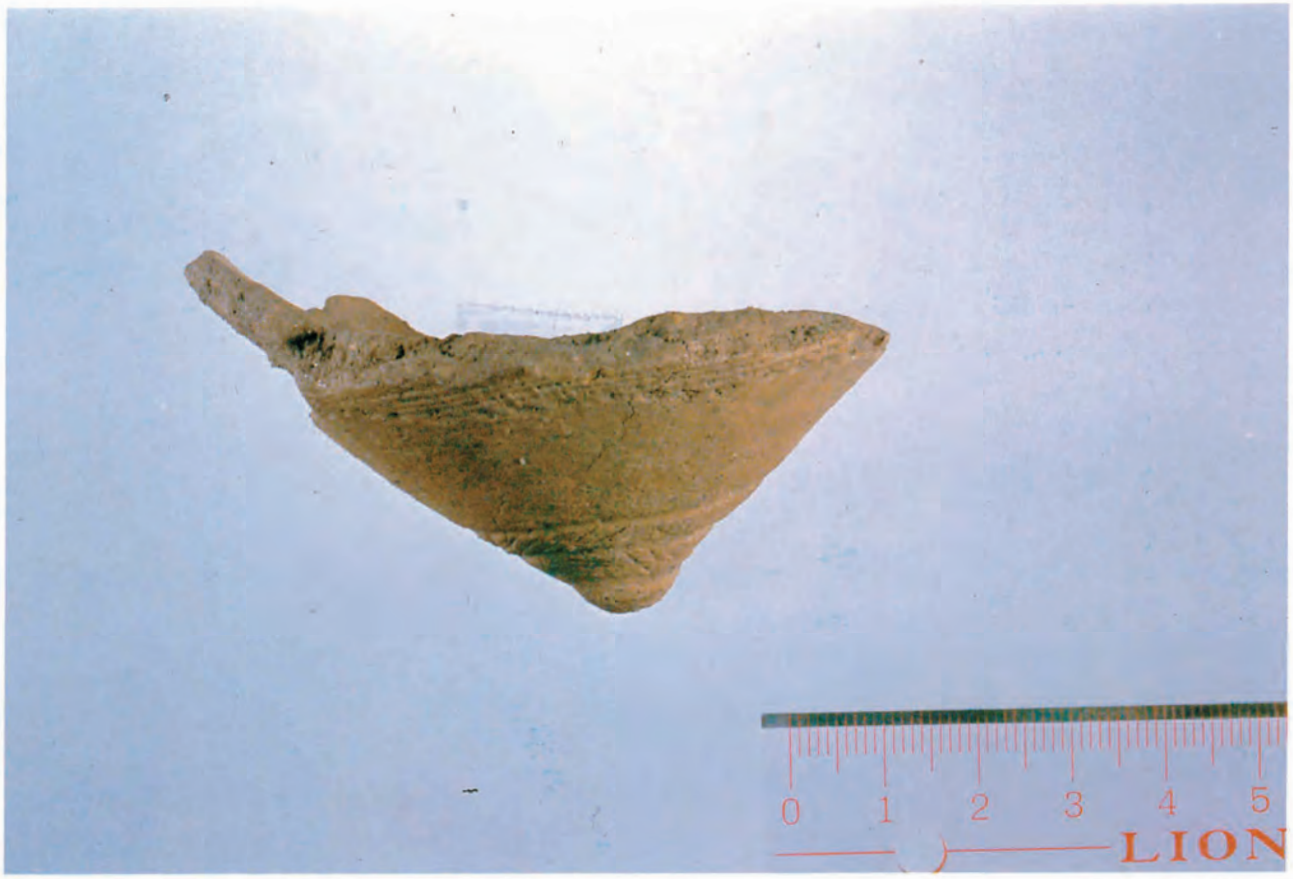
遺構外出土土器②

遺構外出土土器③

遺構外出土土器④

遺構外出土土器⑤

遺構外出土土器⑥



遺構外出土土器⑦

遺構外出土土器⑦（底部）

序　　文

岩手県宮古市は、陸中海岸国立公園のほぼ中央部に位置しており浄土ヶ浜や蠟燭岩などに代表される様な景勝に恵まれた所であります。

宮古市内には現在の所、約400ヶ所余りの遺跡が確認されていますが、それらの中には古くからその存在が知られ調査研究が為されて来た遺跡があります。鍬ヶ崎館山貝塚もそのひとつで、数多くの遺物が出土しており中でも骨角器類に関しては優れたものがあります。しかしながら、遺跡の現状は市街地の近くに立地する遺跡の例にたがわず、宅地化などの開発が進みその景観は大きく変貌してしまいました。現代に生きる私たちにとっては、文化財の保護と開発の均衡を図り、正しい理解のもとに文化財の保護・活用をしていく責務があります。

今回の発掘調査は、宮古測候所の老朽化による建て替え工事に先だち実施したものです。調査の結果、縄文時代から平安時代にわたる数多くの遺構・遺物が発見されました。また、中世の城館跡でもあることから当地は、縄文時代から現代に至るまで連綿とした人間の活動の場であったことが、窮い知ることが出来ます。

検出した遺構・遺物の中では、当遺跡では空白とされていた平安時代の遺構・遺物が発見されました。特にその内ひとつの竪穴住居跡からは、貝ブロックや少量ながら魚骨片などの自然遺物や製塩土器片、穂摘み具様鉄製品が出土し、まさに当時の人たちの食生活や生業形態などを如実に物語っております。

最後になりましたが、調査に多大なるご協力を頂いた東北地方建設局、宮古測候所の方々、並びに地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成２年11月30日

宮古市教育委員会
教育長　佐　藤　勇　逸

例　　言

1．本書は、平成元年度に実施した鍬ヶ崎館山貝塚（くわがさきたてやまかいづか）の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、東北地方建設局（局長　角田直行）の委託を受けた宮古市（市長　中居英太郎）の宮古市教育委員会（教育長　佐藤勇逸）が主体となり実施した。発掘調査及び本書の執筆編集には鎌田、盛合、高橋があたった。

3．遺構の平面位置は、平面直角座標第Ｘ系を座標変換したもので表示した。そのため局地的な座標系であるためＲを冠している。

座標方向――――第Ｘ系に準ずる

調査座標原点――Ｘ　－38800　Ｙ　＋97500

4．高さは、標高値をそのまま使用した。

5．遺構番号については、竪穴住居跡、土坑跡各々について縄文時代の遺構は１～９９９番、平安時代の遺構は1001番以降とした。時期不明の小ピットについてはＰ１より順次番号を付した。

6．遺物の表現については、以下の通りとした。

繊維を含む土器

敲打磨石類

7．調査及び整理、報告書の執筆に際しては、次の方々からご教示、ご指導を頂いた。記して感謝申し上げます。（敬称略）

岡村　道雄（文化庁天然記念物課）
高橋　信雄（岩手県教育委員会文化課）
佐々木　勝（　　〃　　）
小田野哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）
斉藤　邦男（　　〃　　）
熊谷　常正（岩手県立博物館）
名久井文明（　　〃　　）
佐藤　正彦（陸前高田市立博物館）
熊谷　賢　（陸前高田市在住）
八木　光則（盛岡市教育委員会）
武田　将男（宮古市教育委員会）
中嶋　隆　（宮古市在住）

目　　次

序　文
例　言
目　次
Ⅰ　調査経過
1．鍬ヶ崎館山貝塚について……1
2．調査に至る経過……2
3．調査要旨……2
4．調査体制……2
Ⅱ　遺跡をとりまく環境
1．位置と周辺の遺跡……4
2．地形・地質と遺跡の立地……4
Ⅲ　調査内容
1．遺跡の現況……8
2．調査の方法……8
3．遺構・遺物の検出状況……8
4．層序……12
5．検出した遺構・遺物……14
縄文時代の遺構・遺物……14
平安時代の遺構・遺物……64
遺構外出土遺物……81
Ⅳ　調査のまとめ
1．縄文時代の遺構について……88
2．縄文時代の遺物について……89
3．平安時代の遺構・遺物について……93

SUMMARY

挿 図 目 次

第１図　位置図……3
第２図　鍬ヶ崎館山貝塚と周辺の遺跡……5
第３図　地形分類図……6
第４図　鍬ヶ崎館山貝塚周辺地形図……7
第５図　遺跡周辺地形図……9
第６図　調査区全体図……11
第７図　層序図……13
第８図　第１号、２号竪穴……15
第９図　第１号竪穴～第７号竪穴出土遺物……16
第10図　第３号～第５号竪穴……18
第11図　第６号、７号竪穴……20
第12図　第１号炉跡、第２号炉跡……21
第13図　第１号坑跡……23
第14図　第１号土坑跡出土土器(1)……24
第15図　第１号土坑跡出土土器(2)……25
第16図　第１号土坑跡出土土器(3)……26
第17図　第１号土坑跡出土土器(4)……27
第18図　第２号、３号土坑跡……28
第19図　第２号、３号土坑跡出土土器……29
第20図　第４号、５号、６号土坑跡……32
第21図　第４号、５号、６号土坑跡……33
第22図　第５号土坑跡出土遺物……34
第23図　第５号、６号土坑跡出土土器……35
第24図　第５号、６号土坑跡出土遺物……36
第25図　第７号、８号土坑跡……37
第26図　第７号、８号土坑跡出土遺物……39
第27図　第９号土坑跡……40
第28図　第10号、11号土坑跡……42
第29図　第11号、12号土坑跡出土遺物……43
第30図　第12号土坑跡……45
第31図　第13号、14号土坑跡……46
第32図　第13号、14号、15号土坑跡出土遺物……47
第33図　第13号土坑跡出土石器……48
第34図　第15号、16号土坑跡……50
第35図　第15号土坑跡出土遺物……51

第36図　第15号土坑跡出土石器……52
第37図　第16号土坑跡出土遺物……53
第38図　第17号～22号土坑跡……54
第39図　第17号～22号土坑跡断面……55
第40図　第17号土坑跡出土遺物……56
第41図　第18号土坑跡出土土器(1)……57
第42図　第18号土坑跡出土土器(2)……58
第43図　第19号土坑跡出土遺物……60
第44図　第20号土坑跡出土遺物……61
第45図　第21号、22号土坑跡出土遺物……62
第46図　第1001号竪穴住居跡……65
第47図　第1001号竪穴住居跡カマド……66
第48図　第1001号竪穴住居跡出土遺物(1)……66
第49図　第1001号竪穴住居跡出土遺物(2)……68
第50図　第1001号竪穴住居跡出土遺物(3)……69
第51図　第1001号竪穴住居跡出土遺物(4)……70
第52図　第1002号竪穴住居跡……71
第53図　第1002号竪穴住居跡カマド……72
第54図　第1002号竪穴住居跡出土遺物(1)……74
第55図　第1002号竪穴住居跡出土遺物(2)……75
第56図　第1002号竪穴住居跡自然遺物ブロック……76
第57図　第1001号～1003号土坑跡……80
第58図　第1001号竪穴住居跡貼り床下遺物包含層出土遺物(1)……83
第59図　第1001号竪穴住居跡貼り床下遺物包含層出土遺物(2)……84
第60図　第1001号竪穴住居跡貼り床下遺物包含層出土遺物(3)……85
第61図　第1001号竪穴住居跡貼り床下遺物包含層出土遺物(4)……86
第62図　遺構外出土土器……87

写真図版目次

第１図版　鍬ヶ崎舘山貝塚航空写真
第２図版　遺跡景観、掘り上がり①
第３図版　掘り上がり③、Ａトレンチ断面
第４図版　第１号炉跡、第２号炉跡
第５図版　第１号土坑跡掘り上がり、断面
第６図版　第１号土坑跡遺物出土状況①、②
第７図版　第５号土坑跡遺物出土状況、第17号土坑跡遺物出土状況
第８図版　第15号土坑跡掘り上がり、底面の集礫状況
第９図版　第1001号竪穴住居跡掘り上がり、断面
第10図版　第1002号竪穴住居跡掘り上がり、断面
第11図版　第1002号竪穴住居跡カマド跡、断面
第12図版　第1002号竪穴住居跡製塩土器出土状況、穂摘み貝様鉄製品
第13図版　自然遺物ブロック全景、断面
第14図版　自然遺物①、②
第15図版　第１号竪穴・第１号土坑跡出土土器
第16図版　第６号・７号・15号・17号・18号出土土器
第17図版　第１号土坑跡出土土器①、②
第18図版　第１号土坑出土土器③、④
第19図版　第1002号竪穴住居跡出土土器、穂摘み貝様鉄製品
第20図版　第1002号竪穴住居跡出土製塩土器（表）、（裏）
第21図版　自然遺物ブロック出土遺物①、②
第22図版　自然遺物ブロック出土遺物③
第23図版　遺構外出土土器①、②
第24図版　遺構外出土土器③、④
第25図版　遺構外出土土器⑤、⑥
第26図版　遺構外出土土器⑦、⑧

Ⅰ　調査経過

1.　鍬ヶ崎館山貝塚について

鍬ヶ崎館山貝塚は、貝塚遺跡としては明治時代からその存在が知られており、その頃から数多くの研究者たちにより踏査され調査研究が為されて来た。中でも地元の小学校で教鞭を取っていた中嶋吉兵衛の活躍には目ざましいものがあった。

明治42年（1909）7月、当時東京帝国大学農科教授であった岸上鎌吉は、『日本史前漁業』編纂の資料収集のために当遺跡を訪れ、中嶋らと3日間の調査を実施し多くの遺物を持ち帰っている。これを機に岸上は、翌年、翌々年と計3ヶ年にわたり来跡し調査を実施した。そして岸上は、明治44年（1911）には『Prehistoric　Fishing　in　Japan』を刊行したが、この中には当遺跡から収集した釣り針などの骨角器類や自然遺物等が数多く掲載されている。（註1）また、岸上らに触発された中嶋は、明治45年（1912）には鍬ヶ崎館山貝塚の発掘調査報告書とも言うべき『先史遺物帖』（未刊）を執筆している。その中では、骨角器や土器・石器などの精密な実測図の掲載、出土遺物の分類等を行っており内容的にもすばらしいものである。（註2）更に、中嶋は大正11年（1922）に刊行された『下閉伊郡誌』においても鍬ヶ崎館山貝塚について触れており、この時点では、当遺跡のみならず郡内のほかの貝塚にも言及している。

大正13年（1923）には、当時岩手県史蹟名勝天然記然物調査会委員であった小田島禄郎と内務省考査員であった柴田常恵が当遺跡を踏査している。

昭和初期には、当時大学生であった角田文衛が発掘調査に訪れており、数多くの資料を持ち帰っている。

この後は、当遺跡に関しては目立った調査の動きは見られなくなった。

鍬ヶ崎館山貝塚から出土した資料の多くは、中嶋吉兵衛の子息である中嶋隆がその一部を所有している以外は、前述の岸上，角田等のルートで流出しており、更に、当時の東京帝国大学文学博士の坪井正五郎への寄贈等も為されており，かなりの部分が地元から流出したり散逸してしまっている。

一方、当遺跡は、その名称に〝館山〟と冠している様に中世の城館跡でもある。『東奥古傳』によれば、室町時代末頃に近能氏によって築城されたものとある。確かに現況の地形からも幾くつかの平場が形成されており城館跡と見られる。

（註1）　小田野哲憲・川村和子　「岸上鎌吉　日本先史時代の漁撈(1)、(2)」『岩手県立博物館研究報告』第2号、第3号（1984、1985）

（註2）『宮古市史　漁業・交易』宮古市教育委員会編　1981　にその一部資料が公表されている。

2. 調査に至る経過

宮古市では、昭和57年度（1982）から４ヶ年にわたり市内の遺跡詳細分布調査を実施した。その結果、約400ヶ所余の遺跡が確認され『分布調査１～４』及び遺跡台帳として『分布図86』を刊行している。

鍬ヶ崎館山貝塚は、宮古市の遺跡コードＬＧ24－2183、岩手県の遺跡コードＬＧ24－2164として登録された周知の遺跡である。当遺跡上には、昭和11年（1936）より宮古測候所が建ち、岩手県沿岸部の気象観測を行っている。

今回の発掘調査は、手狭で老朽化の著しい測候所建物の新築建て替え工事に先だち、東北地方建設局の委託を受けて宮古市教育委員会が主体となり実施したものである。また、新築建物部分以外については、芝生等を植えた庭園等に利用するということで、発掘調査は、建物建築工事によって破壊をまぬがれない部分にとどめた。

3. 調査要旨

発掘調査期間　平成元年８月21日から同年11月18日まで

発掘調査面積　575m²

整理作業期間　平成元年11月20日から平成２年３月31日まで

検出遺構　縄文時代中期から後期と推定される竪穴跡、炉跡、フラスコピット等の土坑
平安時代の竪穴住居跡、土坑跡等
所属時期不明の土坑跡、柱穴状の小ピット等

検出遺物　縄文時代早期の貝殻文土器から晩期までの各時期の土器。打製石器を中心とした石器。弥生時代の土器片。平安時代の土師器、須恵器、穂摘み具様鉄製品、製塩土器と考えられる破片。自然遺物ブロック（主に貝類だが少量ながら魚骨片や炭化した穀物粒？を含む）等が検出している。

4. 調査体制

発掘調査の体制は以下のとおりである。

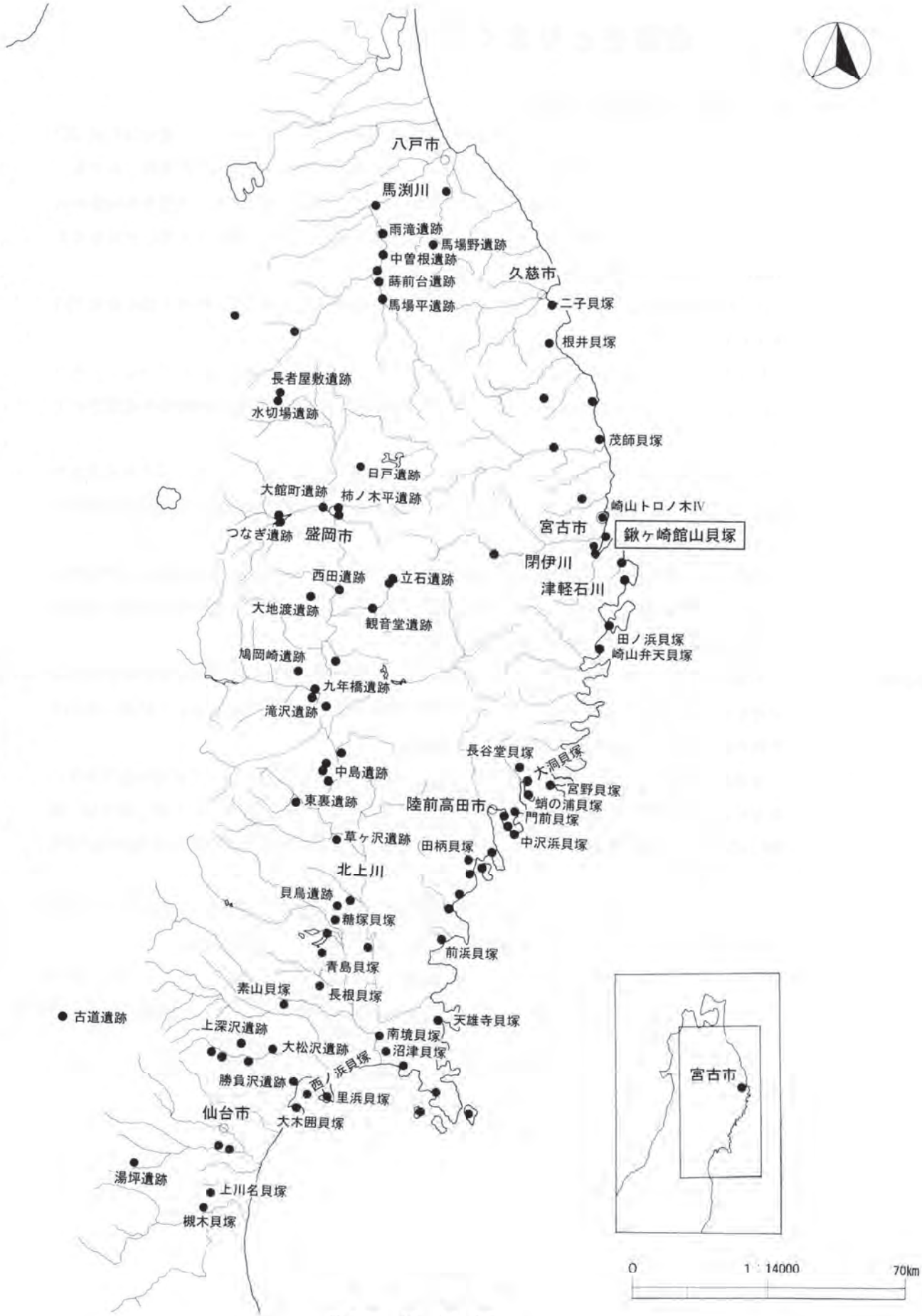
調査委託者　建設省東北地方建設局（局長　角田直行）
〃 受託者　岩手県宮古市（市長　中居英太郎）
〃 主体　宮古市教育委員会（教育長　佐藤勇逸）
〃 総括　摂待保典（宮古市教育委員会社会教育課長）
事務 〃　小本　哲（　〃　〃　係長）
調査担当者　高橋憲太郎、鎌田祐二、盛合義信（社会教育係主事）

調査にあたっては、次の各位から多大なる協力を頂いた。（敬称略）

〈発掘調査〉　村岡憲一　阿部豊　佐々木茂　北村忠治　木村博　古館友三　刈屋昭三
今津東一　小林茂　伊藤晴男　熊谷武彦　大田禪　管原テルミ　藤谷晶子

〈整理作業〉　村岡憲一　古館友三　八木由美子　山野目崇子　高橋裕子　小笠原聖子

また、発掘作業中は、宮古測候所、三陸国道事務所、近藤建設をはじめとする関係各位のご協力とご理解を頂いた。


八戸市
馬渕川
雨滝遺跡
馬場野遺跡
中曽根遺跡
蒔前台遺跡
馬場平遺跡
久慈市
二子貝塚
根井貝塚
長者屋敷遺跡
水切場遺跡
茂師貝塚
日戸遺跡
大館町遺跡
柿ノ木平遺跡
つなぎ遺跡
盛岡市
崎山トロノ木Ⅳ
宮古市
鍬ヶ崎館山貝塚
閉伊川
津軽石川
西田遺跡
立石遺跡
大地渡遺跡
観音堂遺跡
田ノ浜貝塚
崎山弁天貝塚
鳩岡崎遺跡
九年橋遺跡
滝沢遺跡
長谷堂貝塚
大洞貝塚
中島遺跡
宮野貝塚
東裏遺跡
陸前高田市
蛸の浦貝塚
門前貝塚
草ヶ沢遺跡
田柄貝塚
中沢浜貝塚
北上川
貝鳥遺跡
糠塚貝塚
前浜貝塚
青島貝塚
素山貝塚
長根貝塚
古道遺跡
天雄寺貝塚
上深沢遺跡
南境貝塚
大松沢遺跡
沼津貝塚
西ノ浜貝塚
勝負沢遺跡
里浜貝塚
仙台市
大木囲貝塚
湯坪遺跡
上川名貝塚
槻木貝塚
宮古市
0
1 : 14000
70km

第1図 位 置 図

Ⅱ　遺跡をとりまく環境

1.　位置と周辺の遺跡

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央部に位置し北緯39°29′43″～39°43′23″、東経141°45′20″～142°04′44″にあり、総面積338.74㎢をはかる。市内重茂半島鮭ヶ崎は本州最東端にあたる。重茂半島は、太平洋をさえぎる様に北東方向に突き出ておりその西側には、奥行き9㎞程の宮古湾が形成されている。宮古湾には、西方の北上山地に源を発する閉伊川と湾奥に河口を有す津軽石川の二大河川が流入する。

鍬ヶ崎館山貝塚は、閉伊川の北側に形成された市街地のやや北東部、宮古湾を臨む台地上に位置する。

宮古市内の約400ヶ所余の遺跡のうち貝塚は7ヶ所、城館跡は30ヶ所知られているが、それらについては、各々『宮古地方史研究4』(註1)、『金浜館跡』(註2)に位置、立地等の概略が掲載されている。

鍬ヶ崎館山貝塚を含む鍬ヶ崎地区は、直接、宮古湾を臨む地にあり、また、古くから栄えた港町ということもあり、現在では、急傾斜地にも民家が建てられている程、市街地化の著しいところでもある。

そのため、現在の所、確認されている遺跡も、わずかに残された尾根部や台地上、民家のあい間に存在する畑地、空地に認められるだけである。これらの中でも、比較的広範囲に遺物の分布が確認されているのが、当遺跡である。

千徳丘陵

当遺跡は、地形的には、閉伊川の北側に存在する樹枝状に開析された千徳丘陵の最東端部に立地する。地質的には、中世代に貫入した花崗岩体がその基盤をなしている。この点において北側の海岸沿いに広がる小本丘陵と異なっている。

当遺跡の東側は、海に面する崖となっており、北西側、南側は沢によって区切られており、東方に突出する格好となっている。西側は、国道45号線により開削されているが、元々は、西側に広がる丘陵部に続くもので、中世の城館としては、西側に存在する黒田館との関連が考えられている。

いずれにせよ、当遺跡は、東は海に、南は閉伊川に面し、西は、丘陵から山麓が広がっており食料獲得などにはかなり有利な立地条件を兼ね備えていたものと考えられる。

（註1）　「宮古市磯鶏蝦夷森貝塚出土の資料」本文 2.宮古市内の貝塚遺跡　『宮古地方史研究』第四号　宮古地方史研究会編　1987

（註2）　『金浜館跡』宮古市教育委員会　1985

第２図　鍬ヶ崎館山貝塚と周辺の遺跡

小本丘陵
女遊戸
中ノ浜
宿
黒森山山地
日出島
日出島
大沢
蛸の浜
鍬ヶ崎館山貝塚
千徳丘陵
閉伊川底地
閉井川
花輪山山地
八木沢丘陵
八木沢
鮭ヶ崎丘陵
十二神山山地
0 1 5000 1000m
中起伏山地
小起伏山地
丘陵地
砂礫段丘土
山麓および他の緩斜面
崖錐性扇状地
P 谷底平野及び氾濫平野
D 人工改変地

第3図　地形分類図

第４図　鍬ヶ崎館山貝塚周辺地形図

Ⅲ　調査内容

1.　遺跡の現況

現況

鍬ヶ崎館山貝塚の現況は、既述の通りかなりの部分に人工的な手が加わっており遺跡の保存状況としては良好とは言い難い。まず、遺跡の西側は国道45号線により開削されており、北から東側は切り盛り土により宅地化が進行し、南西の斜面部は墓地化してしまっている。そして、遺跡の中心部の平場上には宮古測候所及び付帯の宿舎等の建物が所在する。

中世の城館

台地上の平場は、元来は中世（室町時代末と言われている）に城館（鍬ヶ崎館）を築く際に形成されたものと考えられる。平場は、現在宮古測候所建物が建つ標高約45ｍの中央部の平場、この大きな平場を北東から南側に取り囲む標高約43ｍの平場、南側の一部に形成されている標高約39ｍの平場の３つに分けられる。中央部の平場は、長軸約70ｍ、短軸で約35ｍをはかるもので、今回の発掘調査区はこの平場の北西部にあたる。この大きな平場は、西から東側に向かってかなり削平（西側）され盛土（東側）されているが、この造成工事が現在の測候所建設によるものなのか、中世の城館構築によるものなのかは今回の調査だけでは判断がつかなかった。また、この中央部の周りに形成された平場については、民家等が建っており不明だが昭和55年（1980）に測候所々員が一部ゴミ捨て穴を掘った際にイノシシの下顎骨等が出土しており、この平場から斜面部にかけては貝塚に伴う遺物が残っている可能性が高い地点も有る。

イノシシの下顎骨

北貝塚

貝塚は、北、東、南貝塚が存在するといわれているが、現状を見る限りにおいては、北貝塚地点は宅地化しており、わずかに残っている斜面の畑地でマグロ椎骨等の自然遺物が拾える。（註１）

南貝塚

南貝塚は墓地造成等で墓所化している。南貝塚の斜面部は雑木等が密集しており貝塚の保存されている可能性が高いが、平場形成時に土砂等が押し出されている事も考えられるが、現地表面上には露出していない。

（註１）　中島隆氏によれば、以前、地元民により南貝塚（？）の一部が掘られた際に多量の鯨骨が出土したという事を聞き、実際、中島自身が鯨骨と確認した、という。

2.　調査の方法

発掘調査は、建物建設予定範囲（５７５㎡）についてのみ実施した。調査は、現場の地形に合わせた任意の座標軸を設定し、これに基づいた３ｍ四方の小グリットを設けて実施した。粗掘り及び遺構検出時までに出土した遺物は、この各小グリットごとに取り上げた。

座標系原点

また、調査期間中に公共座標（平面直角座標第Ｘ系）に基づいた基準点を移設した。そして、調査終了後の整理作業の段階において鍬ヶ崎館山貝塚の中心部付近を原点とする局地的な座標系を作り報告書に用いた。その座標系の原点は、Ｘ＝－38800、Ｙ＝＋97500である。

3.　遺構・遺物の検出状況

遺構の重複

今回の調査対象区は、遺跡全体の広がりの中のほぼ中央部のやや西寄りに位置し国道45号線に近接する。調査区の西側半分は、旧測候所建物建設工事等による攪乱が著しくほとんど遺構は検出されなかった。遺構の大半は調査区の東側半分に検出したが、平安時代と縄文時代、縄文時代同士の遺構の重複が著しく当台地の利用度が高かったことが考えられる。

第５図　遺跡周辺地形図（１：500）

RY−30
RX−50
RY−20
RX−60
RY−20
RX−70
RY−40
RX−50
RY−30
RY−50
RY−40
RX−80
RX−60
RX−70
RY−50
第22号土壙跡
第21号土壙跡
第15号土壙跡
第18号土壙跡
第19号土壙跡
第13号土壙跡
第20号土壙跡
第17号土壙跡
第12号土壙跡
第1002号竪穴住居跡
第1001号土壙跡
第1001号竪穴住居跡
第11号土壙跡
第10号土壙跡
第9号土壙跡
第7号土壙跡
第1号竪穴
第8号土壙跡
第5号土壙跡
第6号土壙跡
第4号土壙跡
第6号竪穴跡
第7号竪穴跡
第1号土壙跡
第2号土壙跡
第3号土壙跡
0
1:150
5m

第６図　調査区全体図

4. 層　序

層序

今回の調査区の層序は、調査区中央に設定した土層観察用ベルト、調査区の北・南・東壁の土層及び台地東端部のAトレンチ、第1001号竪穴住居跡の貼り床下に存在する遺物包含層の土層観察結果を記述したもので、遺跡全体の層序を把握したものではない。今回の調査では遺跡全体の層序を把えることは出来なかった。

① 調査区中央ベルト、調査区各壁各壁及びAトレンチの層序

Ⅰ層　表土層。非常にやわらかくてしまりのない黒褐色の腐葉土層。

Ⅱ層　盛土層。暗褐色～褐色～灰白色を呈す砂質の全くしまりのない土層。黄褐色土や地盤の花崗岩の風化土（真砂土）を塊状に含み、Aトレンチ方向程厚く堆積する。Aトレンチ内では層厚約1.2mをはかる。上部のⅡa、Ⅱb層中には、コンクリート塊やジャリ石等が含まれており明らかに現代の工事による盛土と考えられるが、以下のⅡc、Ⅱe Ⅱd層に関しては、Aトレンチだけの調査結果では城館構築によるものなのか、それともⅡa、Ⅱb層と同じ性格のものなのかは判断しかねたが、次のⅢ層が動かされていない旧表土層と考えられることからⅡc～d層は、城館構築時の盛土層の可能性が考えられる。なお、調査区の西半は削平によりⅡ層以下は認められず、Ⅰ層下即Ⅴ層の地山面である。

Ⅲ層　旧表土層。暗褐色～褐色を呈すやや固さ、しまりのあるシルト質土層。Aトレンチ内で層厚0.2mをはかる。土器片等の遺物を含むが、調査区中央から東壁側のⅡ層の薄い所では、現代の磁器片やガラス片等を含む。Aトレンチ内の地山面では、Ⅲ層土を埋土とする落ち込みが認められた（未精査）。

Ⅳ層　ややしまりのある黒褐色を呈すシルト質土層で真砂土粒子を大量に含む。調査区の南東側と北側の第1001号竪穴住居跡付近に認められ、中央部にはほとんど認められない。平安時代の竪穴住居跡の埋土となっており、Ⅳ層中からは、土師器・須恵器片のほかに弥生時代、縄文時代中期～晩期にかけての土器片等を検出している。

Ⅴ層　地山及び地山漸移層。黄褐色～灰白色を呈す花崗岩面に至る土層。縄文時代の遺構はすべてこの面で検出した。

② 第1001号竪穴住居跡貼り床下の遺物包含層

第1001号竪穴住居跡が位置する調査区の北東側は、急な洞状の地形となっており土層観察ベルトを設定しその一部を掘り下げた。

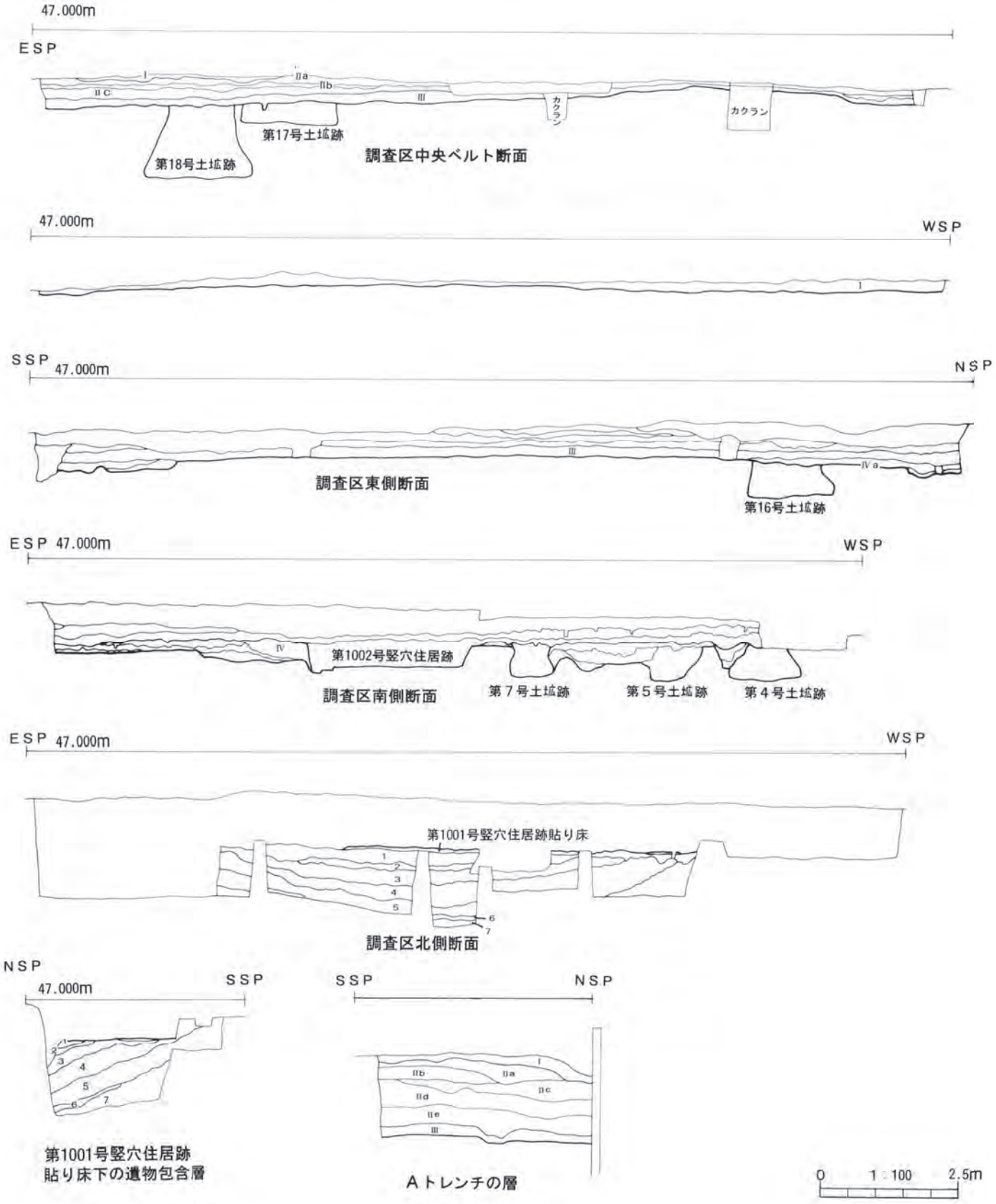
1層　暗褐色を呈す固さ、しまりのある土層。炭化物粒子を含み、縄文時代の土器、石器等の遺物を包含する。

2層　褐色を呈す粘性のある土層。固く比較的しまりを有し、炭化物粒子や焼土粒、塊が多く認められる。

3層　黒褐色を呈す固くしまりのある土層。炭化物粒子を含むが1、2層程ではない。土器片等の遺物も少なくなる。

4層　黄褐色を呈す土層。比較的固くしまっている。

5層　やや明るい黄褐色土層。比較的固くしまっている。


47.000m
ESP
I
IIa
IIb
IIc
III
カクラン
カクラン
第17号土坑跡
第18号土坑跡
調査区中央ベルト断面
47.000m
WSP
I
SSP
47.000m
NSP
III
IVa
調査区東側断面
第16号土坑跡
ESP 47.000m
WSP
IV
第1002号竪穴住居跡
調査区南側断面
第7号土坑跡
第5号土坑跡
第4号土坑跡
ESP 47.000m
WSP
第1001号竪穴住居跡貼り床
1
2
3
4
5
6
7
調査区北側断面
NSP
47.000m
SSP
1
2
3
4
5
6
7
第1001号竪穴住居跡
貼り床下の遺物包含層
SSP
NSP
I
IIa
IIb
IIc
IId
IIe
III
Aトレンチの層
0
1:100
2.5m

第7図 層 序 図

6層　暗褐色を呈す土層。やわらかくしまりがない層厚の薄い層

7層　明黄褐色を呈す土層。

以上の1～7層のうち、遺物を包含するのは1～3層までで4層以下からは検出しなかった。出土した土器片は、縄文時代早期の貝殻文土器、縄文一縄文土器、微隆起線文土器及び前期初頭期のものだが、明確な層位関係は把握できなかった。

5.　検出した遺構・遺物

検出した遺構・遺物は、縄文時代の竪穴跡、土坑跡、平安時代の竪穴住居跡等があるが、縄文時代の竪穴跡から記述する。

第1号竪穴跡（第8、9図）

重複　調査区の中央からやや南東側に位置する。第2号竪穴跡、第8号土坑跡と重複するが、これらよりも新しい時期のものである。

平面形、規模　平面形は不整な楕円形状を呈す。規模は長軸2.65m、短軸2.35mをはかる。壁は床面から幾分傾斜をもち立ち上がり、壁高は西壁側で0.25mをはかる。

埋土　埋土は、暗褐色のシルト質土を基本土とするA層から成りA1～A3層に細分される。A1層は、竪穴の上部全面を覆うもので若干しまりがあるが固さはない。A2層は、やや砂っぽく黄褐色土を粒塊状に少量ながら混入する。やわらかくてしまりがない。A3層は、西壁付近に堆積するものでやや暗い土である。

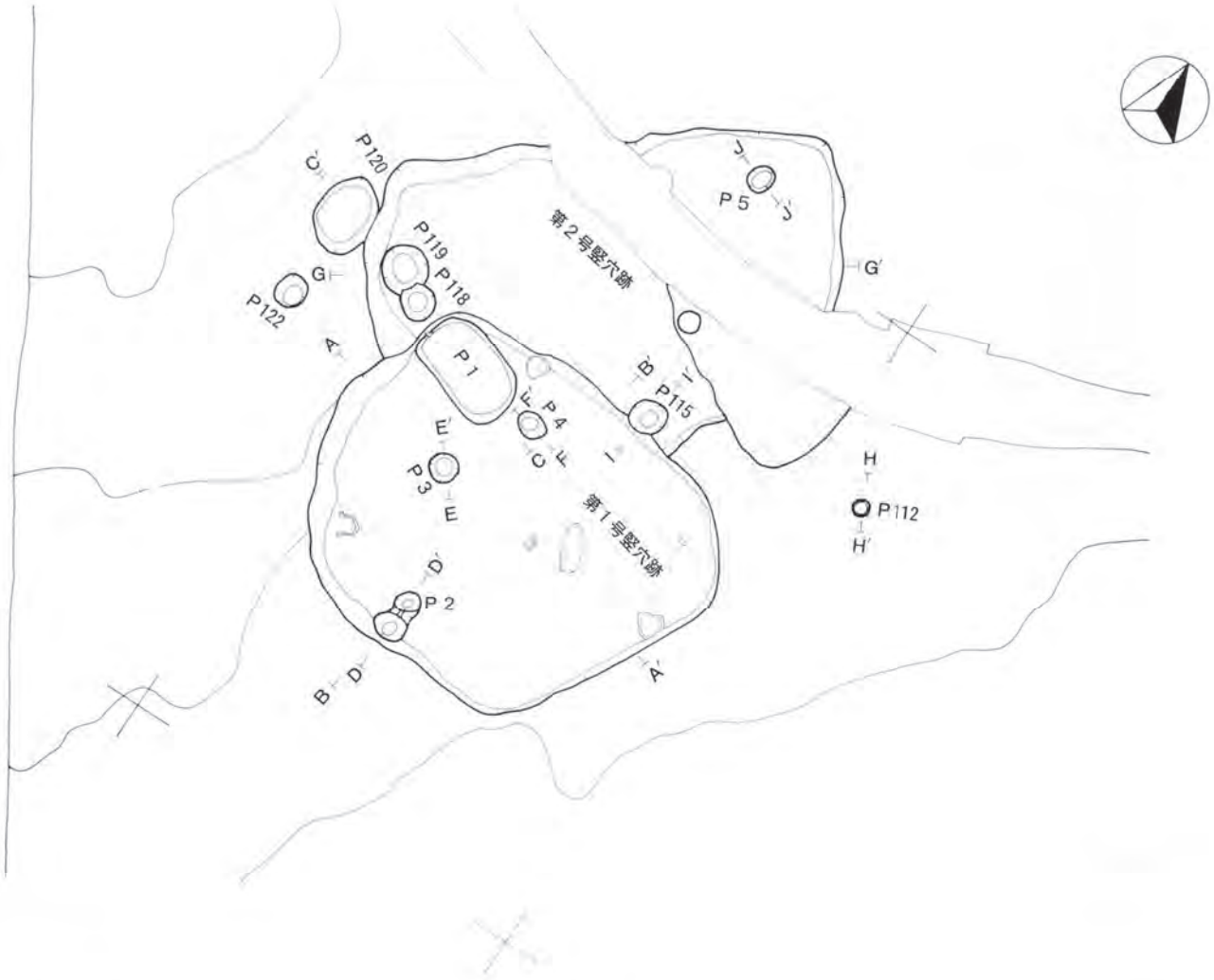
床面　床面は、地山の花崗岩を掘り込んだ比較的固くしまった平坦面をそのまま利用している。北壁際床面には、0.75×0.45mの浅い皿状の楕円形ピットが存在する。

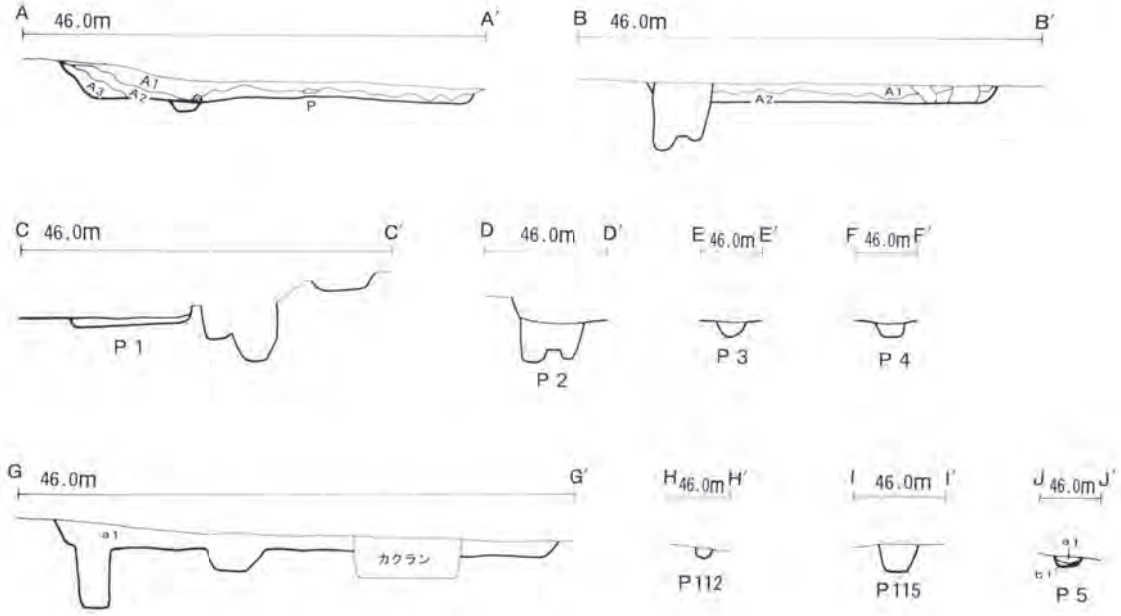
柱穴状のピットは、P1とP2を検出したが、いずれも直径0.2m弱の深さ0.1m前後の浅く小規模なものである。

遺物の出土量は多くない。埋土が薄いこともありほとんどが床面もしくは直上からの出土である。

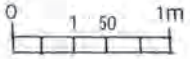
土器　第9図1～8が第1号竪穴から出土したものである。1は、口縁部がゆるく外反し胴部がふくらむ小形の深鉢で4波状口縁を呈す。口縁部文様帯は、波頂部を中心として隆起線で長方形に4区画しただけで、区画内は横回転の縄文（LR）を施文するのみである。4つの区画は連結せずに独立する。胴部から底部にかけては縦回転の縄文（LR）を施文するだけで他の文様要素は入らない。2は、口縁部が強く外傾するもので4個の小突起を有す。その小突起下には未発達の渦巻文を配す。3は、波状口縁を呈するもので波頂部にすかしを入れる。口縁上部には楕円状に原体圧痕文を施しその下には隆沈線により楕円形の区画を作るもの。4は、山形口縁を呈するもので口唇部に刻目を施す。口縁上部には山形状の沈線を施文する。5は、沈線と刺突、7は口縁に平行に沈線を施すもの。6は底部片で網代痕を有す。6と9は同一個体と考えられる。

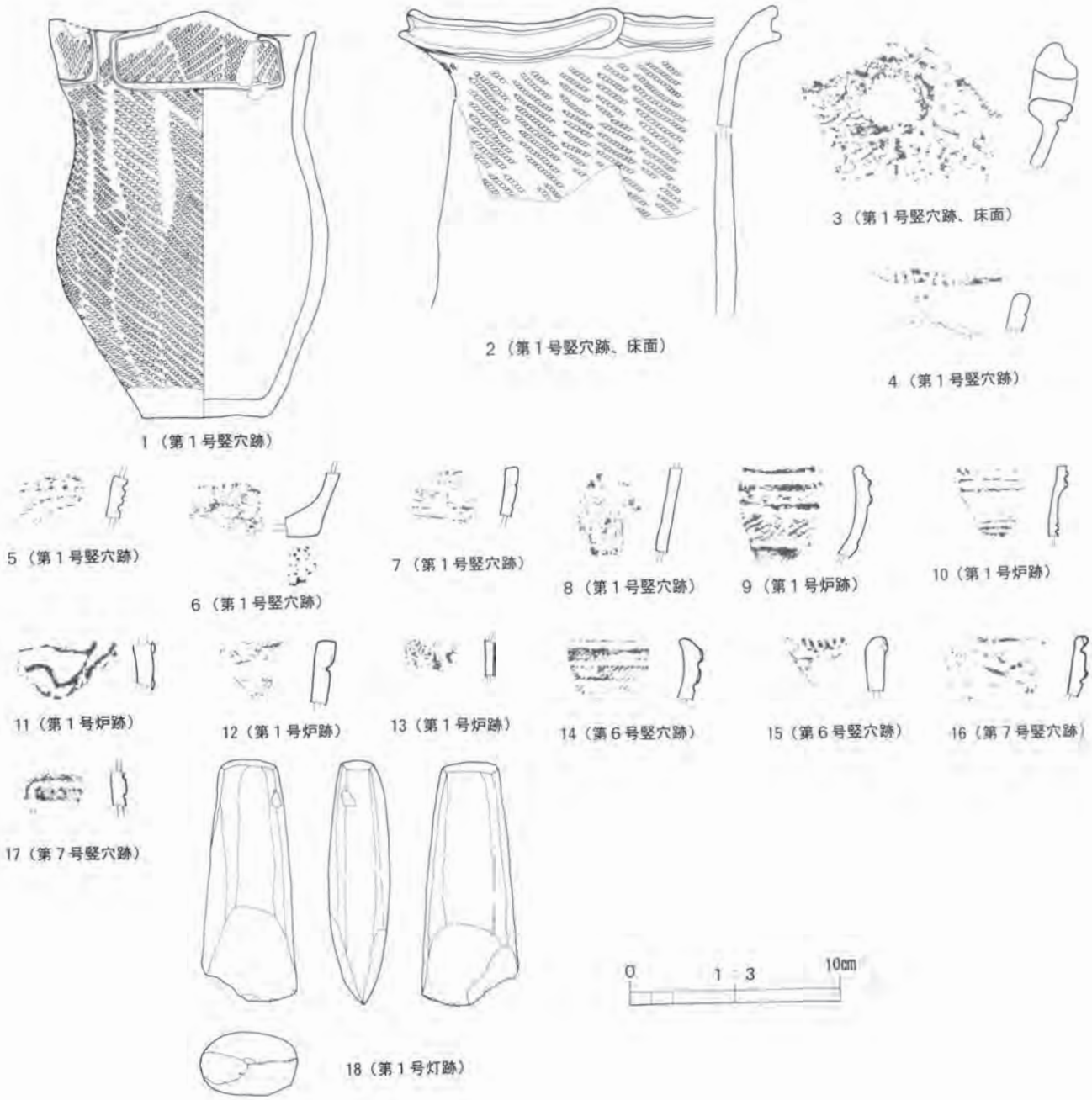
（註）　竪穴跡…形態的には、炉跡が存在しないだけで竪穴住居跡と考えられるが、炉跡・柱穴跡がなく小規模なものが多いということで竪穴跡とした。





第8図　第1号、2号竪穴跡





第９図　第１号竪穴跡～第７号竪穴跡出土遺物

第２号竪穴跡（第８図）

第１号竪穴跡と第10号土坑跡と重複するが、第１号竪穴跡よりも古いが第10号土坑跡との新旧関係は把握できなかった。 **重複**

平面形は、ほぼ長方形を呈す。規模は、長軸3.25ｍ、短軸2.10ｍ以上をはかる。壁は、床面からやや傾斜をもち立ち上がり、壁高は西側壁で0.15ｍをはかる。 **平面形、規模**

埋土は、暗褐色のシルト質土を基本土とするが少し砂っぽい所もある。全体的にやわらかくてしまっていない。 **埋土**

床面は、地山の花崗岩を掘り込んだ平坦面で比較的固くしまっている。 **床面**

柱穴状のピットはＰ１～Ｐ４が存在するが、すべて当竪穴跡に伴なうものかは不明である。

遺物は、ほとんど出土しておらず図示できるものはない。

第３号竪穴跡（第10図）

調査区の南東側に位置する。第４号竪穴跡と重複するがこれより古い。また、平安時代の第1002号竪穴住居跡に大半部分が消失しており全容は不明である。 **重複**

平面形は、残存部分から方形～隅丸方形状を呈するものと推定される。北壁隅が張り出す。

埋土は、にぶい黄褐色の砂質をを基本土とする。黒褐色～黒色のシルト質土を塊粒状に混入する。やわらかくてしまりなし。 **埋土**

床面は、地山面をそのまま利用しており比較的固くしまっている。 **床面**

柱穴状のピットは、北側隅にＰ１、Ｐ２を検出したが、どちらも浅く小規模なものである。

遺物は、極小片が少量出土しているが図示可能なものはない。

第４号竪穴跡（第10図）

第３号竪穴跡のすぐ南に位置するが、第３号竪穴跡より新しいが、北西壁の一部しか検出できず全容は把握できなかった。 **重複**

埋土は、第３号竪穴跡の埋土よりも少し暗いにぶい黄褐色の砂質土を基本土とする。やわらかくしまりがない。 **埋土**

床面は、地山面をそのまま利用するものでレベル的には第３号竪穴跡より幾分低い。 **床面**

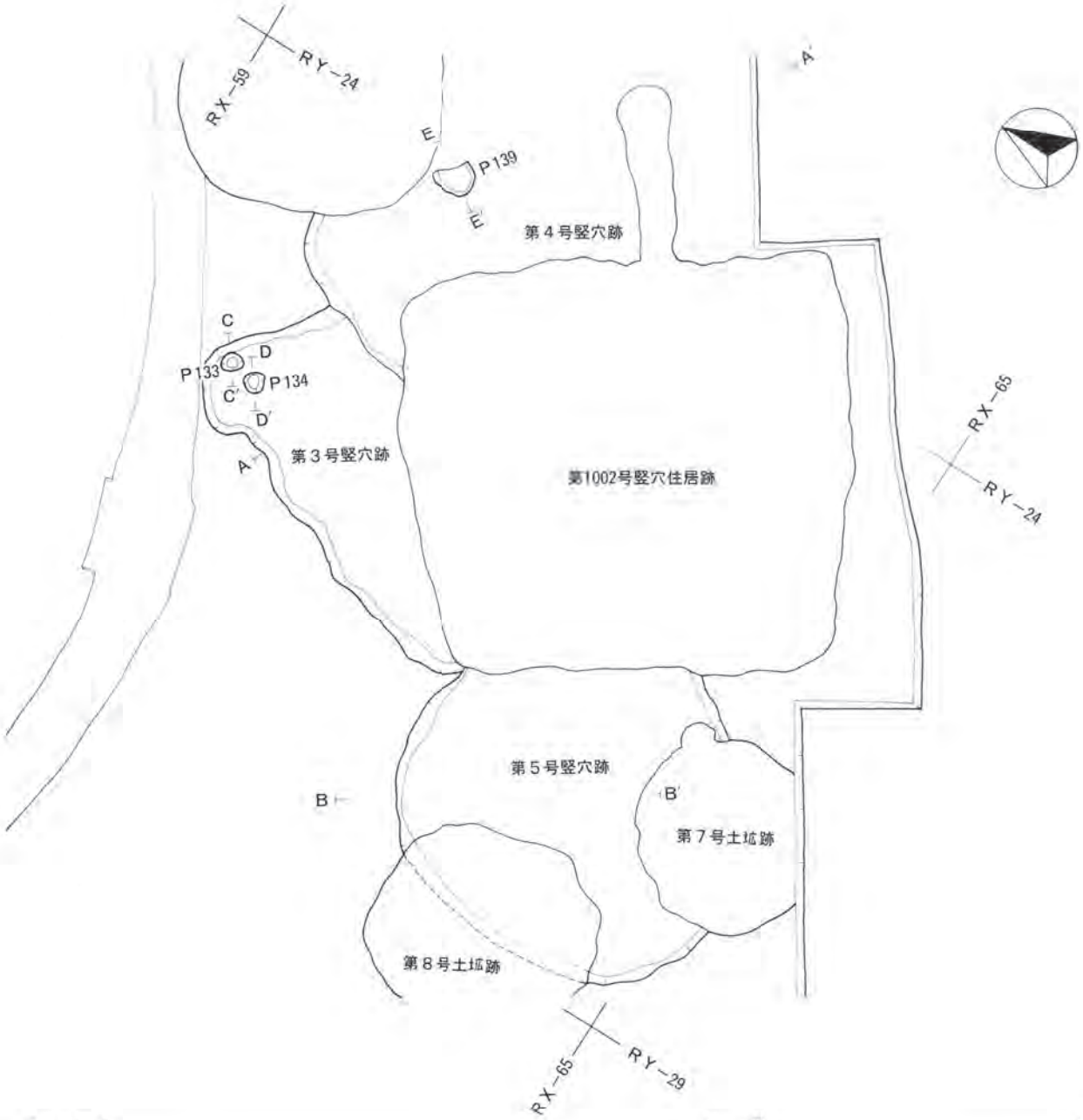
遺物も第３号竪穴跡同様に極小片が中心である。

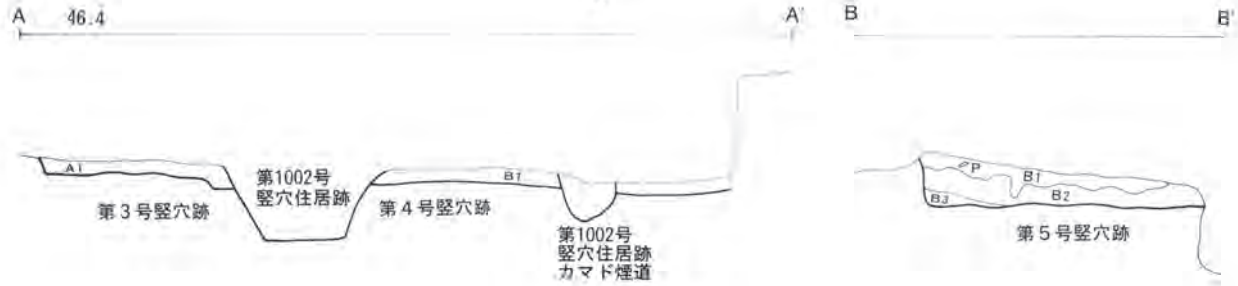
第５号竪穴跡（第10図）

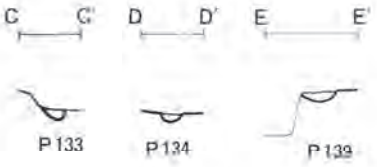
第１号竪穴跡、第７号、第８号土坑跡、第1002号竪穴住居跡と重複するが、第８号土坑跡より新しく第７号土坑跡、第1002号竪穴住居跡に切られる。第１号竪穴跡との新旧は、北壁の一部が重なり合うだけのため把握できなかった。 **重複**

平面形は、直径２.６ｍをはかるほぼ円形プランを呈するものと推定される。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がり壁高は北壁側で０.３ｍをはかる。 **平面形、規模**

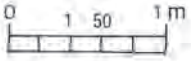
埋土は、暗褐色～にぶい黄褐色の砂質土を基本土とするＢ層から成り、Ｂ1～Ｂ3層に細分される。B1層は、真砂土粒子を多量に混入するやや固さ、しまりをもつ。Ｂ2層は、Ｂ1層より明るい土で比較的固さ、しまりを有す。少量ながら炭化物粒子が認められる。B3層は、Ｂ層中最 **埋土**







第10図　第３号〜第５号竪穴跡



も砂質が強く、にぶい黄褐色を呈す。固さ、しまりともに欠く。壁際を中心として堆積する。

床面は、やはり地山の花崗岩を掘り込んだ比較的固くしまった平坦面である。床面上には、柱穴状のピット等は確認できなかった。 **床面**

遺物は、埋土中より若干出土しているが小片のため詳細は不明である。

第６号竪穴跡（第11図）

調査区のほぼ中央部に位置する。第７号竪穴跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は、東側が攪乱により破壊されており全容は不明だが楕円形から円形を呈するものと推定される。規模は、南北で2.3ｍをはかる。壁は床面からほぼ直に立ち上がり壁高は0.15ｍをはかる。 **平面形、規模**

埋土は、にぶい黄褐色の砂質の強い土を基本土とする。黒色～黒褐色土を塊粒状に混入する。固く比較的しまっている。 **埋土**

床面は、地山の花崗岩を掘り込んだ固くしまった平坦面である。床面はレベル的には第７号竪穴よりも少し高くなる。 **床面**

遺物は、埋土中より若干出土しているが、極小片が中心で図示できたのは第９図(16ページ)の14、15の２点である。14は、縄文施文後に口縁に対し平行沈線を施文したもので、内わんの弱いキャリパー形になるものと思われる。15は、口縁部上端を肥厚化させた上に刻目を施文するもの。

第７号竪穴跡（第11図）

第６号竪穴跡と重複するが、新旧関係は把握できなかった。

平面形及び規模は、東側が攪乱されており全容は不明である。壁は、床面からゆるやかに立ち上がり壁高0.25ｍをはかる。

埋土は、にぶい暗褐色の砂質土を基本土とするが、第６号竪穴の埋土よりも明るい色を呈すものである。焼土や炭化物粒子が少量ながら認められる。比較的固くしまっている。 **埋土**

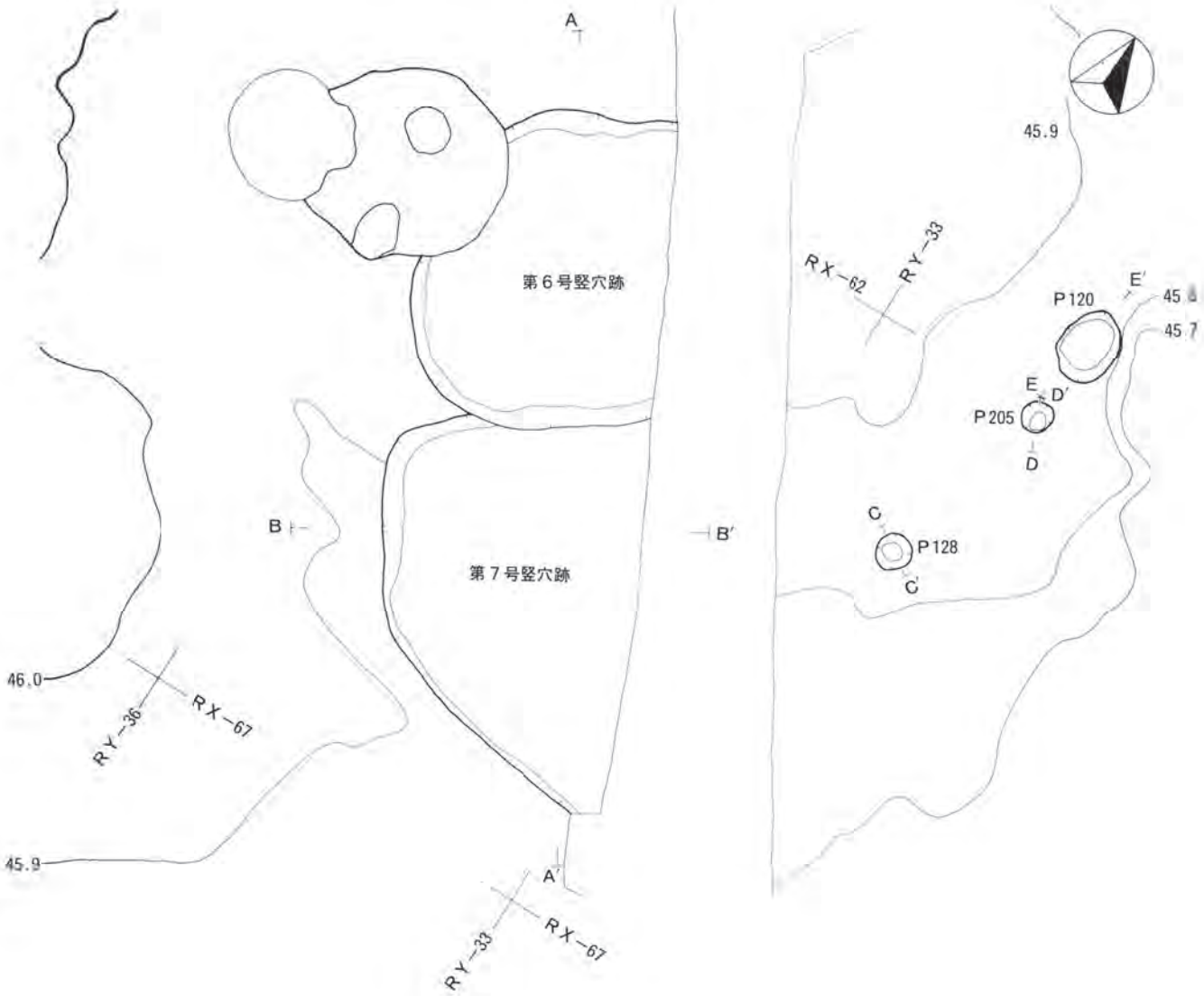
床面は、第6号竪穴跡同様に地山面を掘り込んだ固くしまった平坦面である。レベル的には第６号竪穴跡よりも低くなる。 **床面**

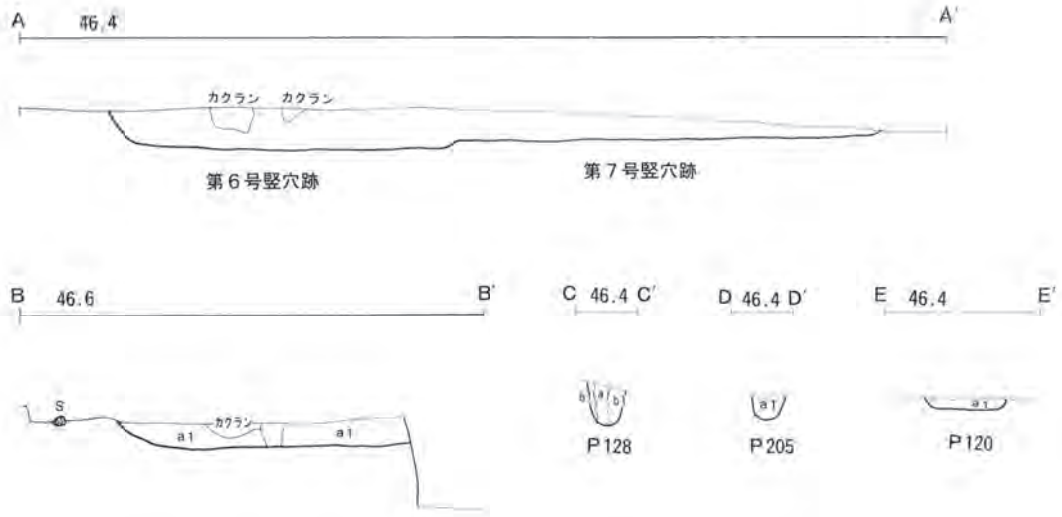
遺物は、少量ながら出土しているが図示できたのは、第９図（16ページ）の16、17の２点である。16は、隆起線に原体圧痕文を施文するもので内わんの弱いキャリパー形になるものか。17もキャリパー形土器の口縁部片と考えられるもの。沈線で楕円形の区画をするものである。 **土器**

第１号炉跡（第12図）

調査区の中央北側に位置する。元々は、竪穴住居跡に伴うものであったと考えられるが、削平により床面がとばされて石囲いのみだけが残ったと考えられる。

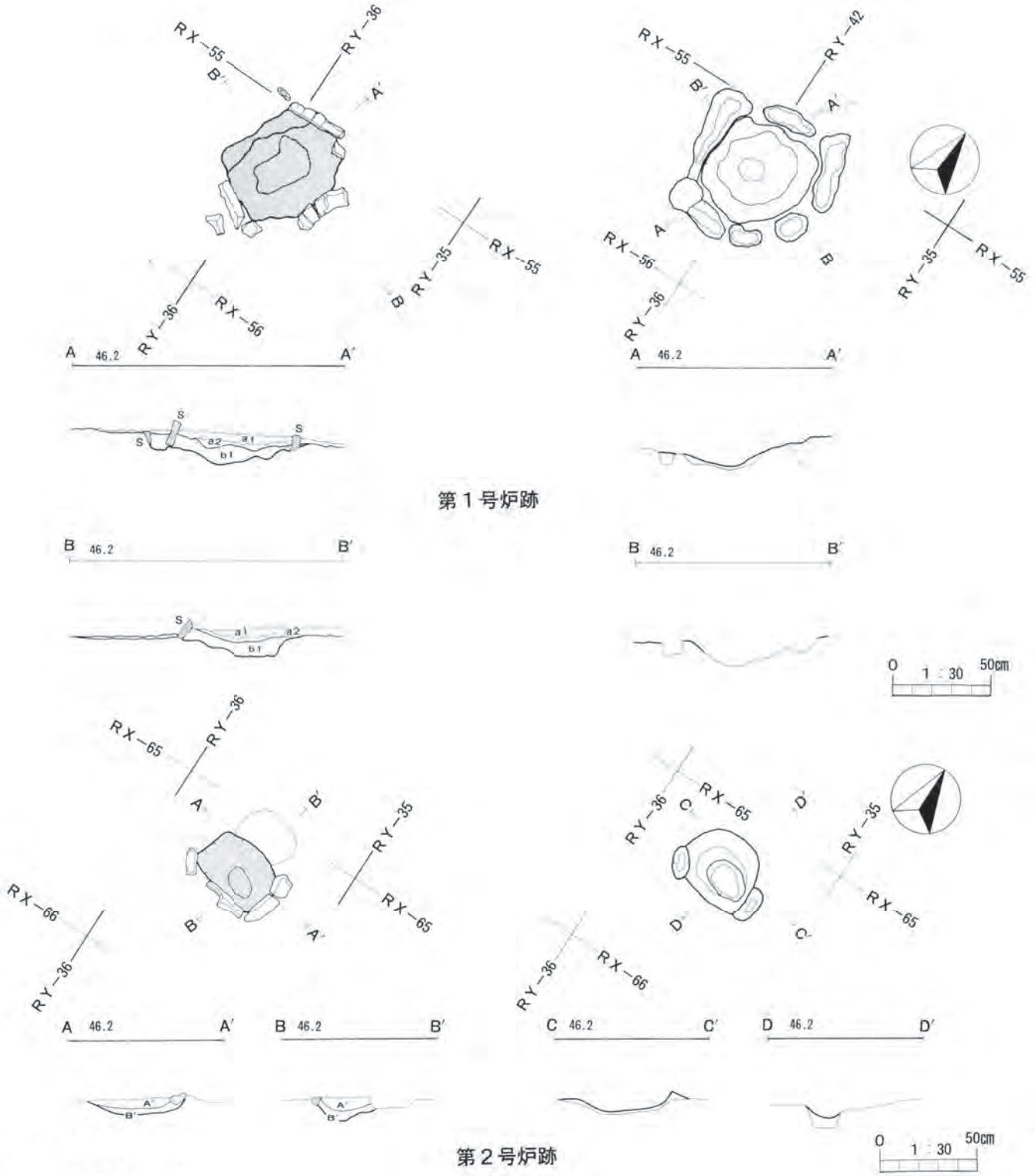
炉は、東西0.5、南北0.7ｍをはかる方形プランを呈すが、西側の石は削平時にぬけたか、ぬき取られたかして存在しない。石は、長方形の細長い礫（花崗岩）でかなり強く焼成を受けたため、もろく崩れやすくなっている。火床面は周りの地山面（床面？）よりも0.15ｍ弱低くなっている。 **規模**





第11図　第６号、７号竪穴跡

0　1:150　1m



第１号炉跡

第２号炉跡

第12図　第１号炉跡、第２号炉跡

埋土

石囲い炉の埋土は３層に分かれ，Ｂ層とＣ層の層位面が火床面で良く焼けている。特に、Ｂ層は良く焼けた焼土の層でこの焼土をふるいにかけると極く少量ながら焼けた貝殻片、骨片が含まれていた。

遺物は、この石囲炉の埋土中より僅かに出土している。第９図（16ページ）の９～13である。９はキャリパー形土器の口縁部で隆沈線による文様を施文するもの。頸部の一部が見られるが無文となるものか。10は口縁部下部から頸部にかけての破片で、頸部が無文となるもの。11は隆線により文様を施文する。12は口縁部片で、口縁部上端が肥厚するもの。

18は、磨製石斧。丁寧に両面とも研磨されており、刃部には使用による破損の剥離が認められる。

第２号炉跡（第12図）

炉跡は、東西０.５ｍ、南北０.７ｍをはかる方形プランを呈するが、北側～西側の石は存在しない。石は、細長い礫（花崗岩）でかなりもろくなっている。削平が著しく詳細は不明である。遺物は出土しなかった。

第１号土壙跡（第13図）

調査のほぼ中央部に位置する。削平された地山面上で検出した。

平面形
規模

平面形は、上場では東西に長い楕円形状を呈すが、下場では南側が幾分ふくらむ円形ものである。規模は、上場で1.8×1.45ｍ、下場で直径1.9ｍをはかる。壁はフラスコ状を呈すが、底面から０.４ｍ位の所からは直線的に立ち上がっている。検出面からの深さは、0.95ｍをはかる。

埋土

埋土は、Ａ層、Ｂ層に大別される。Ａ層は、焼土と炭化物粒子を多量に含む暗褐色土を基本土とする土層で、焼土、炭化物粒子を層～塊状に堆積する。人為的に投棄されたものと考えられ、多量の土器片を含む。また、Ａ層の焼土サンプルをふるい分けした所、焼けた細かい骨片（主に魚の棘）が検出された。Ｂ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土としＢ１、Ｂ２層に細分される。Ｂ１層の方がやや明るい土である。また、Ｂ１、Ｂ２層とも粒子が粗くかなり砂に近く、全く固さ、しまりがない。土器等の遺物もほとんど含まれない。

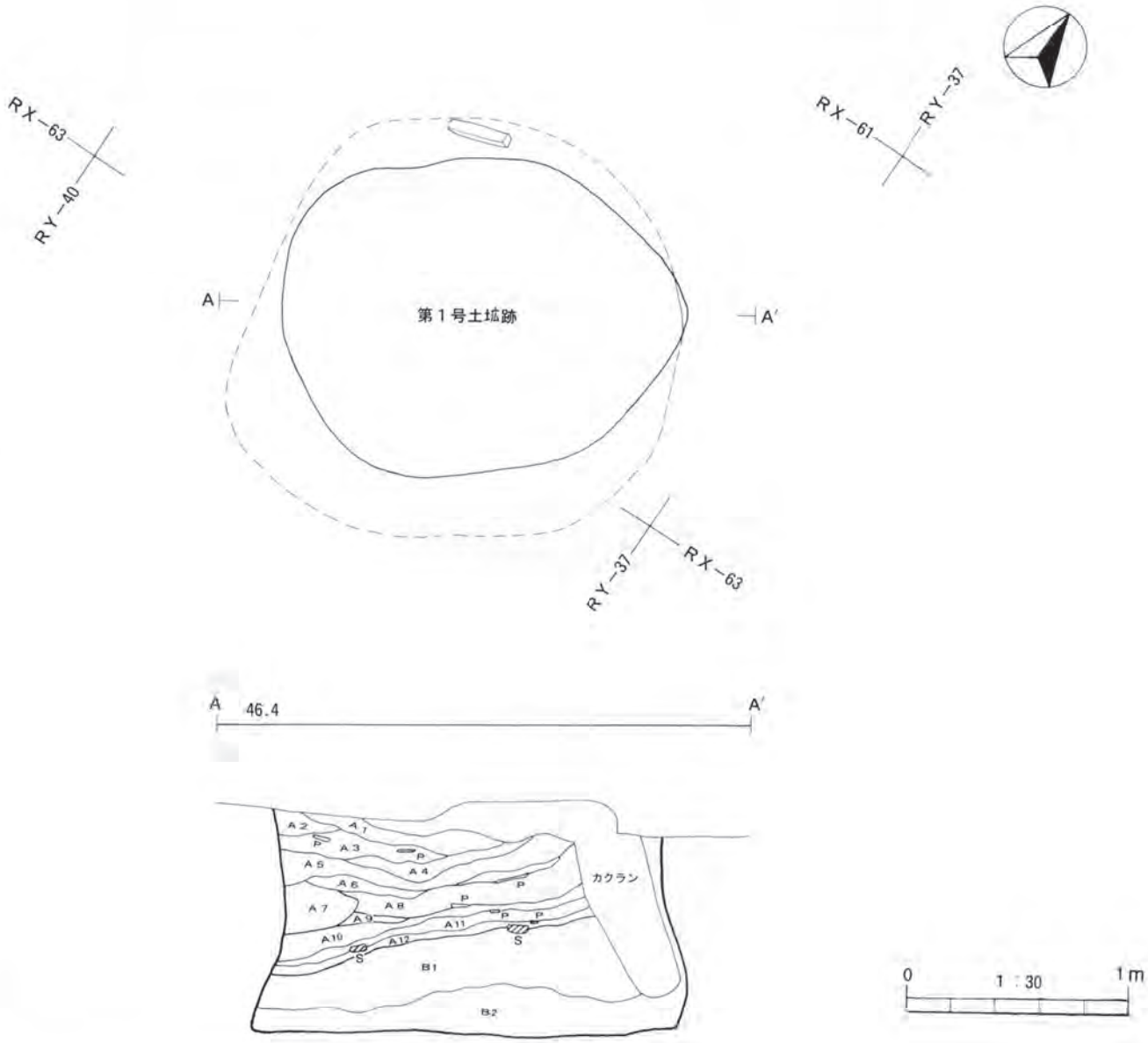
底面

底面は、花崗岩を掘り込んだ平坦面で固い。底面上にはピット等の施設はみられない。

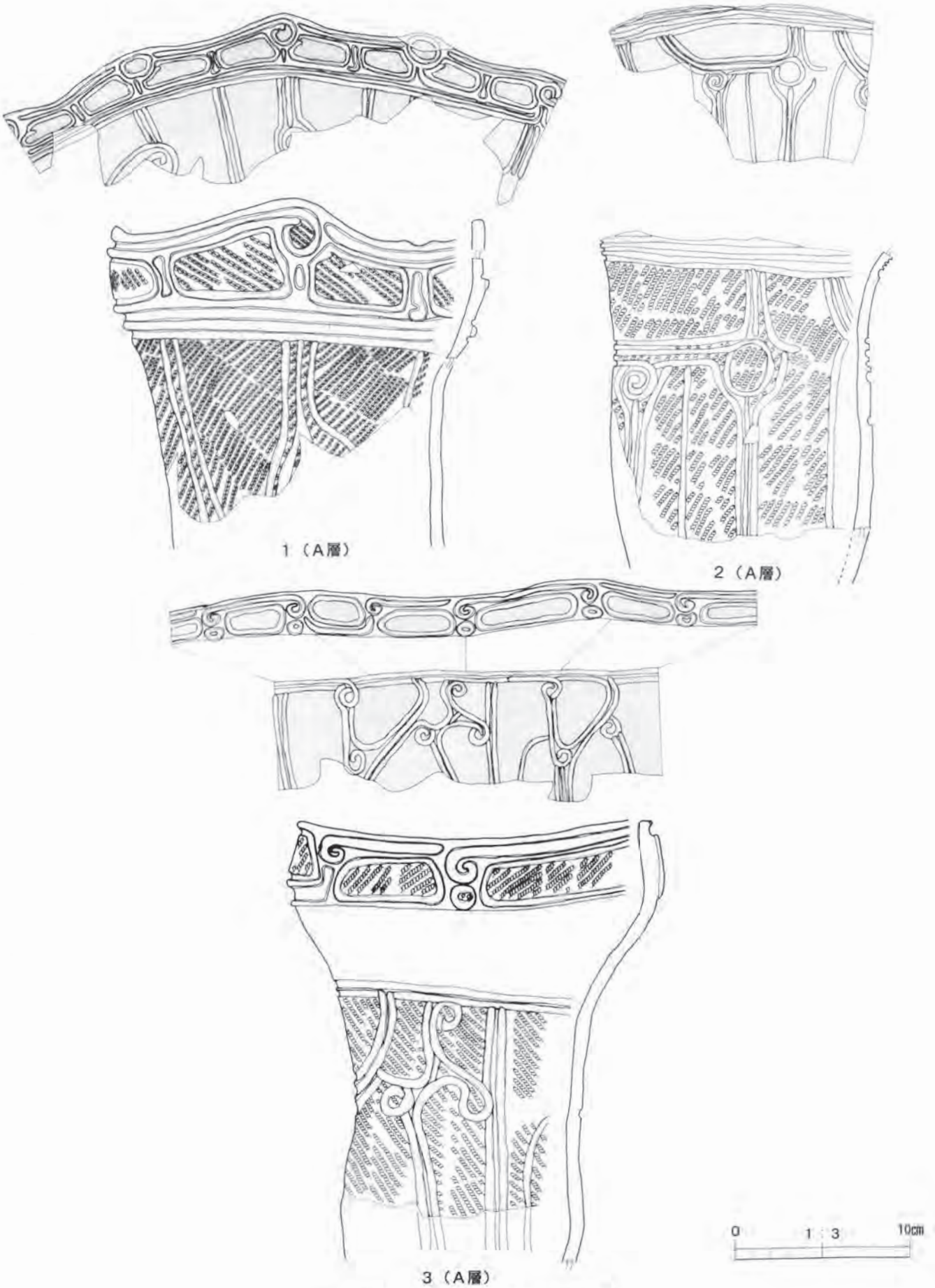
遺物

遺物は、ほとんどがＡ層中から出土したもので第14図～第17図である。第14図１は、キャリパー形の深鉢で胴部下半から底部を欠くもの。口縁は、１対の高い波頂部と幾分低い波頂部から成る４波状を呈する。口縁部文様帯は隆沈線で波頂の高い対の所には渦巻文、低い対の所には楕円形の小区画文を描き、その間には変形した長楕円形の区画文を配す。頸部の隆沈線は、一箇所（展開図の右端部）でつながらず開いている。体部の文様は、縦位の沈線と曲線的な沈線で施文されているが、欠損部分が多く具体的な展開は不明である。地文の縄文は、口縁部は横回転ＲＬＲ、体部は縦回転ＲＬＲを施文している。２は，口縁部と底部を欠く深鉢で体

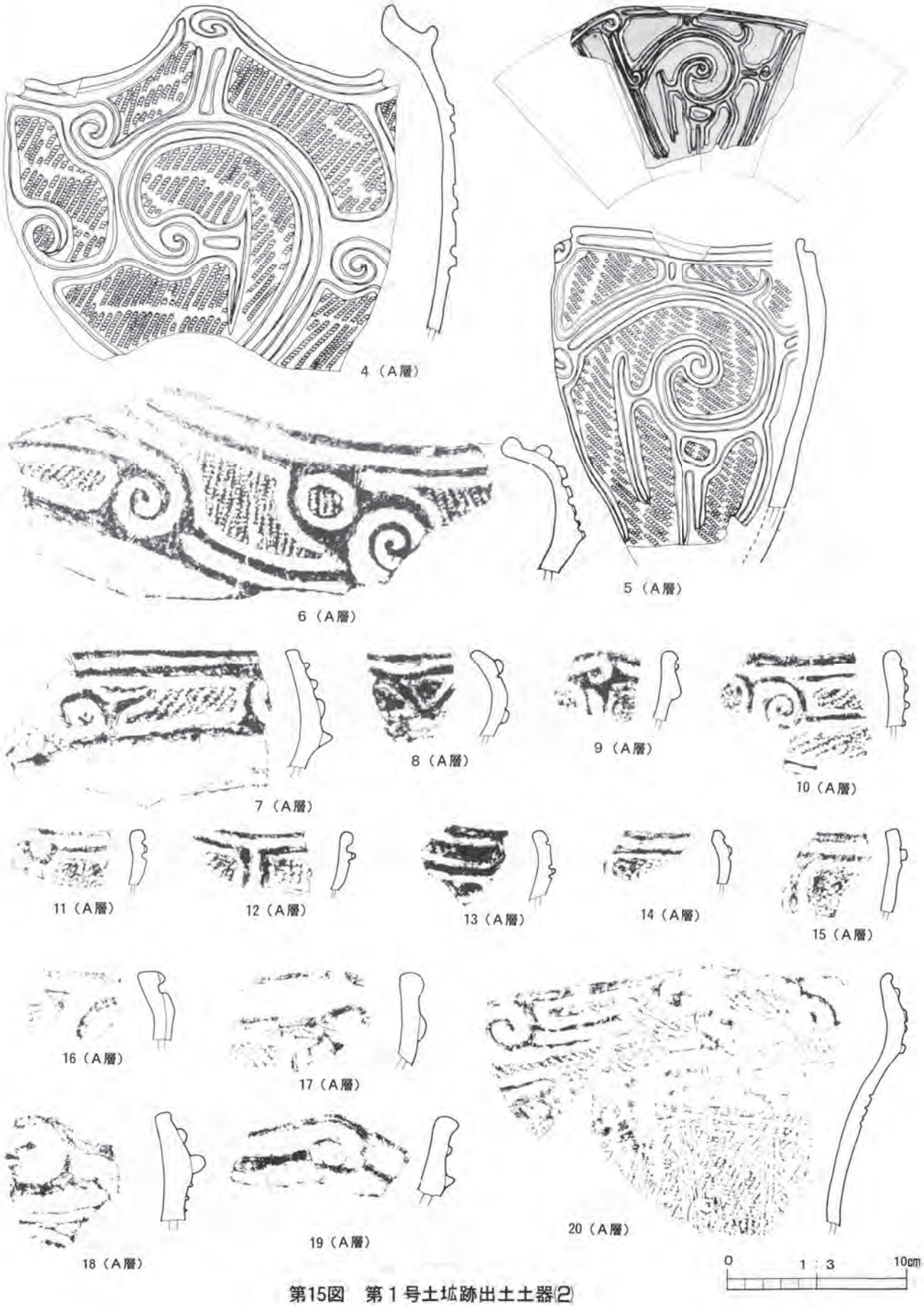
部中半がふくらむものである。体部の文様は、沈線のみで施文されており懸垂文とその端部に有棘の渦巻文を描きそれを連結し、長方形状の区画部分を生じている。3は、頸部が屈曲するキャリパー形の深鉢土器。口縁部文様帯と頸部無文帯、体部文様帯から成る。口縁部文様帯は、隆沈線による小さな渦巻文、円形文と楕円形の区画文を描く。体部の文様は、沈線で渦巻を描き、それらを連結させ三角形～長方形状の区画部分を生じさせる。第15図4、5は、口縁部が内わんする深鉢で口縁部から体部にかけて隆沈線による渦巻文、懸垂文等を組み合せて施文する。文様各単位間を連絡し区画文を作り出し、閉鎖性が強い。6～8は、内わんの強いキャリパー形土器の口縁部。6、7は頸部に無文帯を有するもので、口縁部の文様は、隆沈線により渦巻文、円文を施し楕円形状の区画を作りだしている。いずれも隆沈線は丁寧に調整されている。8は、三角形状の区画を作り出している。9～16は、内わんの弱い平縁を呈すもので、隆沈線



第13図　第1号土坑跡



第14図　第１号土坑跡出土土器(1)



第15図　第１号土坑跡出土土器(2)

第16図　第１号土坑跡出土土器③

による渦巻文や区画文を作り出すもの。17～19は、波状口縁となるもので波頂下に隆沈線の渦巻文を施す。20、21は、口縁から体部にかけての大破片で口縁部がやや内わん気味となる。口縁部文様は、隆沈線の渦巻文を施こし楕円形の区画を作り出している。頸部は無文帯で、体部には沈線のみで懸垂文等を施文している。23～26、28は、体部片でいずれも調整の施こされた隆沈線により渦巻文や懸垂文等の施文されたもの、22は、波状口縁を呈す口縁部が外反する深鉢土器で、口縁部上半には隆沈線により波頂下に渦巻文を施す。口縁部下半から体部にかけては沈線で渦巻文等を描く。波頂部下の渦巻文から下がる２本の沈線間には波状の沈線を施こしている。29～32は、沈線のみで文様を施文するもの。29は口縁直下より施文しており、30は頸部に平行沈線を巡らし口縁と体部を区画する。31は口縁部が無文帯となる。32は体部片で渦巻文が施文される。33、34は口縁上半が無文となるもの。35～39は口縁部上半に平行する隆沈線を施こし、それより下部には縄文を施文しただけのもの。40は縄文主体の土器。

第２号、３号土坑跡（第18図）

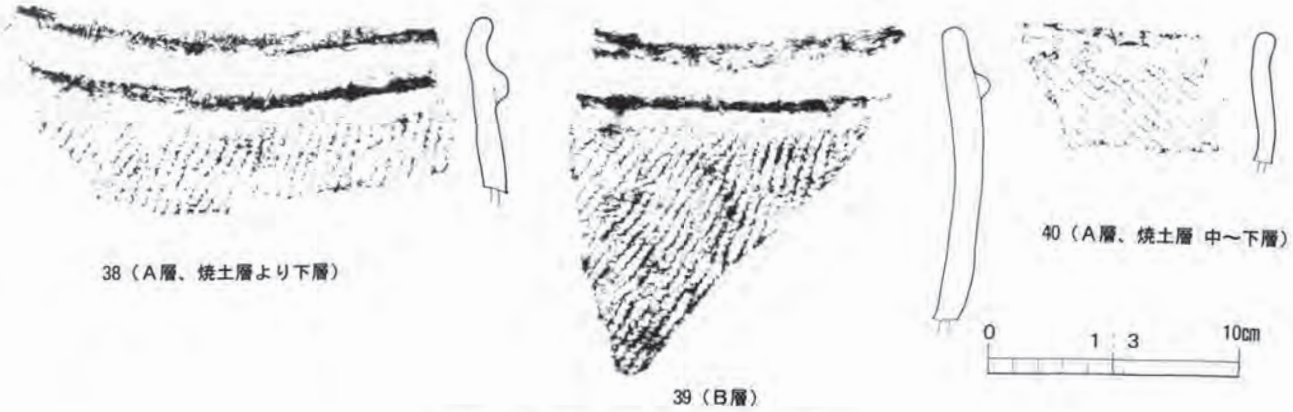
調査区中央部の南壁寄りに位置する。第２号土坑跡と３号土坑跡は重複しており、土層断面観察の結果、第２号土坑跡の方が新しい。両方ともフラスコ状を呈するものである。なお、覆土中にはピット（Ｐ212とＰ213）が掘り込まれている。 **重複**

第２号土坑跡は、上場で1.20×0.85ｍ規模の楕円形、下場で直径１.０ｍ規模の円形の平面形を呈する。底面はほぼ平坦で第３号土坑跡の底面より0.10ｍ低い。 **平面形、規模**

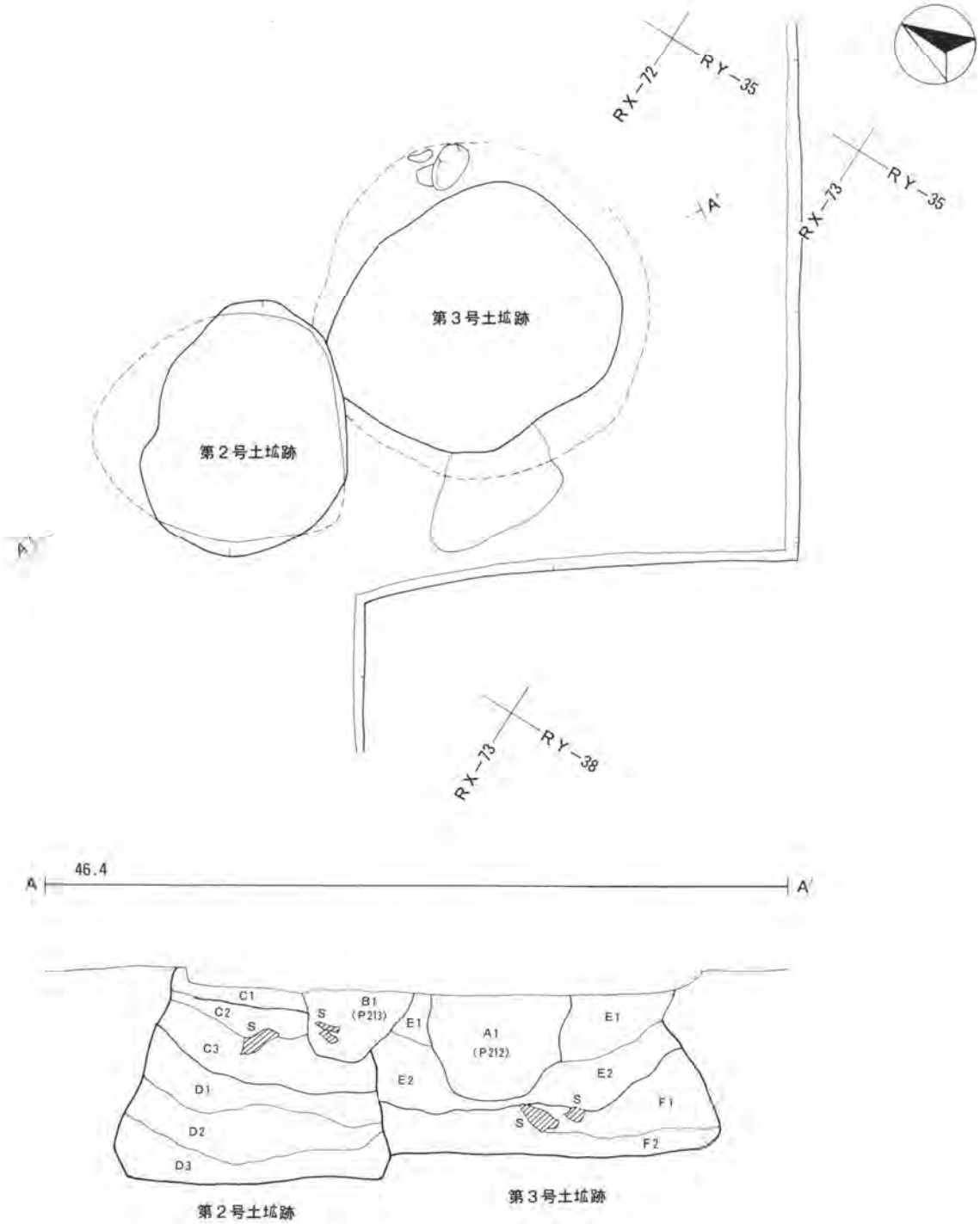
埋土は、Ｃ層、Ｄ層に分けられる。Ｃ層は、にぶい黄褐色の砂質の強い土を基本土とする比較的固さのある土層でＣ1～Ｃ3層に細分される。Ｃ1層が、やや明るくＣ3層が若干暗い土である。Ｃ1～Ｃ3層は、いずれも土のしまりはない。Ｄ層は、暗褐色の砂質土を基本土とする土層でＤ1～Ｄ3層に細分される。Ｄ1層は、壁際に多くの黄褐色土塊の混入が認められる。Ｄ2層は、Ｄ層中最も明るい暗褐色土で、Ｄ3層は幾分暗くなる。Ｄ層中には少量ながら炭化物粒子が含まれる。 **埋土**

第３号土坑跡は、上場で1.35×1.15ｍの楕円形、下場で直径1.55ｍの円形を呈する。底面は平坦で第２号土坑跡底面より0.10ｍ高くなる。 **平面形、規模**

埋土は、Ｅ層、Ｆ層に分けられる。Ｅ層は、Ｃ層よりも暗いにぶい黄褐色土を基本土とする土層でＥ１、Ｅ２層に細分される。Ｅ１層の方がＥ２層よりも暗い土である。どちらもやや固さはあるがしまりに欠ける。Ｆ層は、暗褐色から黒褐色に近い砂質土を基本土とする。Ｆ１、 **埋土**



第17図　第１号土坑跡出土土器(4)



0 1 30 1m

第18図　第２号、３号土坑跡

第19図　第２号、３号土坑跡出土土器

下２層に細分される。Ｆ２層は暗い暗褐色土から黒褐色土に近かい土を基本土とする。

土器　遺物は、第２号、３号土坑跡とも埋土中より出土している。第19図１～13が第２号土坑跡、14～31が第３号土坑跡より出土したものである。１～３は、口縁部上端を無文部にし口縁部下半より縄文を施文したもの。４は、口縁部上端から縄文を施文している。５は隆沈線で懸垂文を施文するもの。８は、複合口縁を呈すもので撚糸文を施文する。９、10は撚糸文を施文する体部片。11、12は、磨消し部と沈線により文様を描くもの。

14～16は縄文主体の土器。16には、縦位の撚糸圧痕文がみられる。17は撚糸文を施文する。18、19は隆沈線で文様を描くもの。20は、口縁部片で口縁が肥厚する。21は口縁の突起部。22～26は撚糸文を施文した体部片。27は、口縁部上端に小渦巻文を施文する。30、31は底部片で底面に網代痕の認められるもの。

第４号土坑跡（第20、21図）

調査区の中央部南壁際に位置し、４分の１は調査区外である。南西側の上部が一部攪乱によって破壊を受けている。

平面形　平面形は、上場、下場ともに楕円形を呈するものと推定される。精査の際に掘りすぎてしまったため、平面図ではフラスコ状になっていないが、断面観察の結果、壁は底面から約0.2ｍまでは直線的で、それ以降は検出面に向かって約45度の角度で立ちあがる。

規模　規模は底部で長軸1.5ｍ、短軸1.15ｍと推定され、検出面からの深さは0.75ｍをはかる。

埋土　埋土は、Ａ層からＤ層に大別される。Ａ層は、黒褐色のシルト質土を基本土とするやや固さしまりのある土層である。Ｂ層は、暗褐色のやや砂っぽい土を基本土とする比較的固くしまりのある土層でＢ１、Ｂ２層に細分される。Ｂ１層よりＢ２層の方が少し明るい。Ｂ１、Ｂ２層とも炭化物粒子の混入が認められるが、Ｂ２層中には焼土の小塊が見られる。Ｃ層は、黄褐色の砂質土の大塊を基本土としＢ層の細分層とも考えられたが、上部のＢ層と下部のＤ層の中間層として把えてＣ層とした。やわらかくてしまりがない。Ｄ層は、にぶい黄褐色の砂質の強い土を基本土とするやや固さ、しまりのある層でＤ１～Ｄ４層に細分される。Ｄ１、Ｄ３層がＤ２、Ｄ４層に比べて幾分明るい土でＤ層中Ｄ３層が少し固さ、しまりを欠く。Ｄ２、Ｄ４層中には比較的多く炭化物粒子が含まれ、また、黒褐色土を小塊粒状に混入する。

遺物は、各層より出土しているがＢ層からの出土が多い。第22図１～９が土器、10～12が石器である。

土器　１は口縁部が外反するもので口縁を磨消し体部に沈線で円形～楕円形の区画文を施すもの。２は、口縁部が内わんするもので口縁上部を磨消し体部に区画文を施文するものと思われる。３は、口縁部が直立するもので磨消した口縁部上部に刺突文を施すもの。４は、口縁部が頸部より大きく外反し波状口縁を呈するもの。５は、口縁部上部を無文とし体部に縄文だけを施文する。６～８は、体部片で磨消しと沈線による区画文が施こされたもの。９は、口縁直下から縄文を施文する。

石器　10～12は打製石器で、10は、円形礫の下端部を両面から打ち欠き刃部を作り出している。チョッパー的な機能を有するものと考えられる。11は、卵形礫の一端に敲打痕が認められる。12は、敲打磨石で下端に敲打磨面の機能面で両側縁に調整磨面を形成する。

第５号土坑跡（第20、21図）

第４号土坑跡の東に位置する。南壁の一部がわずかに調査区外となる。

平面形は、上場、下場ともほぼ円形を呈する。規模は、上場で直径 1.7m、下場で1.95mをはかる。壁は、底面からの角度がゆるやかなフラスコ状に立ち上がり検出面からの深さは、0.65mをはかる。 **平面形、規模**

埋土は、Ａ層～Ｃ層に大別される。Ａ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とするやわらかくしまりのない土層でA1、A2層に細分される。A2層の方が幾分明るい土で、黄褐色土の混入割合が高い。Ｂ層は、灰黄褐色～にぶい黄褐色の砂質の強い土を基本土とし、全くやわらかくしまりがない。B1～B5層に細分される。B4、B5層は壁際にのみ堆積が認められるもので、黄褐色土の塊が混入する。B3層には灰白色を呈す砂が小範囲ながら薄く層状に含まれる。Ｃ層は、底面中央部に堆積するもので黒褐色の砂質土を基本土とする。やわらかくしまっていない。 **埋土**

底面は、ほぼ平坦面だがやや中央部がくぼむ様である。

遺物は、埋土中より少量ながら出土している。第23図１～６は土器片、第24図１は打製石器。

第23図１は、口縁部の直立する深鉢で口縁部上端を無文にし、下部から体部にかけて沈線の区画文を施文するもの。２は、口縁部が外反するもので地文の縄文施文後に口縁に平行する沈線を巡らす。３、６は懸垂文が、４、５は沈線と磨消しにより区画文が施こされるものと思われる。 **土器**

第24図１は、小さな扁平礫の一端に敲打磨面の機能面が認められるもの。 **石器**

第６号土坑跡（第20、21図）

第５号土坑跡の北側に位置する。

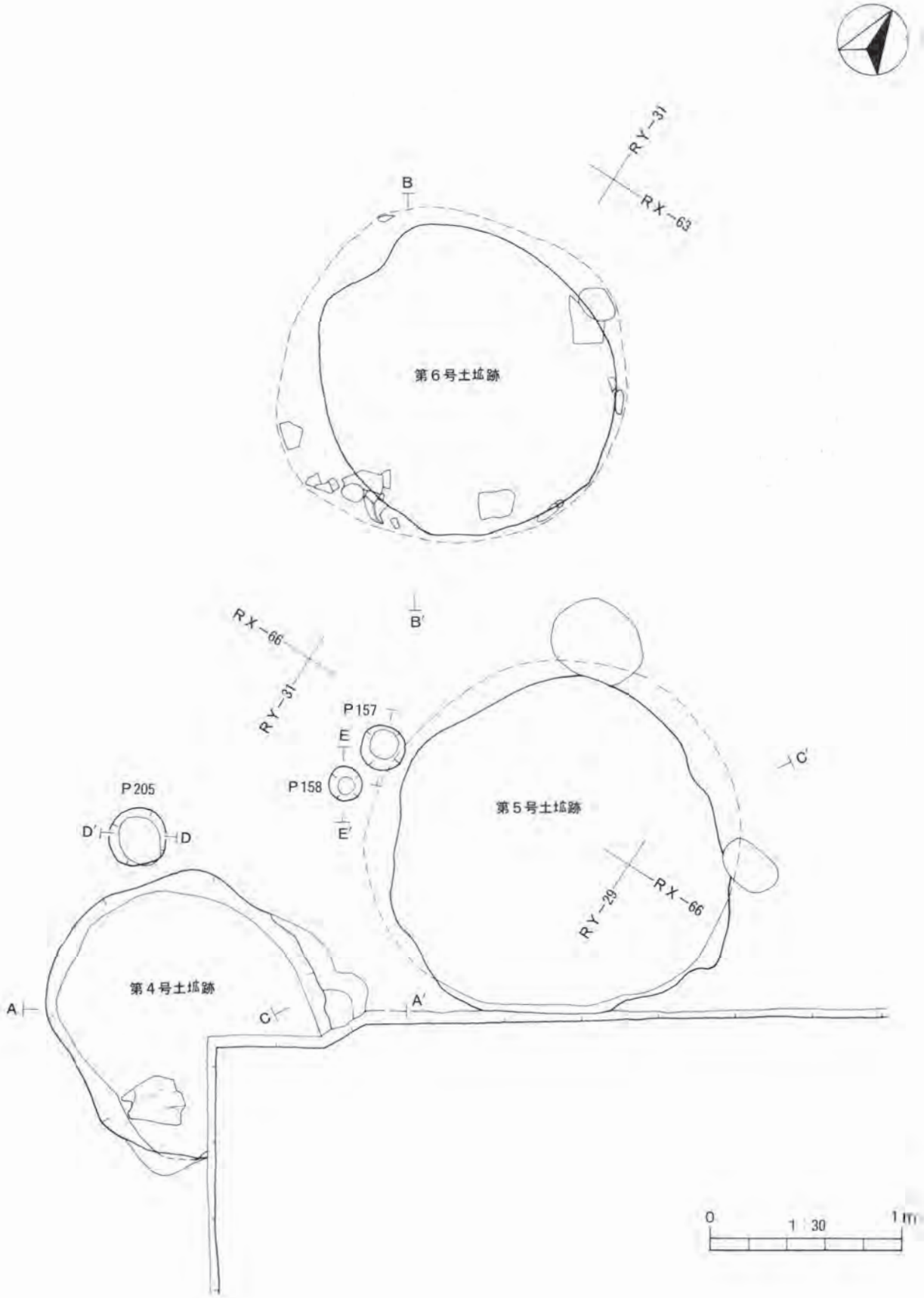
平面形は、上場で一部不整ながら楕円形、下場でほぼ円形を呈する。規模は、上場で1.65×1.50m、下場で直径１.７mをはかる。壁は、フラスコ状に立ち上がるが底面からの角度はきつくない。検出面からの深さは0.85mをはかる。 **平面形、規模**

埋土は、Ａ層～Ｄ層に大別される。Ａ層は、暗褐色のやや砂っぽい土を基本土とする幾分固く、しまりのある土層である。真砂土塊・粒を多く混入する。Ｂ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とする全く固さ、しまりのない土層でＡ層よりは少なくなるが、真砂土塊、粒を含む。Ｃ層は、褐色から赤褐色に近い砂質土層で固く比較的しまっている。焼土及び灰のブロック層である。Ｄ層は、Ｂ層よりも暗いにぶい黄褐色の砂質の強い土を基本土とするものでD1～D4層に細分される。Ｄ１層は、暗褐色に近い土で黄褐色土や褐色土を小塊状に多く混入する。Ｄ２層は、Ｄ層中一番明るい土である。Ｄ３層は、底面のほぼ全域を覆う。また、Ｄ１～Ｄ３中には少量ながら炭化物粒子の混入が認められる。全体的には比較的固くしまっている。 **埋土**

底面は、地山の花崗岩を掘り込んだ固く平坦な面である。 **床面**

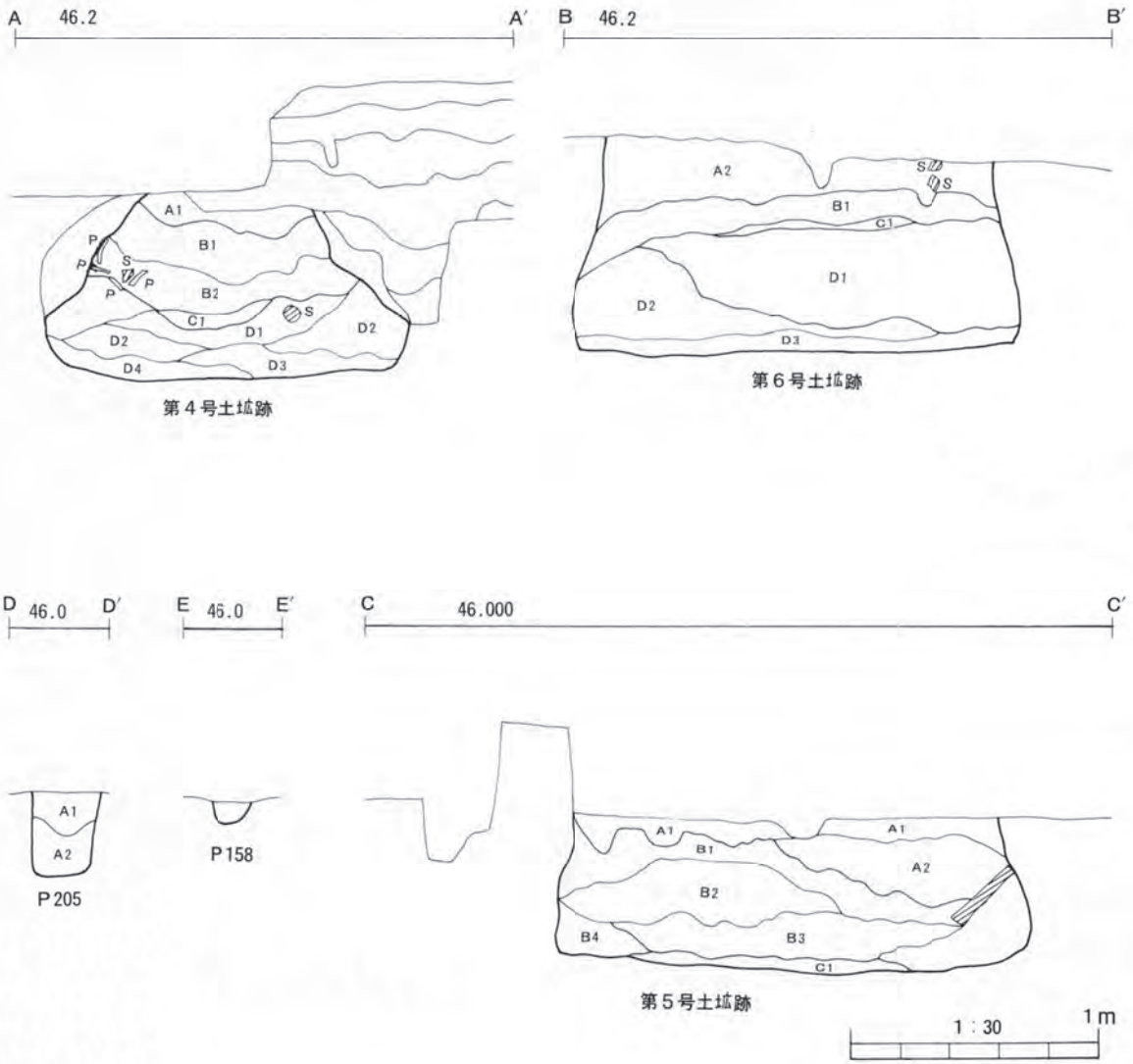
遺物は、埋土中より出土しているがＤ層の下部から比較的まとまって出土している。また、壁際から多く出土している様である。第23図７～30は土器、第24図２、３は打製石器である。

第23図７はＤ３層の南壁側底面直上よりまとまって出土したものである。口縁部が外反する深鉢土器で口縁直下から横回転の縄文(ＬＲ)を施文する。体部上半から中半にかけて煤状の付着物が認められる。８は隆沈線文を口縁に施すもの。９は口縁部が短かく外反するもので、磨消 **土器**

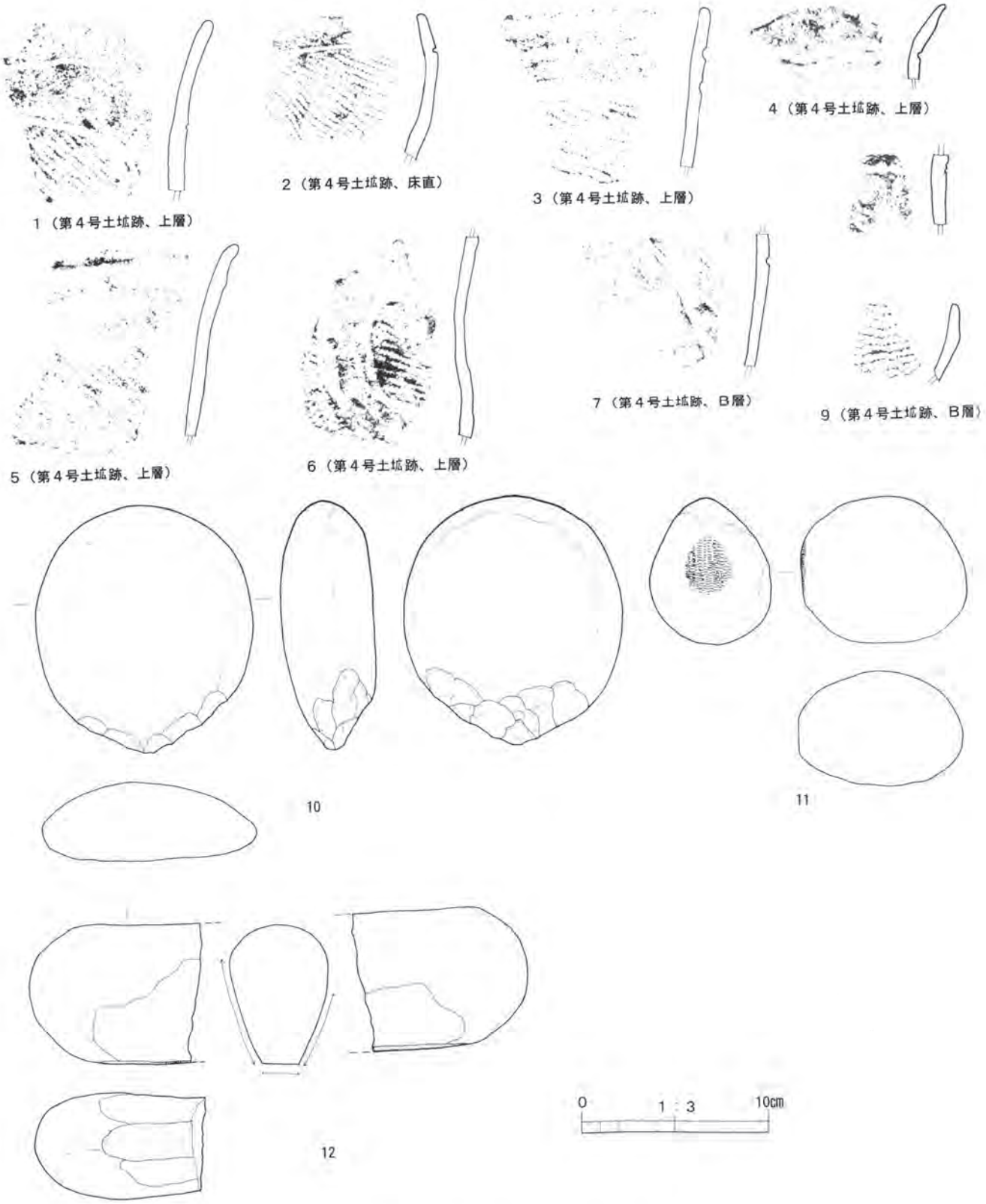


第20図　第4号、5号、6号土坑跡

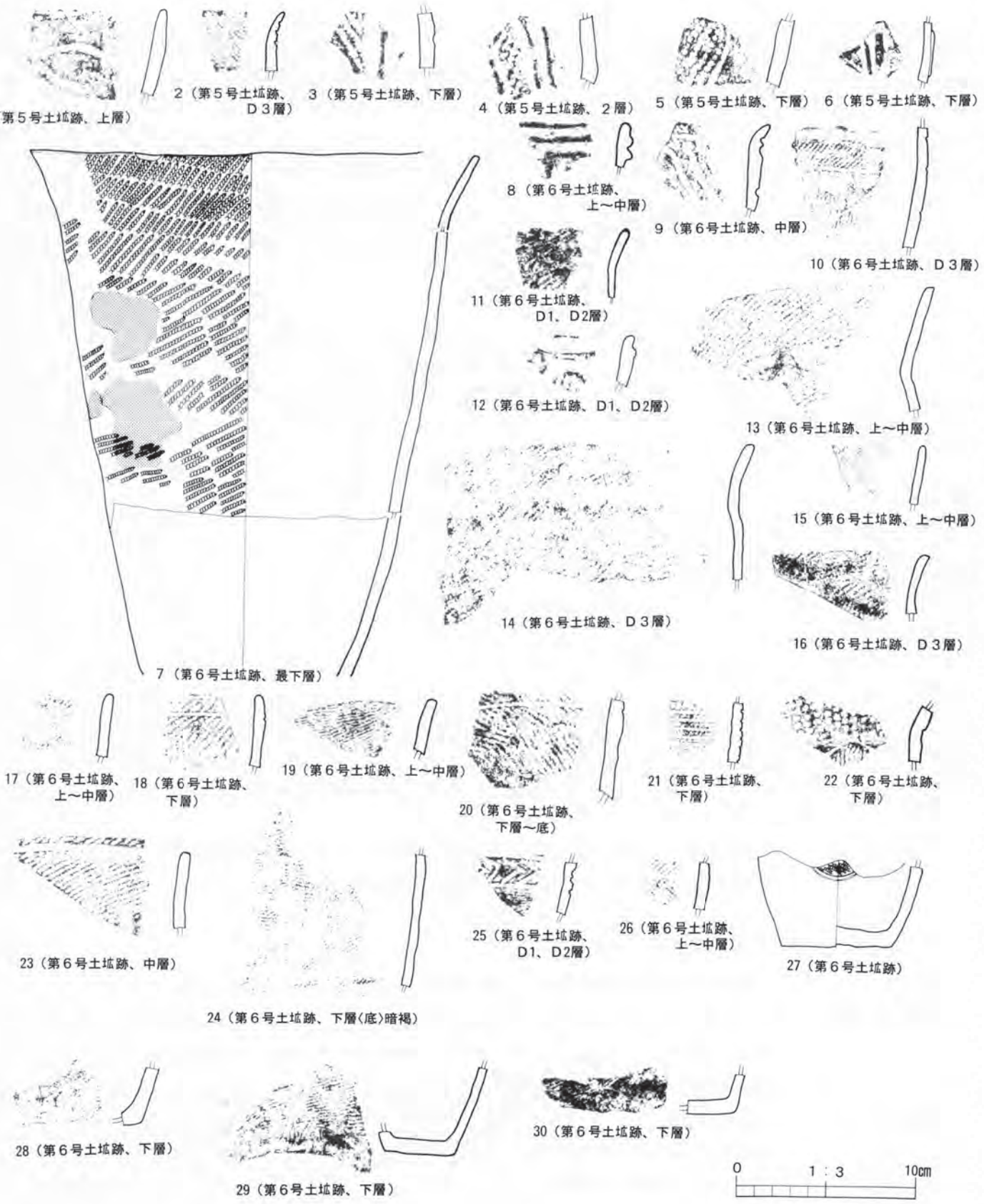
しと沈線により区画文を描くもので竹管の円形刺突文が施される。10は磨消しと沈線により入組曲線文を描くものか。11、13～19、23は、口縁直下から縄文を施文するものである。いずれも縄文は細かい。13、14、16は口縁部が外反するもので、14は肩部が張り出す様である。13は、頸部の縄文を磨消し無文部を作り出す。18は縄文施文後に口縁に対し平行に細い沈線を施す。23は、口唇部に回転縄文を施する。20、21は、体部の破片で縄文施文後に沈線を施すもの。22は、頸部の破片で口縁部が外反する。口縁部には竹管による円形の刺突文を施文し、体部には区画文を描くものと思われる。25は、平行沈線間に矢羽根状に沈線を施すもの。26は、細かい縄文で羽状に施文する。27～30は体部下半～底部にかけての破片で、27は体部に区画文を描くもの。28～30は細かい縄文を施文するもので11、13～21、23、24と関連するものか。



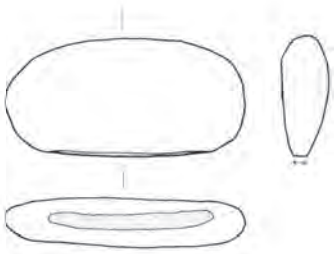
第21図　第４号、５号、６号土坑跡断面図



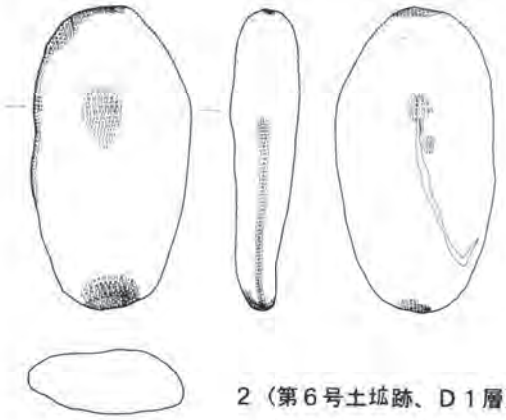
第22図　第４号土坑跡出土遺物



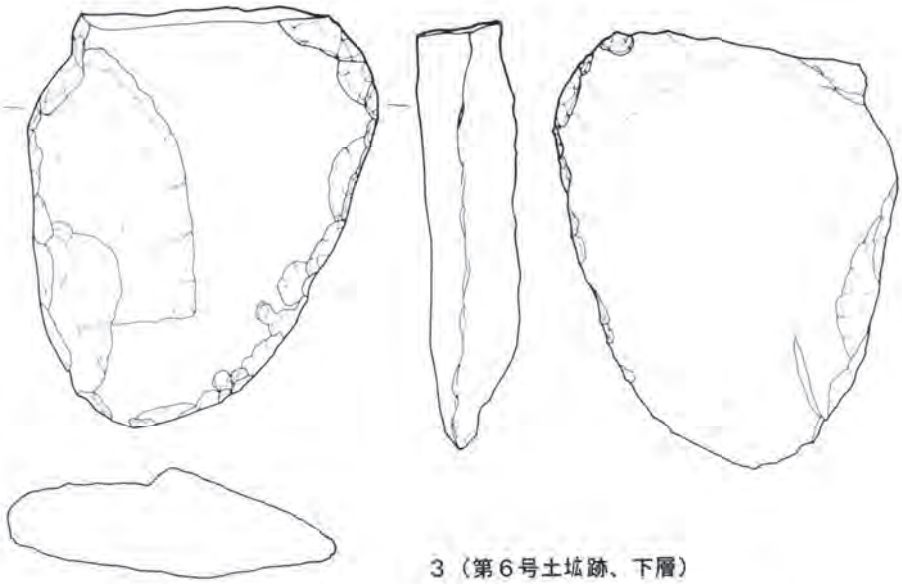
第23図　第５号、６号土坑跡出土土器



1（第５号土坑跡）



2（第６号土坑跡、Ｄ１層）



3（第６号土坑跡、下層）

0　1：3　10cm

第24図　第５号、６号土坑跡出土遺物

石器

第24図２、３は第６号土坑跡から出土した礫石器。２は、扁平な楕円形の礫で側縁部に敲打痕の認められるもの。３は、側縁部に細かい剥離を施したもの。

第７号土坑跡（第25図）

重複

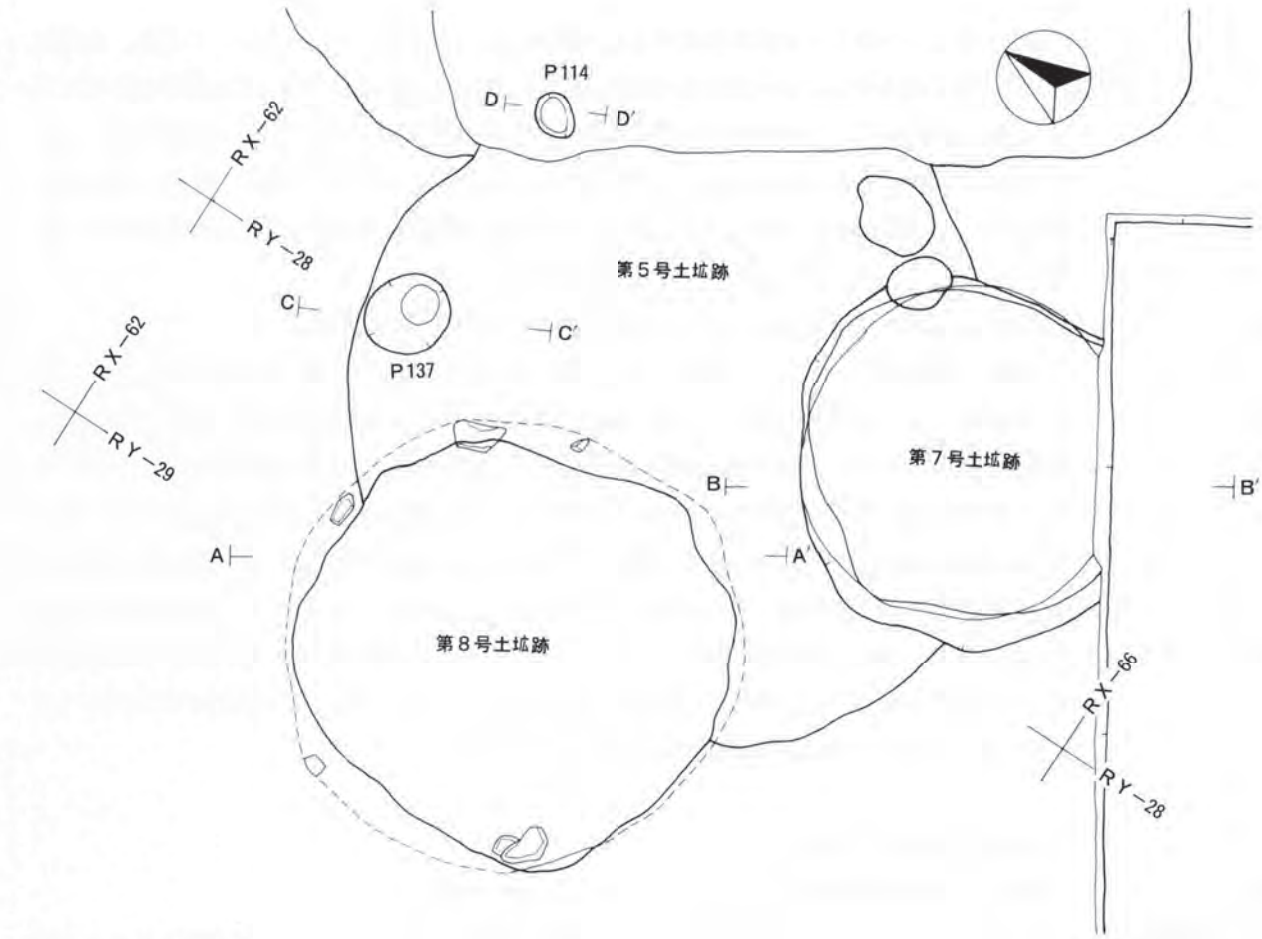
南側の一部が調査区外となる。第５号竪穴と重複するが、これよりも新しい。

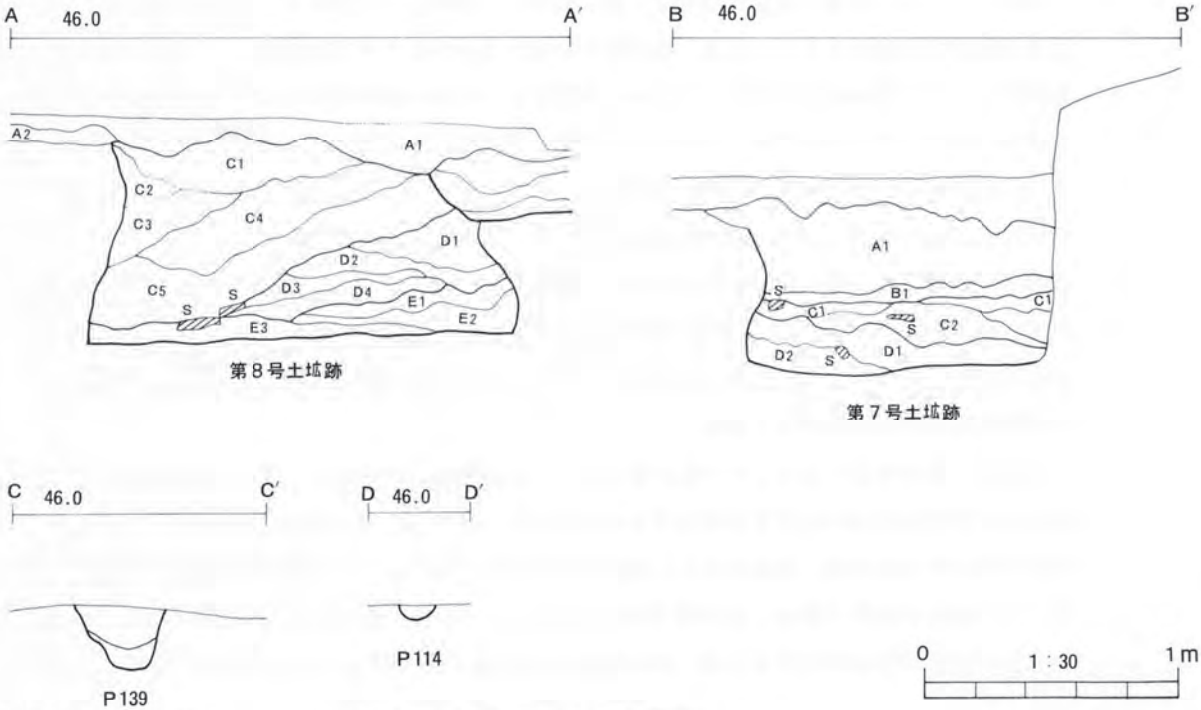
平面形、規模

平面形は、上場、下場ともほぼ円形を呈すものと推定される。規模は、推定で上場で直径1.45m、下場で1.3ｍをはかる。壁は、フラスコ状に立ち上がるが、底面から約0.3ｍ付近からは開口部に向って外側に広がっている。検出面からの深さは0.65ｍをはかる。

埋土

埋土は、Ａ層、Ｂ層、Ｃ層、Ｄ層に大別される。Ａ層は、暗褐色の砂質土を基本土とする比較的固くしまりのある土層で層厚0.35ｍと厚く堆積する。にぶい黄褐色土や黒褐色土を粒塊状に混入する。Ｂ層は、中間部に堆積するもので黒褐色のやや砂っぽいシルト質の土を基本土とする全くやわらかくしまりのない土層。わずかながら貝殻片を含んでいたが、石灰分だけが残





第25図　第7号、8号土坑跡

存しているというほとんど痕跡程度のもので非常にもろく形状をとどめない。C層は、黄褐色土塊粒が多く混入するにぶい黄褐色の砂質土を基本土とする土層でC１～C３層に細分される。C１層は黄褐色土の混入割合が高く多量に混入する。C２層は、C層中では一番砂っぽくしまりがない。D層は、灰黄褐色のかなり砂質の強い土を基本土とするやや固さ、しまりのある土層でD１、D２層に細分される。D１層は、中小礫を比較的多く含みややしまりに欠ける。D２層は、暗褐色に近い黒褐色土を塊粒状に混入する。

底面　底面は、地山の花崗岩を掘り込んだ比較的固くしまった平坦面である。

遺物は埋土中より出土しているが、あまり多くない。第26図１～11が土器片、21、22が礫石器である。

土器　１は、口縁部が短かく外反し折れ曲がる内側がつば状に突き出る。文様は無文部に沈線を施文している。２は口縁部上端に刻目を施こし磨消した口縁部に刺突文を施文する。３は、平行沈線間に刺突と貼瘤状の突起を施すもの。４は口縁部上端を磨消し無文部を作り出す。５は口縁部上端を幅広く磨消す。６は頸部から体部上半の破片で口縁部の内わんするものか。屈曲部に円形の刺突を施す。７～９は、沈線と磨消しで区画文を描くもの。10は隆沈線の懸垂文を施文する。11は、撚糸文を施文するもの。

石器　21は、一方の面に敲打痕（整形痕）が認められるもので両側縁から下辺にかけては細かい剥離を施している。22は、敲打磨石で磨面幅は一定していない。また、長軸の端部には敲打痕が認められる。

第８号土坑跡（第25図）

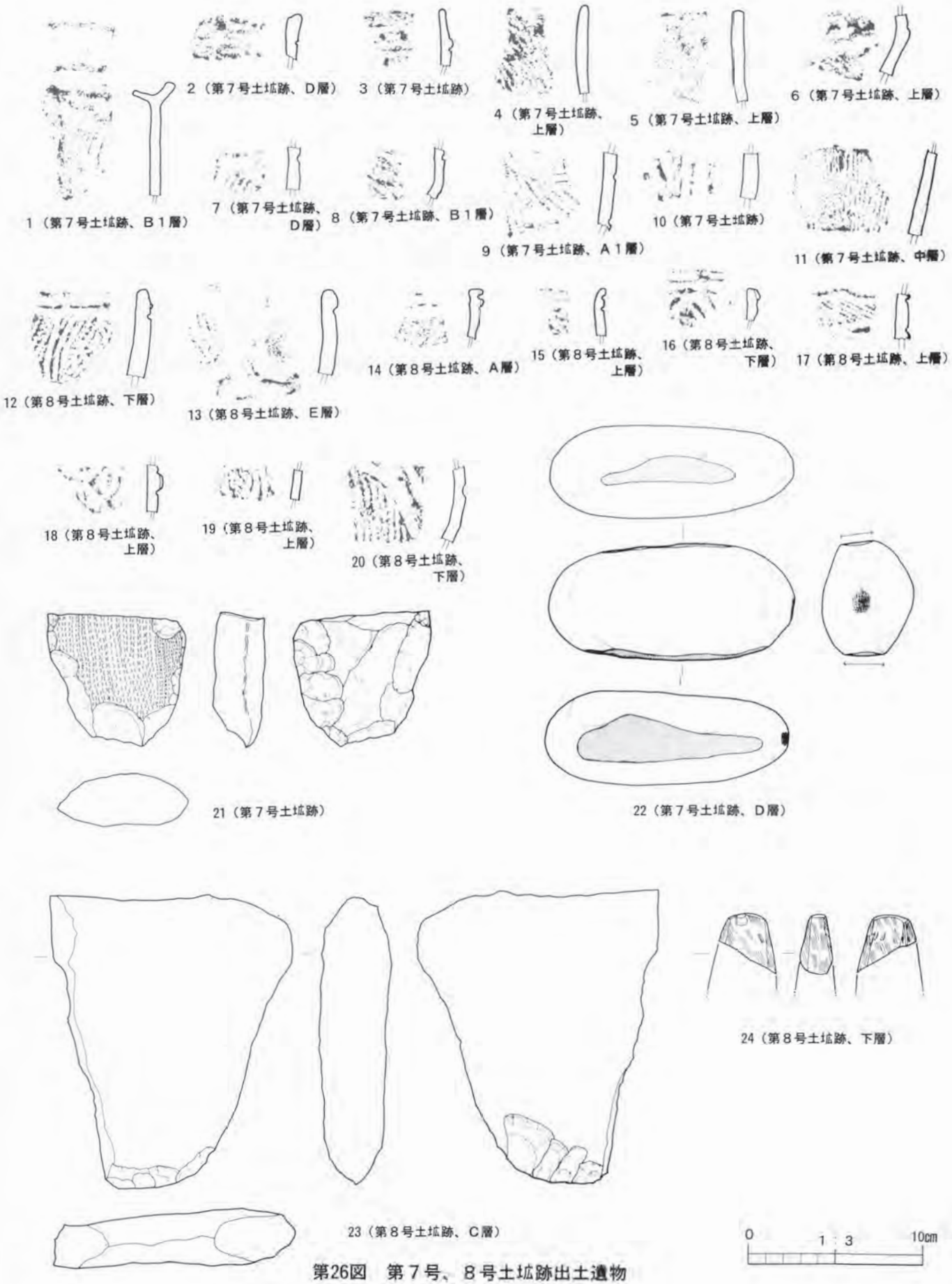
重複　第１号、５号竪穴跡と重複するが、どちらにも切られ古い。

平面形、規模　平面形は、上場、下場とも円形状を呈するが方形に近い。規模は、上場で直径1.6ｍ、下場で1.75ｍをはかる。壁は、フラスコ状に立ち上がるが底面からの角度はきつくない。検出面付近でやや外側に開き加減である。検出面からの深さは、0.8ｍをはかる。

埋土　埋土は、C層、D層、E層に大別される。C層は、東側から西側にかなりの傾斜で堆積しており西壁際では底面近くまで至る。暗褐色の砂質土を基本土とする比較的固くしまりのある土層でC１～C５層に細分される。C１～C３層には、にぶい黄褐色の砂質土が塊状に多く混入される。ややしまりに欠ける。C４、C５層は、やや明るい暗褐色の土で若干粘性を有す黄褐色土を粒塊状に少量ながら混入する。D層は、にぶい黄褐色の砂質の強い土を基本土とするやや固くしまった土層でD１～D４層に細分される。D２層は、やや暗くD３層は暗褐色に近い。D１層には炭化物粒子を比較的多く含む。D４層は、灰黄褐色～明黄褐色の砂質土（真砂土塊）が多量に混入する。E層は、底面のほぼ全域を覆うもので暗褐色の砂っぽい土を基本土とするやわらかくてややしまりのある土層である。D１～D３層に細分される。D３層は、やや暗い土で炭化物粒子を比較的多く含む。

土器　遺物は、埋土中より出土しているが多くない。第26図12～20は土器。12は、口縁上半に隆沈線を施し体部は沈線の区画文を施文するもの。13は、磨消しと太い沈線で区画文を描く14、15は口縁上半に隆沈線、沈線を巡らし体部には縄文を施文する。16は楕円形の区画文を施文する。17～20は体部片で磨消しと沈線で区画文を描くもの。

石器　23、24は石器で、23は下端に両面から剥離を加え刃部を形成するもの。24は磨製石斧の欠損品で全面ともに丁寧に研磨を施している。



第26図　第７号、８号土壙跡出土遺物

第９号土坑跡（第27図）

調査区の南壁際、第1002号竪穴住居跡の南に位置する。

平面形、規模　平面形、規模とも全体の半分以上が調査区外のため不詳だが、上場で直径1.2ｍ規模の円形プランを呈するものと推定される。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは0.5ｍをはかる。

埋土　埋土は、大きく２層に分けられる。ほぼレンズ状の堆積状況で自然堆積と考えられる。Ａ層は、暗褐色の砂っぽい土を基本土とし、やや固さ、しまりを持つ。Ａ１、Ａ２層に細分される。Ａ１層は、Ａ２層よりは暗い土で黒褐色土を塊状に多く混入する。焼土・炭化物粒子を含む。Ａ２層は、Ａ１層に比べややしまりに欠ける。Ｂ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とするやわらかくしまりのない土層でＢ１、Ｂ２層に細分される。Ｂ１層は、灰褐色～黄褐色の砂質土を塊状に多く混入する。Ｂ２層はＢ１層に比べて幾分暗い土で混入土の割合も少なくなる。

遺物の出土量は多くない。

第27図　第９号土坑跡

第10号土坑跡（第28図）

調査区のほぼ中央部に位置する。第２号竪穴、第11号土坑跡と重複するが、第11号土坑跡を切り新しいが、第２号竪穴との新旧関係は把握できなかった。 **重複**

平面形は、ほぼ円形で規模は、上場、下場とも直径1.2ｍをはかる。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは0.5ｍをはかる。 **平面形、規模**

埋土は、Ａ層、Ｂ層に分けられる。Ａ層は、やや明るい暗褐色の砂っぽい土を基本土とする比較的固さ、しまりのある土層で真砂土粒子を多量に含む。Ｂ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とするやや固くしまる土層でＢ１～Ｂ４層に細分される。Ｂ２層は、Ｂ層中一番明るい土である。Ｂ３層は真砂土塊を多量に混入する。Ｂ４層は、暗褐色に近い暗い土で少量ながら炭化物粒子の混入が認められる。 **埋土**

底面は、ほぼ平坦面で比較的固くしまる。 **底面**

遺物の出土は少量で、ほとんど地文のみの極小片で図示できるものはない。

第11号土坑跡（第28図）

第10号土坑跡と重複するが、これよりも古い。また、土層断面観察により覆土中に掘り込まれたピット（Ｐ107）を確認した。 **重複**

平面形は、第10号土坑跡との重複で東側の一部が消失しているが、上場、下場ともほぼ円形を呈する。規模は、上場で直径2.2ｍ、下場で2.45ｍをはかる。壁は、フラスコ状に立ち上がり検出面からの深さ0.6ｍをはかる。 **平面形、規模**

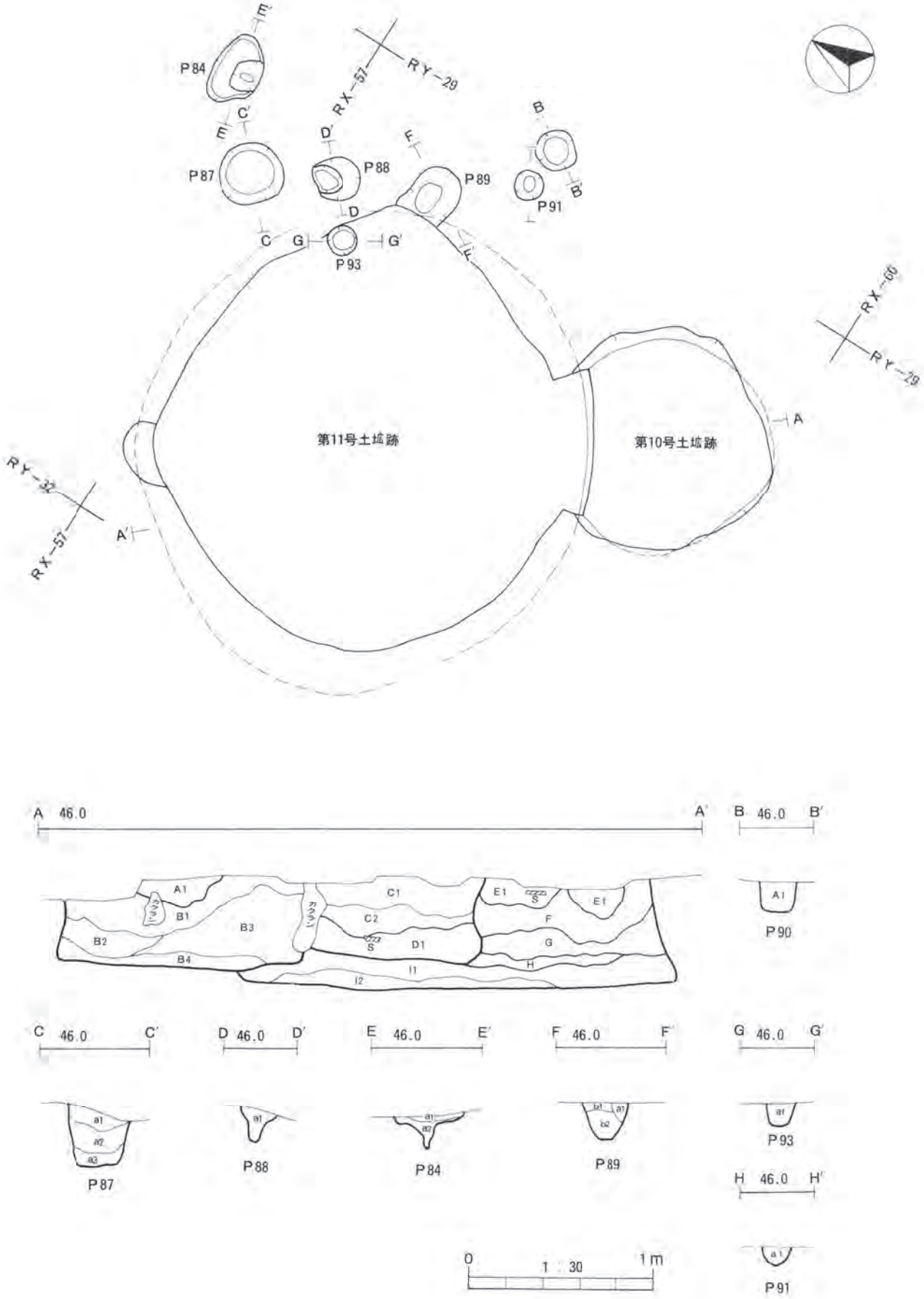
埋土は、Ｅ～Ｉ層に大別される。Ｅ層は、暗褐色～黒褐色のシルト質土を基本土とするもので、覆土中に掘り込まれた小ピットの可能性もある。Ｆ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とするやや固くしまった土層で真砂土粒子を多量に混入する。Ｇ層は、灰黄褐色～黄褐色の砂質の強い土を基本土とする土層でやわらかく全くしまりがない。Ｈ層は、やや粘性のある砂っぽい暗褐色土を基本とする土層でやわらかくしまりがない。Ｉ層は、明黄褐色の砂質のかなり強い粒の粗い土を基本土とする土層で全く固さ、しまりを欠く。極く少量ながら炭化物粒子を含む。Ｉ１、Ｉ２層に細分され、Ｉ２層の方が幾分にぶい黄褐色に近い土である。 **埋土**

底面は、地山の花崗岩を掘り込んだ平坦な面で固い。 **底面**

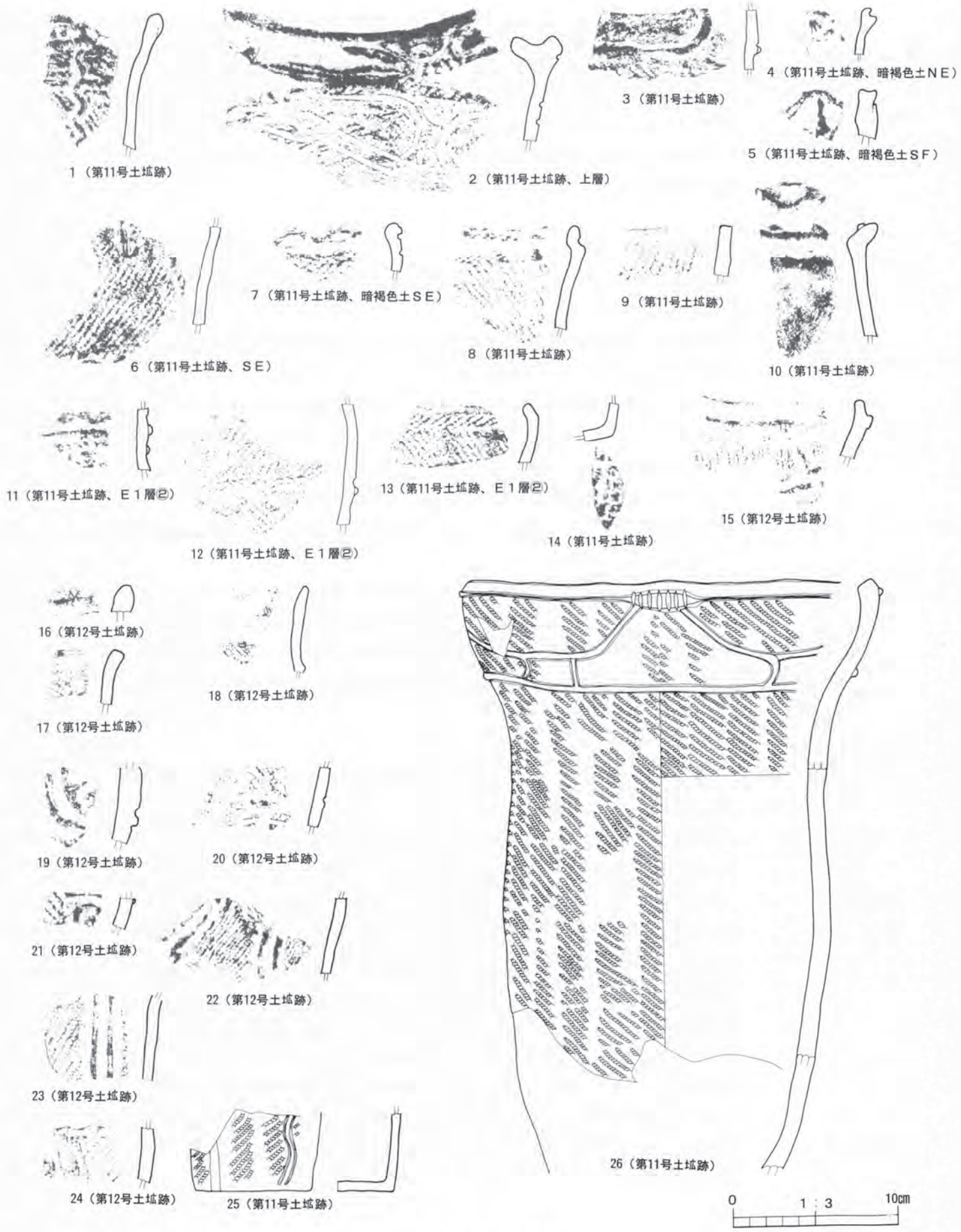
第11号土坑跡が埋まり切った後の埋土に掘り込まれたＰ107は、第11号土坑跡精査中に確認したため約半分以上は掘りすぎてしまったため詳細は不明である。推定では、直径0.9ｍ規模の円形の平面形を呈するものである。

埋土は、Ｃ層、Ｄ層に分けられる。Ｃ層は、暗褐色のやや砂っぽい土を基本土とし固く比較的しまっている。Ｃ１、Ｃ２層に細分されるが、Ａ１層中には比較的多量の焼土、炭化物粒子の混入が認められる。Ｄ層は、明るい黒褐色のシルト質土を基本土とする土層で比較的固くしまっている。Ａ層よりも多く炭化物粒子を含む。 **埋土**

遺物は、ひとつの土坑跡として精査に入ってしまったため混在してしまったが、大部分は第11号土坑跡から出土したものである。第29図１～14、26は土器。１は口縁部がやや外反するもの。粘土紐の蛇行垂下貼り付け文が施文される。２は、口縁部が内側に大きく張り出す。口縁部の文様は小渦巻文、円文と沈線により区画文を描く。３は隆沈線で区画文を施文するもの。 **土器**



第28図　第10号、11号土坑跡



第29図　第11、12号土坑跡出土遺物

4は波頂部に小渦巻文を施すもの。5は隆沈線文を施文する。6は縄文施文後に粘土紐を貼り付け端部を円形に閉じる。7は口縁が内わんするもので原体圧痕文を施文する。8は口縁部上半に隆沈線文を施文し隆帯の上に回転縄文を施文する。9は縦回転の縄文（RLR）を口縁部より施文する。26は、東壁際にまとまって出土したもので口縁がゆるやかに内わんするキャリバー形の深鉢である。隆線で口縁部文様帯を区画し肥厚させた4箇所に刻目を施すもの。体部は縦位の縄文（LR）を施文しただけである。

第12号土坑跡（第30図）

第2号竪穴跡の東に位置する。中央部から南西壁側の広範囲を攪乱（コンクリート製の集水マス設置）されている。

平面形、規模　平面形は、不整な円形を呈する。規模は、上場、下場とも直径1.65mをはかる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは0.5mをはかる。

埋土　埋土は、A層、B層に分けられる。A層は、にぶい黄褐色の砂っぽい土を基本土とするものでやわらかくしまりがない。A1～A3層に細分される。A1層は黒褐色土を塊粒状に含む。A2層はやや明るい土で逆にA3層は少し暗い土である。A3層はA1、A2層よりも幾分固さ、しまりをもつ。B層は、やや黄色味が強い暗褐色の砂質土を基本土とする土層で僅かながら炭化物粒の混入が認められる。B1、B2層に細分されるが、B1層の方がやや暗い土でB2層よりも固さ、しまりを欠く。

土器　遺物は、埋土中より出土しているが小破片が主体で量的にも少ない。第29図の15～24までである。15～18は口縁部片で、15は、隆沈線により区画文を描くもの。17、18は口縁上部を磨消し無文部を形成するもの。19、21は隆沈線で渦巻文を描くもの。20は縄文施文後に沈線を施す。22、23は隆沈線の懸垂文を施文する。24は沈線間を磨消すもので区画文を描くものか。

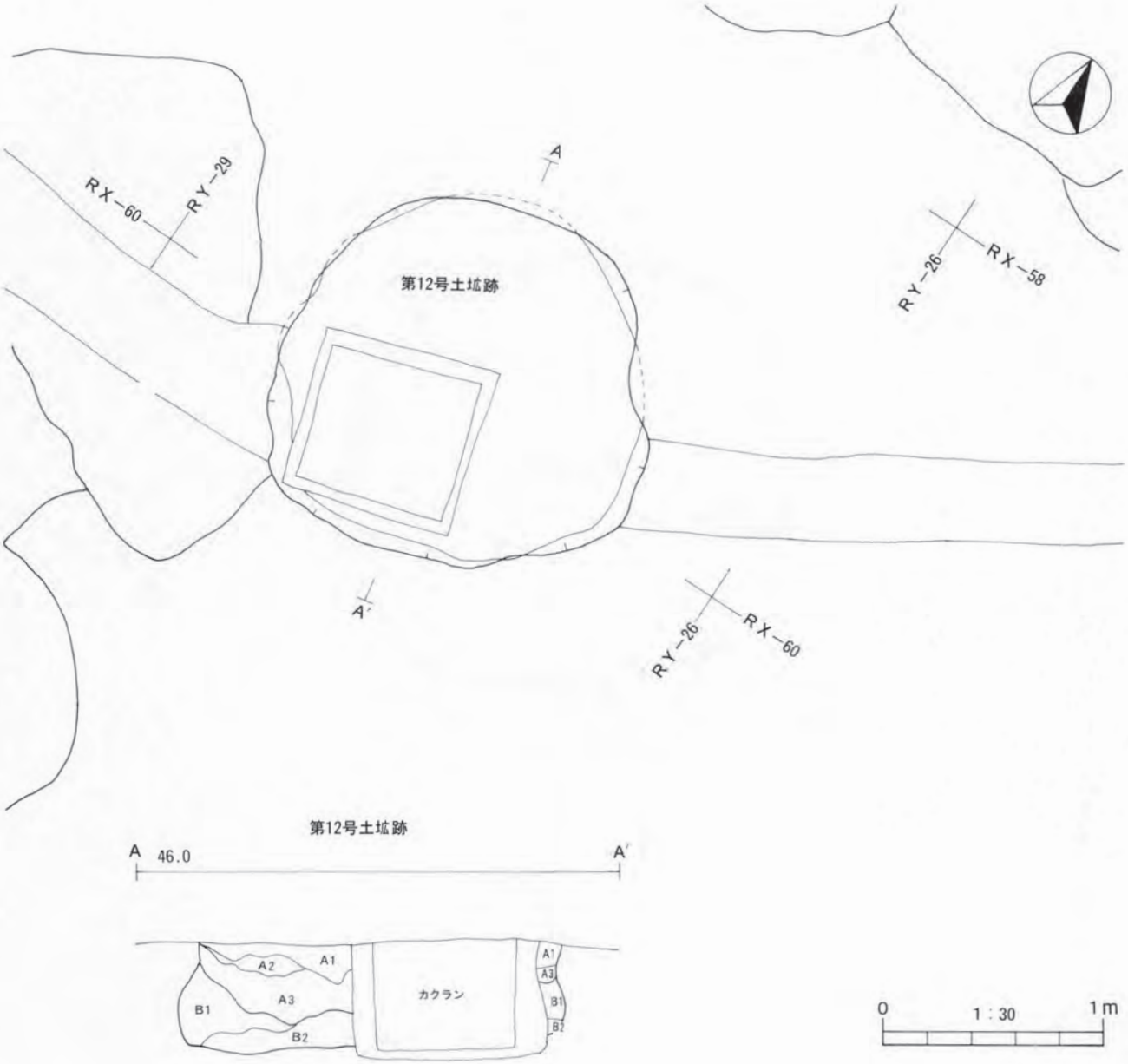
第13号、14号土坑跡（第31図）

重複　調査区の東南部に位置する。精査段階の土層断面観察により2つの土坑の重複が確認されたもの。第13号土坑跡の方が新しい。

平面形、規模　第13号土坑跡の平面形は、上場、下場ともほぼ円形を呈する。規模は、上場、下場とも直径2.0mをはかり、壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは0.45mをはかる。

埋土　埋土は、大きくA～D層の4つに分けられる。A層は、やや明るい黒褐色のシルト質～砂っぽい土を基本とするやわらかくあまりしまりのない土層である。真砂土粒の混入が多い。B層は、暗褐色の砂質土を基本土とする比較的固くしまった層でB1、B2層に細分される。B1層には、多量のにぶい黄褐色砂質土塊が混入し少量ながら炭化物粒が含まれる。B2層は、B1層よりも暗く明るい黒褐色に近く固さ、しまりも欠く。C層は、黒褐色のシルト質～砂っぽい土を基本土とする固くしまりのある土層である。比較的多く炭化物粒を含む。D層は、底面の中央部に堆積するものでにぶい黄褐色のかなり砂質の強い土を基本土とする。比較的固くしまっており、炭化物粒を含む。また、真砂土粒が多量に混入する。

底面　底面は、ほぼ平坦面で比較的固くしまっている。底面の壁際には、扁平な楕円形礫や板状の礫が認められた。



第30図　第12号土坑跡

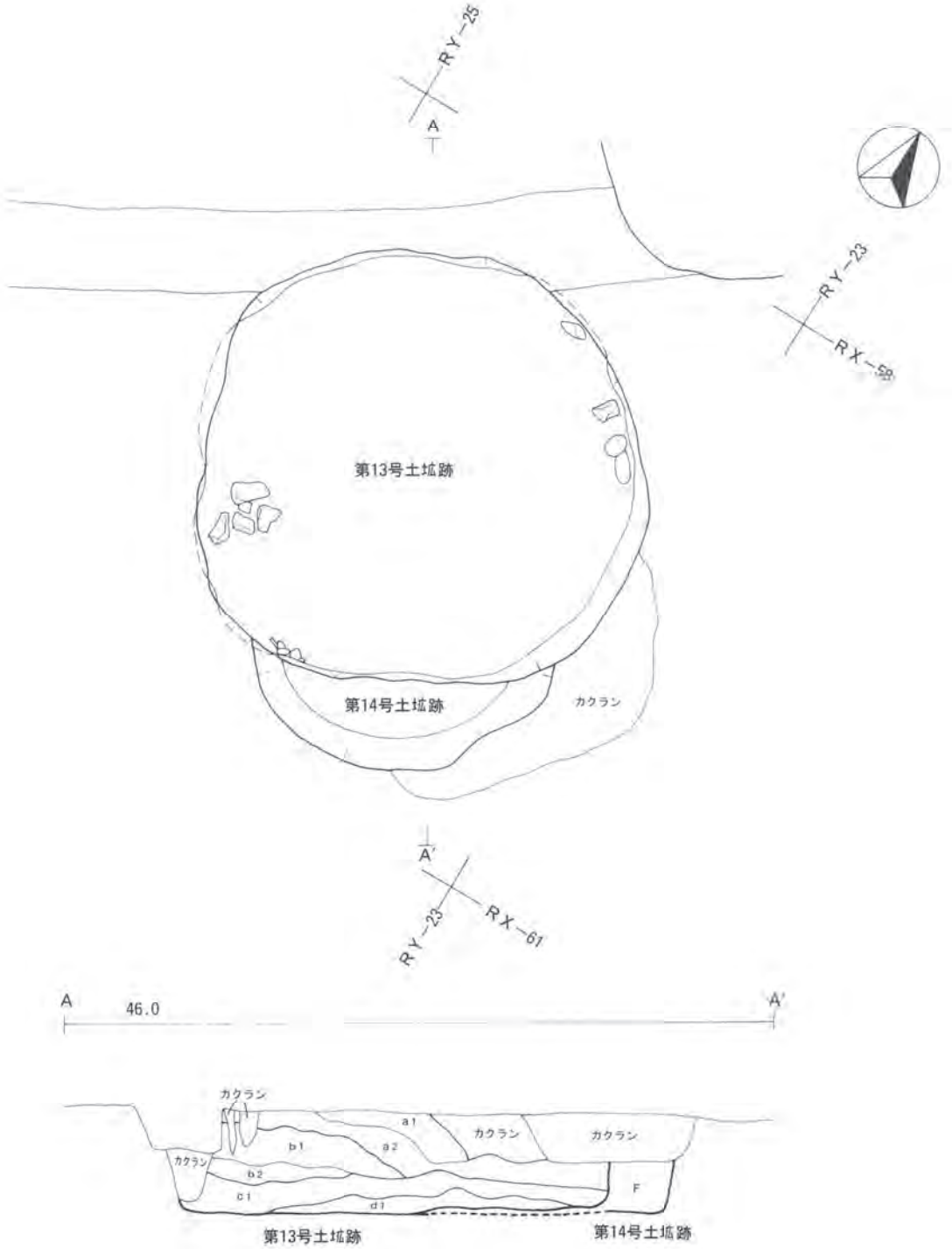
第14号土坑跡は、その大半部分が第13号土坑跡により切られ消失しているため全容は不詳である。平面形は、僅かに残存する部分から円形状になるものと推定される。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

埋土

埋土も残存部分の上半も攪乱されており中半から底部にかけてＦ層が堆積する。Ｆ層は、やや明るい暗褐色の砂っぽい土を基本土とし固さ、しまりを欠く。少量ながら炭化物粒の混入が認められた。

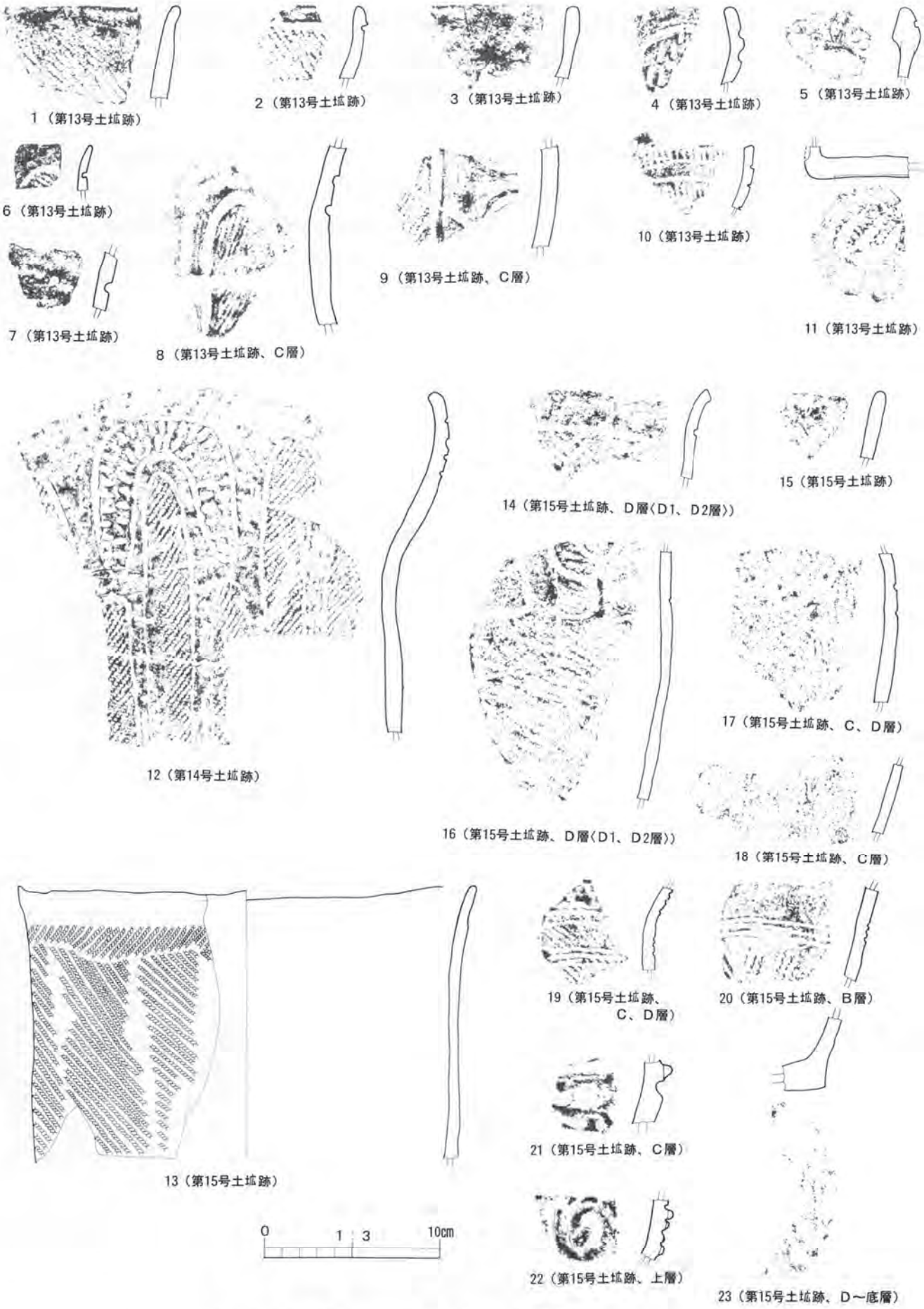
土器

遺物は小片を中心に出土している。第32図１～11、第33図が第13号土坑跡から出土した遺物である。第32図１、２は、口縁部上端に無文部を作るもので２は無文部と縄文施文部の境に沈線を施す。３～９は、磨消しと沈線及び刺突文を文様要素にするもの。４は、刺突文を沈線で区画する。５は口縁部が肥厚する。６、８、９は縦位の楕円形区画文を施文するもの。10は、



第31図　第13号、14号土坑跡

0　1 30　1m

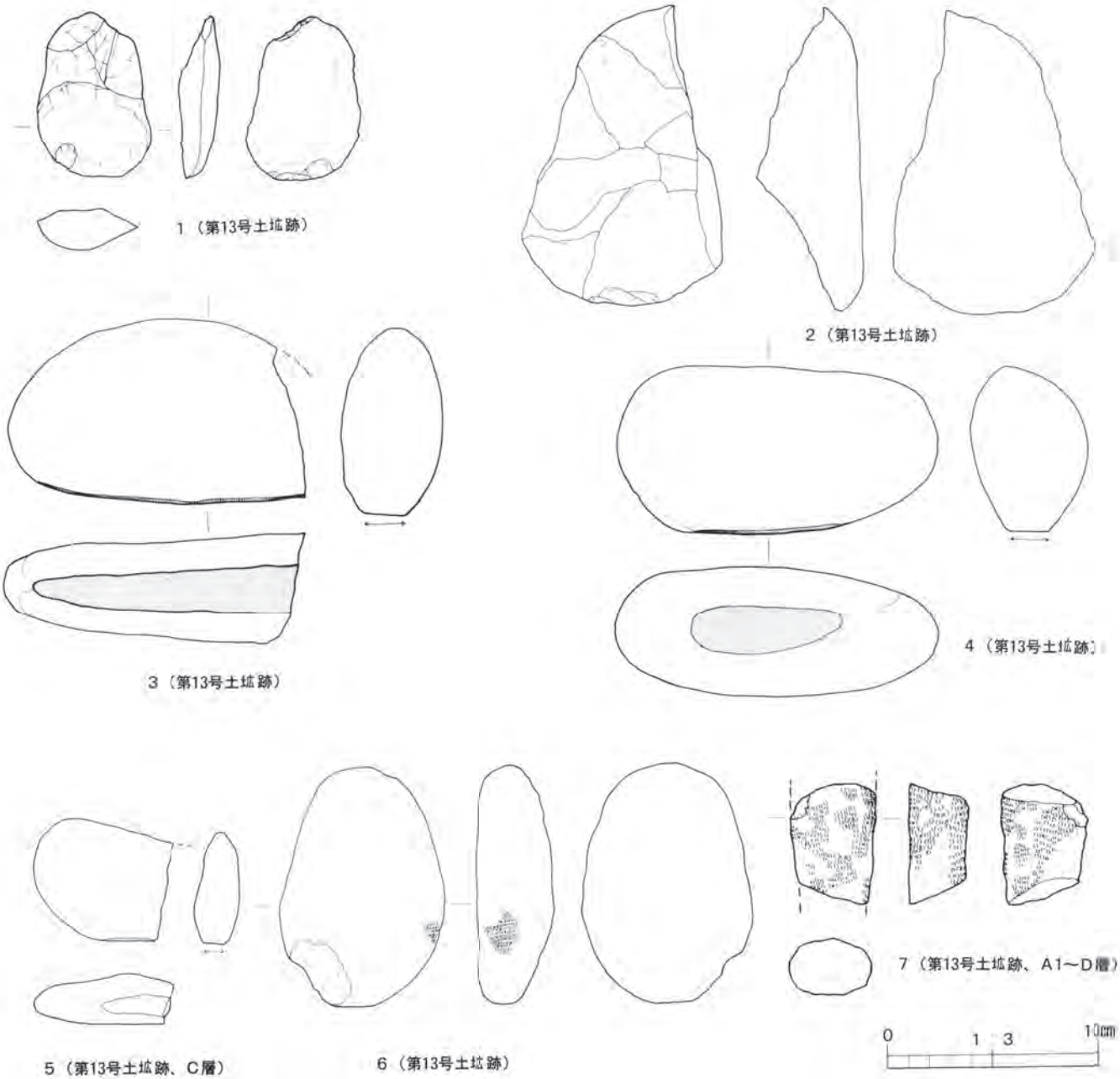


第32図　第13号、14号、15号土坑跡出土遺物

口縁に小突起を持つもので磨消し部に沈線で格子状に施文する。12は第14号土坑跡から出土したもので、口縁部がゆるやかに内わんし体部が直線的な深鉢である。口縁は、ゆるやかに波状を呈し波頂下には刺突文を区画したり縦位の長楕円形の区画文を描く。胎土・焼成とも非常に良好なものである。

石器

第33図は第13号土坑跡から出土した礫石器。1は背面に自然面を残す打製の石斧。大まかな剥離で形を作っている。2も背面に自然面を残す打製石斧て撥形となるもの。背面の自然面はそのまま残す。3～5は、敲打磨石で楕円形礫の長端部を利用している。6は敲打痕が一部に認められるもの。7は石斧の欠損品と思われるが、全面に整形のための敲打痕が認められる。



第33図　第13号土坑跡出土石器

第15号土坑跡（第34図）

調査区の東北隅に位置する。南東部の一部が攪乱により破壊されている。

平面形は、上場、下場とも円形となる。規模は、上場で直径1.7ｍ、下場で2.1ｍをはかる。壁は、フラスコ状に立ち上がり底面からの角度は約45度ときつい。検出面からの深さは0.55ｍをはかる。 **平面形、規模**

埋土は、Ａ～Ｄ層に大別される。Ａ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とする柔らかくしまりのないものである。Ｂ層は、灰黄褐色のやや砂質の強い土を基本土とする比較的固くしまりのある土層でＢ１、Ｂ２層に細分される。Ｂ１層は、壁際の方に黄褐色の砂質土や真砂土塊を多量に混入する。Ｂ２層はＢ１層よりも暗い土である。Ｂ１、Ｂ２層ともに比較的大きな礫や中小の楕円形礫が混在する。Ｃ層は、やや粘性の有る黒褐色土を基本土とする柔らかいが少ししまりのある層で炭化物粒を多く含む。Ｄ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とする全く固さ、しまりのない土層でＤ１、Ｄ２層に細分される。Ｄ２層の方が幾分明るい土である。 **埋土**

底面は、平担面で比較的固くしまっている。底面上には多量の中小の礫が存在し、特に東壁側には多量の礫が集中していた。 **底面**

遺物は比較的多く出土している。第32図13～23、第35図１～30が第15号土坑跡から出土した土器である。第32図13は、体部下半～底部を欠く深鉢で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもの。口縁部上半は、無文部に磨消し下半には横回転の縄文（ＬＲ）を施文し体部には縦回転のＬＲ縄文を施文している。14は口縁部上半の無文部と体部縄文部の境に沈線を施すもの。16、17は体部上半に沈線で曲線文を描く。19、20は沈線を施すもので20は磨消し部を伴うもの。21、22は隆沈線文を施文するもので22は渦巻文が描かれる。23は底部片で底面に木葉痕が認められる。第35図１～10は縄文主体の土器で、口縁部がやや外反する深鉢土器となる。11～18は、刷毛目状の細く浅い沈線を縦～斜位に施文するもの。17は底部片で底面に木葉痕が認められる。20～28は口縁部が無文となるもので、22は竹管の円形刺突文が施される。24は沈線が施文される。25は貼瘤状の小突起を施している。26～28は隆線を施すもの。29、30は、沈線と刺突文と磨消しにより文様を描くもの。 **土器**

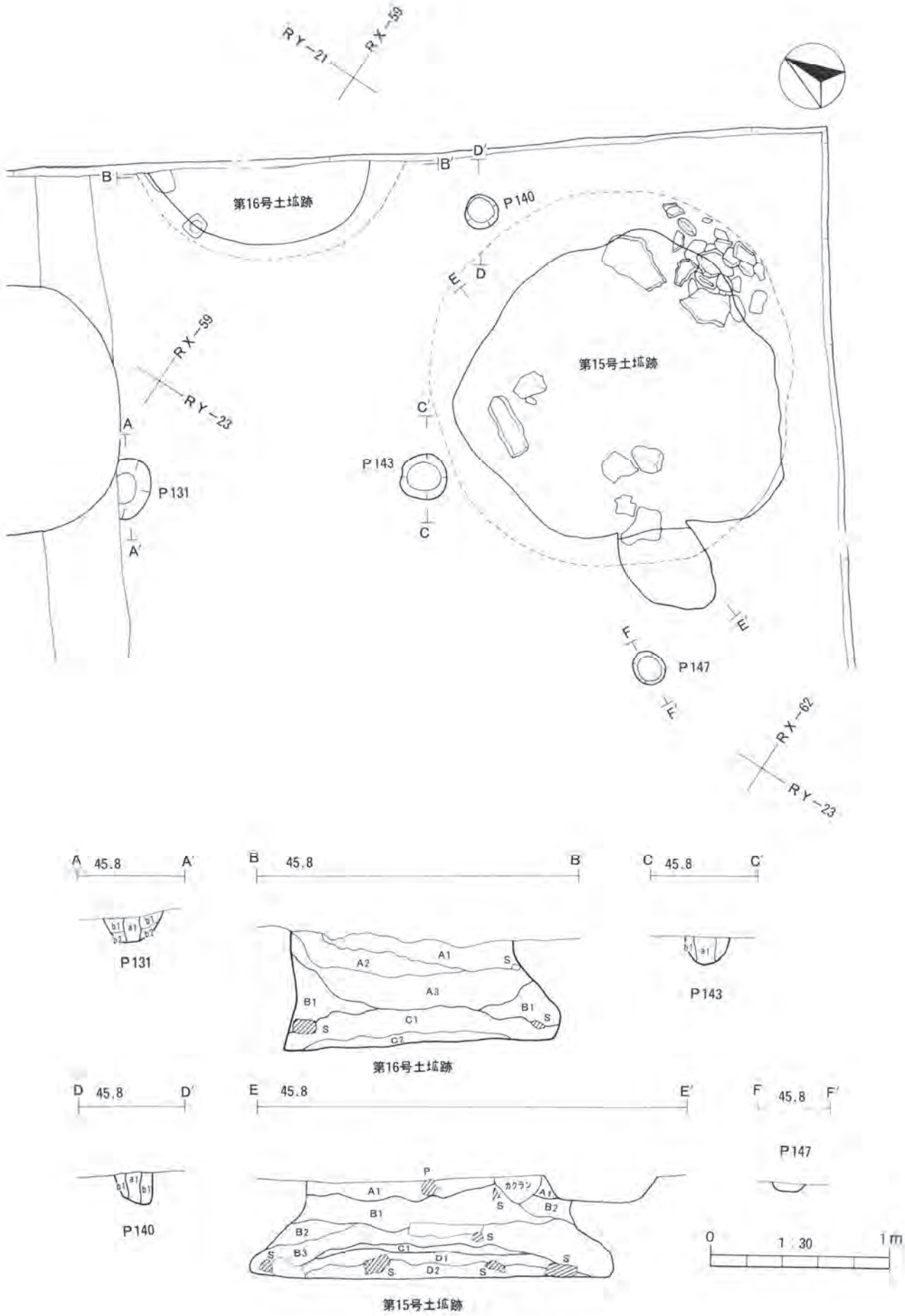
第36図は、第15号土坑跡から出土した礫石器で、１は刃部下半を欠く大型の石斧の類と思われるもの。２は磨製石斧の下半部を欠くもの。全面に整形時の擦痕が認められ、頭部には敲打痕が認められる。 **石器**

第16号土坑跡（第34図）

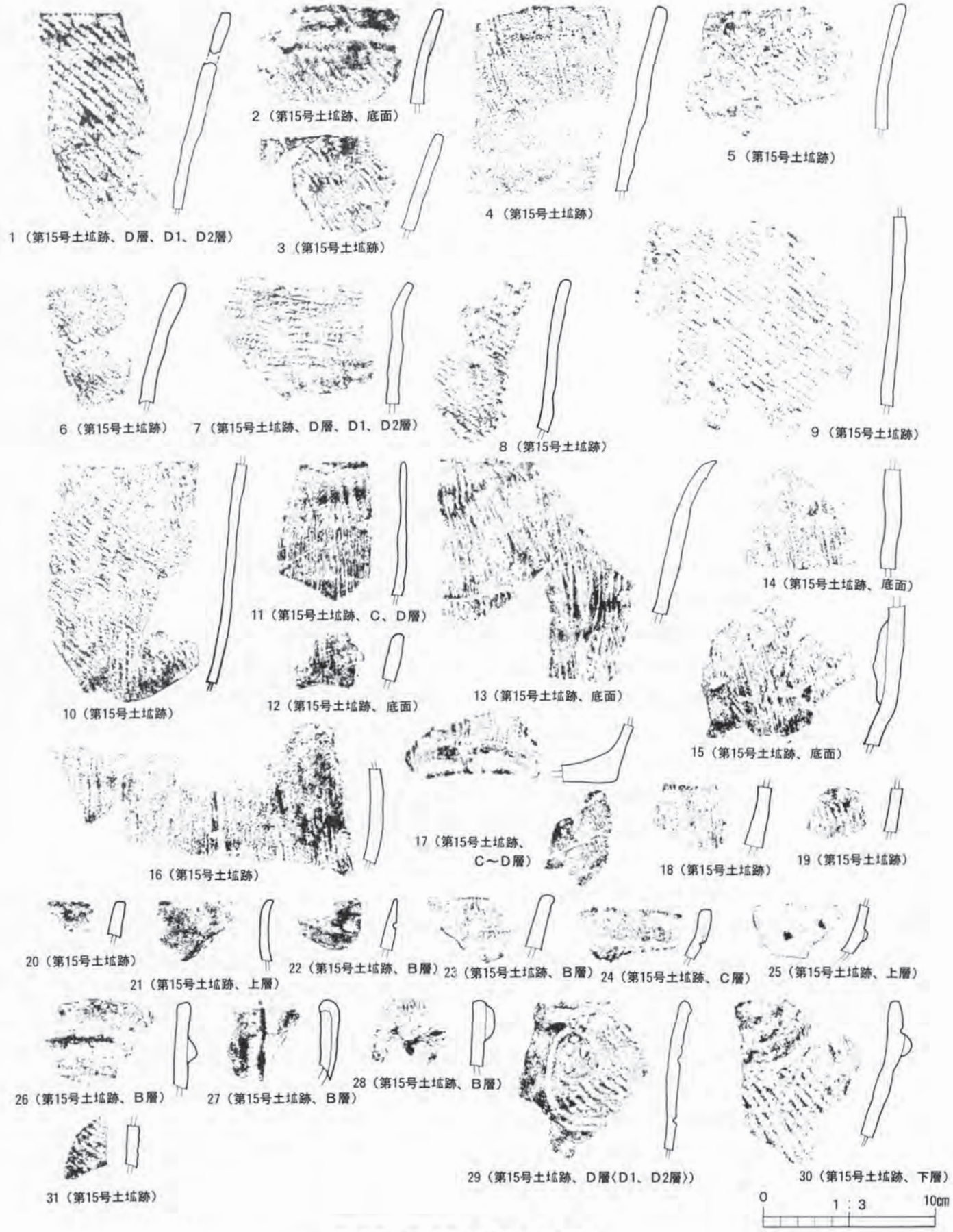
調査区の東壁側に位置し、大半部分が調査区外のため全容は不詳である。

平面形は、円形ないしは楕円形を呈するものと推定される。壁は、フラスコ状に立ち上がるが南壁側の方が底面からの角度がきつく、北壁側の方はほぼ垂直になっているが壁が大きく崩壊したものと考えられる。検出面からの深さは0.55ｍをはかる。

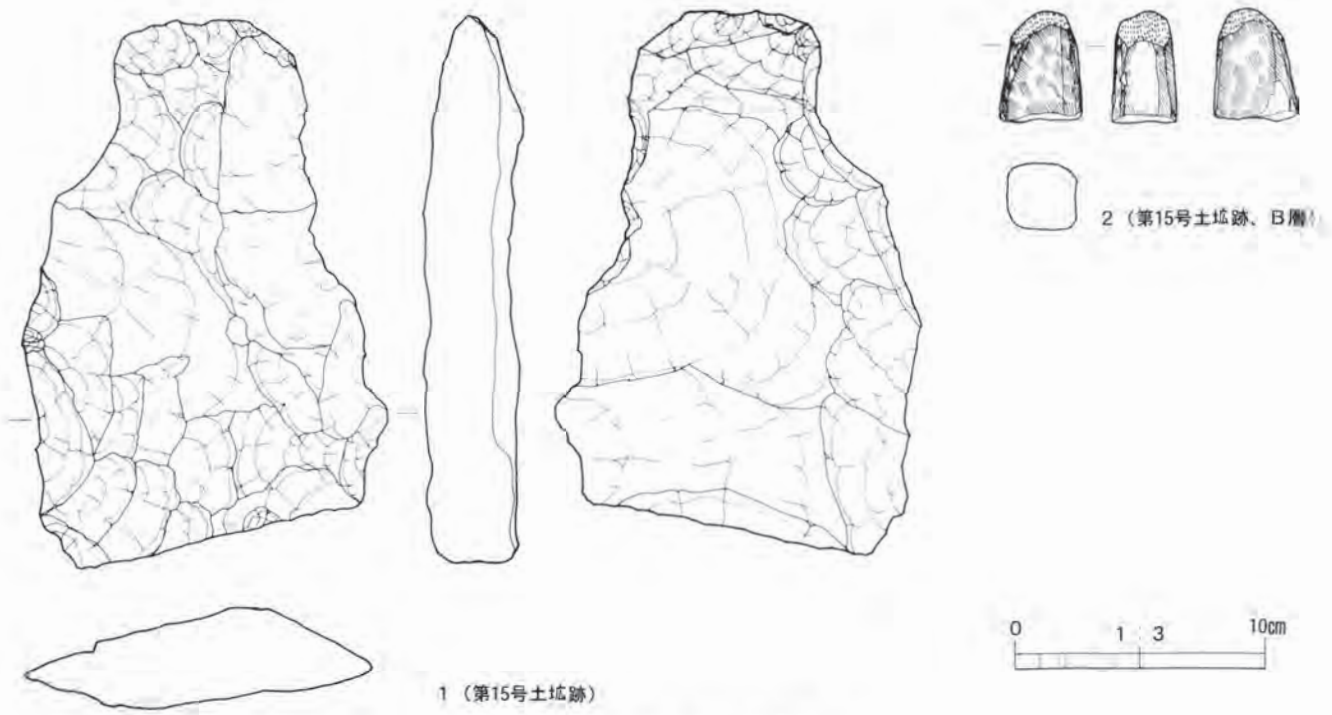
埋土は、Ａ～Ｃ層に大別される。Ａ層は、暗褐色の砂っぽい土を基本土とするやや固くしまっている。Ａ1～Ａ3層に細分される。Ａ1層が一番明るい土でＡ3層が暗い土となる。Ｂ層は、壁際に堆積するもので褐色の砂質土を基本土とする。黄褐色土や真砂土塊を多く含むもので柔らかくしまりがない。Ｃ層は、にぶい黄褐色のやや砂質の強い土を基本土とするものでＣ1、Ｃ２層に細分される。Ｃ２層の方が暗い土で若干の粘性を有す。比較的多くの炭化物粒を含む。 **埋土**



第34図　第15号、16号土坑跡



第35図　第15号土坑跡出土遺物



第36図　第15号土坑跡出土石器

底面　底面は、ほぼ平坦面で固くしまっている。

遺物の出土量は少量だが、第37図が第16号土坑跡から出土したものである。

土器　1は口縁部がやや外反するもので隆沈線で渦巻文を描くものか。2は口縁部上半に隆沈線文を施し下半部から体部にかけては縄文を施文する。3は無文部に刺突を施すもの。4は、刷毛目状の細い沈線を口縁より施文する。5～10は、隆沈線や沈線と磨消しで区画文を描くもの。8、10は磨消し部により縄文の区画文が曲線状になる。11は、体部下半から底部にかけてのもので底面に木葉痕が認められる。

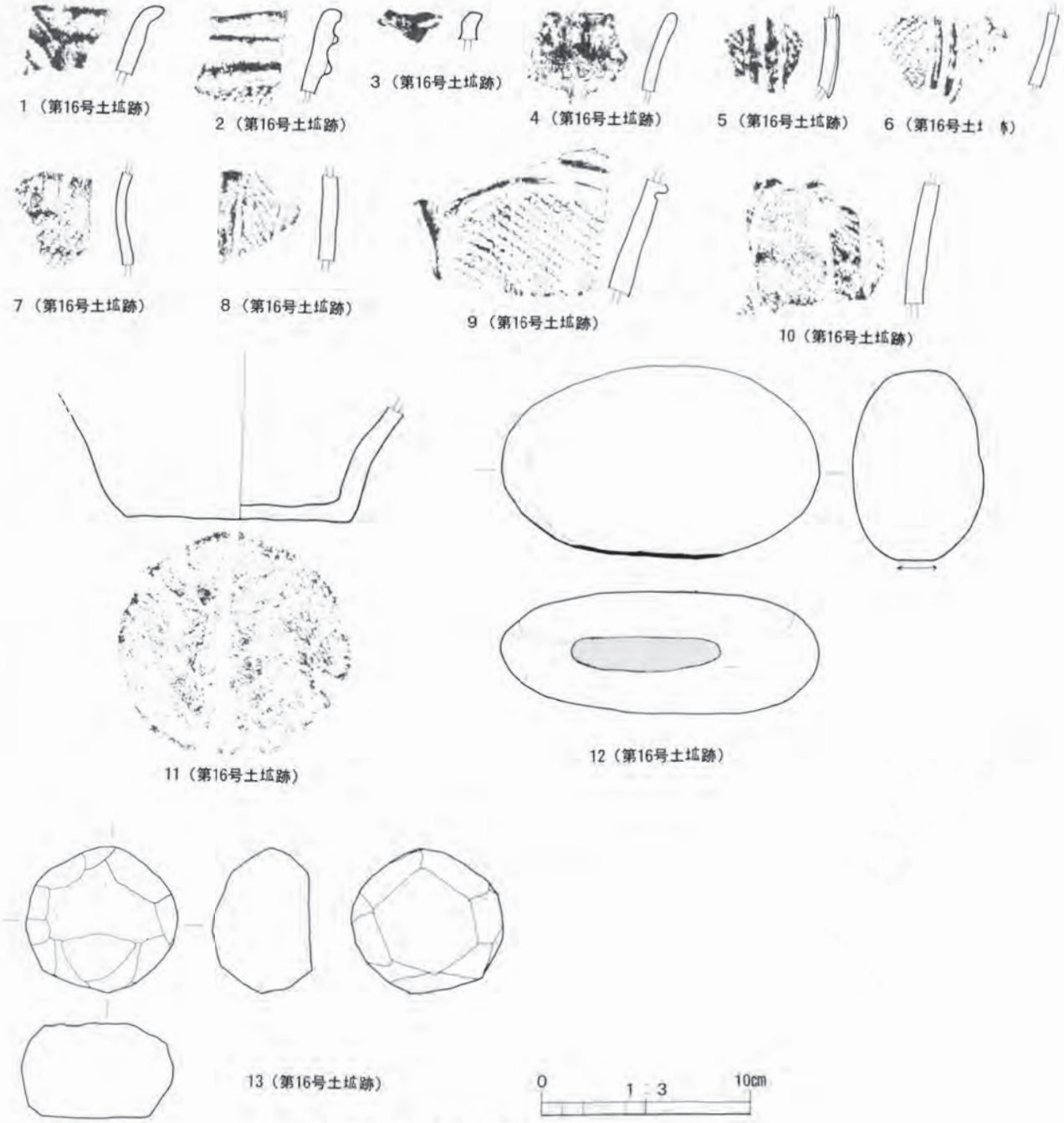
石器　12、13は、礫石器で12は敲打磨石。機能面（磨面）は小さい。13は、そろばんの玉状を呈し上面を除く全面を磨る。下面は平坦に磨り側面は小さく面取りした様に磨っている。

第17号土坑跡（第38、39図）

重複　調査区の東側に位置する。第20号土坑跡と重複するがこれよりも新しい。

平面形、規模　平面形は、上場、下場とも円形を呈する。規模は、上場、下場とも直径1.6mをはかるが、幾分下場径が大きくなる。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がるが若干フラスコ状を呈す。検出面からの深さは、0.4mをはかる。

埋土　埋土は、A層～C層に大別される。A層は、にぶい黄褐色～暗褐色のやや砂っぽい土を基本土とする土層でA1～A5層に細分される。A1層は土坑上部に薄く堆積が認められるもので、やや黒味のある暗褐色土を基本土とする。A2～A5層に比べやや固さに欠ける。A2層は、暗褐色～にぶい黄褐色土を基本土とし黄褐色～灰褐色の真砂土粒塊を混入する。A3層は、炭化物粒を多く含む。A4層は土坑中央部から西、南壁側に堆積するもので暗褐色土を基本土とする。A5層はにぶい黄褐色土を基本土としている。B層は、褐色から黄褐色に近いかなり砂



第37図　第16号土坑跡出土遺物

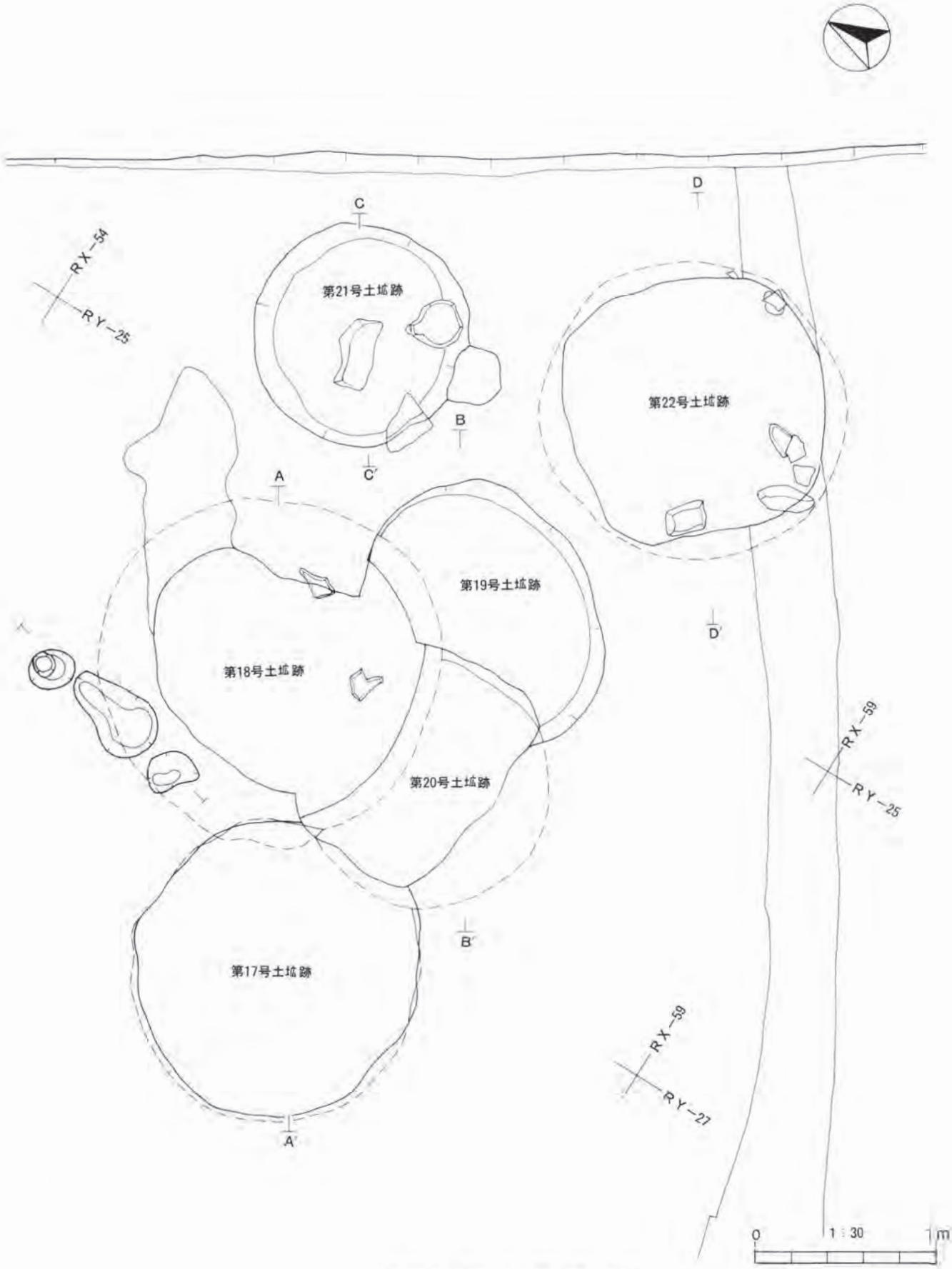
質の強い土を基本土とする土層で底面の中央部に厚く堆積する。比較的固いがあまりしまりがない。中～小礫を混入する。C層は、東～北壁側に堆積する明黄褐色～灰褐色の真砂土塊で壁の崩壊したものと考えられる。

底面

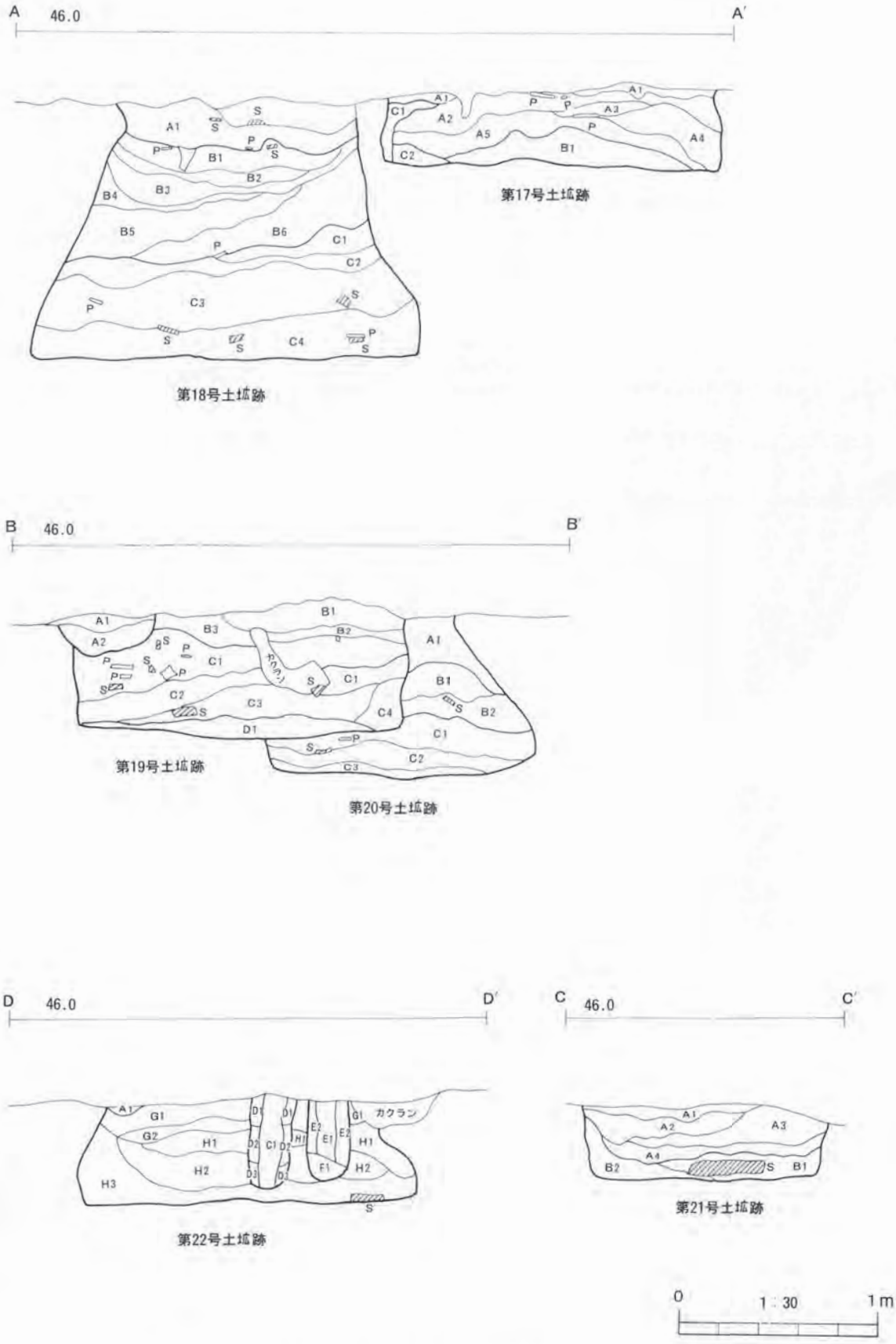
底面は、地山の花崗岩を掘り込んだ固くしまった平坦面である。

土器

遺物は、壁際を中心として出土している。第40図1は東壁際からまとまって出土したもので、口縁部がやや内わんする深鉢である。口縁部上半には隆沈線を巡らし下半から体部にかけては、縄文施文後に横位の沈線を施文し、体部中半から底部にかけては縦位の沈線や波状の沈線等を



第38図　第17号〜第22号土壙跡

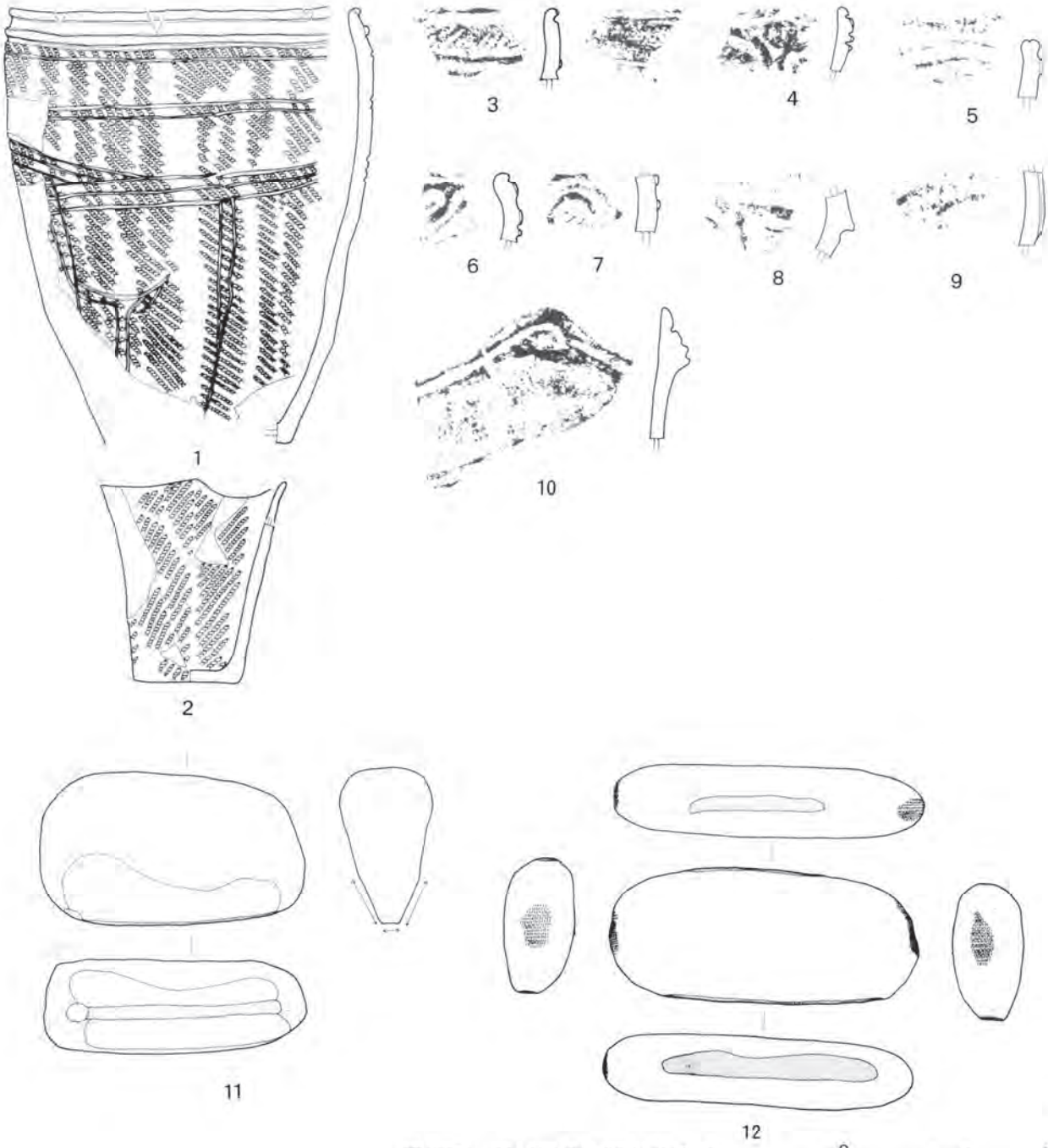


第39図　第17号～第22号土坑跡断面図

施文している。2は小形土器で口縁が4波状を呈する。口縁から底部まで縄文を施文しただけのものである。3～6はキャリパー形深鉢の口縁部。3は隆沈線で口縁部を区画するものか。内面にも沈線を施している。4～6は隆沈線で渦巻文を描くもの。8は波状口縁を呈すもので波頂下に隆沈線で小渦巻文を描くもの。7、9、10は隆沈線で文様を描くもの。9は刻目文が施されている。

石器

11、12は礫石器。どちらも敲打磨石だが、11は磨面を一定にするために側面に調整磨面が伴う。12は、扁平な楕円形礫で上下の両面に磨面が形成されている。また、両端部には敲打痕が認められる。



第40図　第17号土坑跡出土遺物

第18号土坑跡（第38、39図）

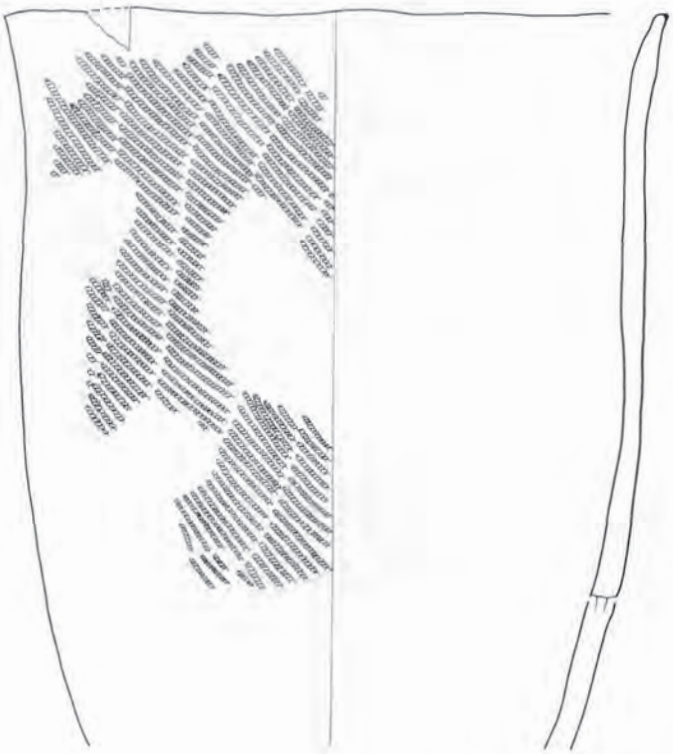
第16号土坑跡に東隣する。第19号、20号土坑跡と重複するが、これらよりも新しい。 **重複**

平面形は、一部攪乱されており不明瞭ながら上場では楕円形、下場は円形を呈する。規模は、上場で1.4×1.1m、下場で直径1.9mをはかる。壁は、フラスコ状に立ち上がり上場付近で外側に開く様である。検出面からの深さは、1.3mをはかる。 **平面形** **規模**

埋土は、A層、B層、C層に大別される。A層は、黒褐色のシルト質からやや砂っぽい土を基本土とする土層で小礫や炭化物粒を少量ながら含む。B層は、灰黄褐色の砂質土を基本土とする土層で土坑中央部に厚く堆積する。比較的固いがしまりはやや欠く。B1～B6層に細分される。B1層は、やや暗くB3、B5層は明るい土となる。また、B層全体に真砂土粒・塊を多量に混入する。C層は、にぶい黄褐色～暗褐色に近いやや砂っぽい土を基本土とする土層でやや固くしまっている。全体的に比較的多くの炭化物粒の混入が認められた。特に底面全体を覆うC4層の下部付近は多い。また、C3、C4層中には中小の礫が混在する。 **埋土**

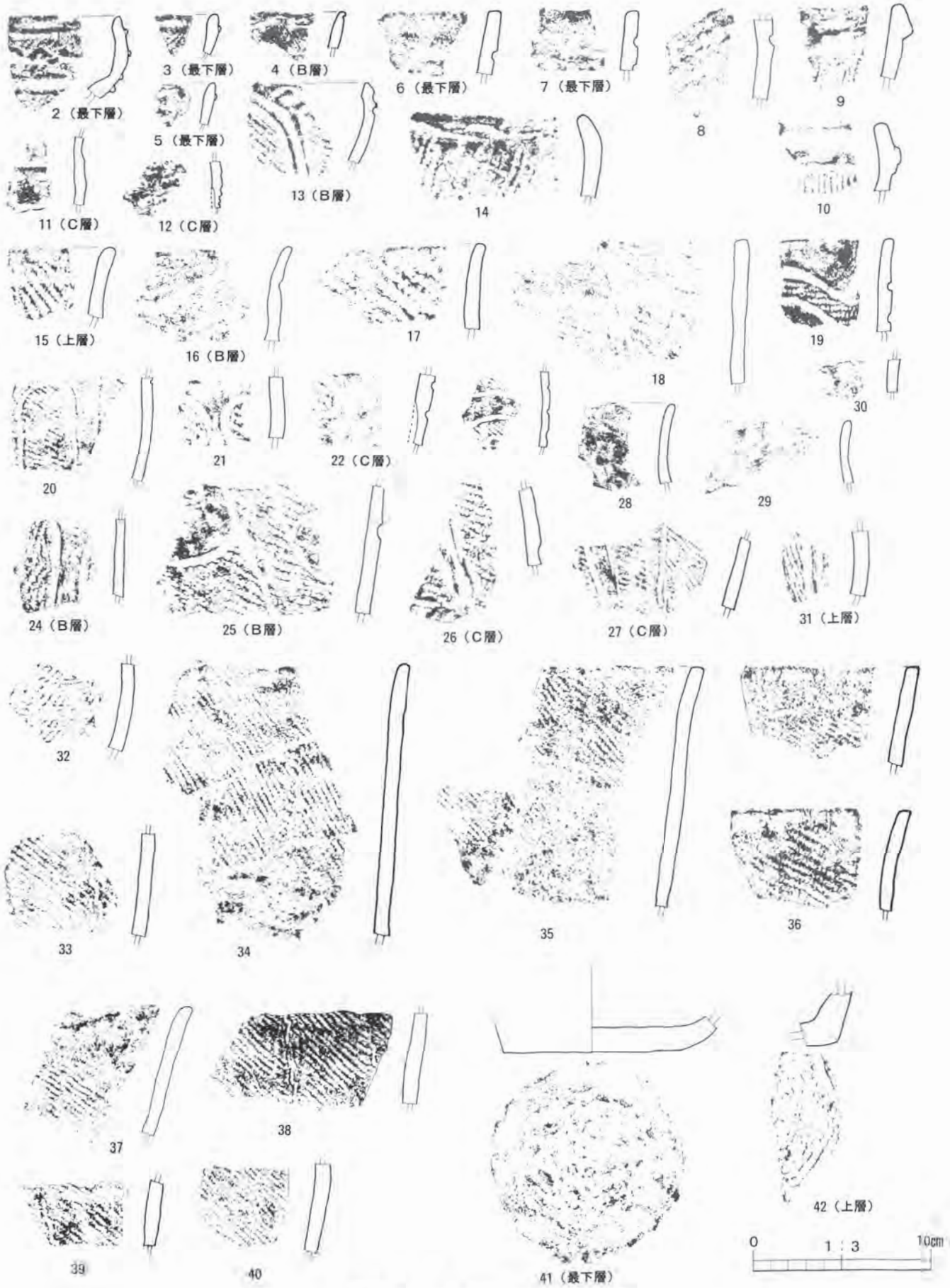
底面は、地山の花崗岩を掘り込んだ固くしまった平坦面である。 **底面**

遺物も比較的多く出土している。第41図1は、口縁部がわずかに外反する粗製の深鉢土器で口縁部より縄文を施文しただけのもの。第42図2は、内わんの強いキャリパー形深鉢の口縁部で隆沈線で区画した中に隆線を波状に施文する。3～5は口縁部の小破片で隆沈線を施す。6～8、11、12は、磨消した無文部に竹管の円形刺突文を施すもの。6、7は口縁部片で、ほぼ直立する口縁部となる。12は数列に刺突文を施している。9は、口縁部が肥厚する複合口縁となるもの。10は、口縁部が内わんするもので口縁上半に隆沈線文を施す。13はキャリパー形深鉢の口縁部で隆沈線で小渦巻文、区画文を描くもの。14、15、17は縄文主体の土器。16、18～27は、磨消し技法と沈線により楕円形文、円形文、曲線文を描くもの。28～30は、無文の土器。31、32は沈線を施すもの。34～41は、縄文主体の土器で同一個体と思われる。口縁部から体部にかけてほぼ直立する深鉢土器。33、34、39、40等の破片には縦位の綾絡文が見られる。42、43は底部片で、底面に網代痕が認められる。 **土器**



0　1：3　10cm

第41図　第18号土坑跡出土器(1)



第42図　第18号土坑跡出土土器(2)

第19号土坑跡（第38図、39図）

第18号、20号土坑跡と重複する。第18号土坑跡よりも古いが、第20号土坑跡よりも新しい。 **重複**

平面形は、上場、下場とも楕円形ないしは円形を呈するものと推定される。規模は、上場で直径1.7ｍをはかり、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは0.95ｍである。 **平面形** **規模**

埋土は、Ｂ層～Ｄ層に大別される。Ｂ層は、暗褐色のやや砂っぽい土を基本土とする比較的固くしまった土層でＢ1～Ｂ3層に細分される。Ｂ1層は、やや暗く黒褐色土や黄褐色土を小塊粒状に混入する。Ｂ2層は、明黄褐色～黄橙色の砂質土を粒塊状に多く混入する。Ｂ1、Ｂ3層に比べややしまりに欠ける。Ｂ3層は、炭化物粒、焼土が少量認められる。Ｃ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とする土層で比較的固くしまっている。Ｃ1～Ｃ4層に細分される。Ｃ1層は暗い土で炭化物粒を比較的多く含む。Ｃ2層は黄褐色～黄橙色の砂質土を塊状に混入し固さに欠ける。Ｃ3層はやや明るい土で比較的大きな炭化物粒が多く含まれている。Ｃ4層は、西壁側にのみ堆積するもので真砂土塊を大量に混入する。Ｄ層は、土坑底面の中央に堆積するものでやや粘性の有る黒褐色土を基本土とし比較的固くしまっている。炭化物粒を多量に混入する。 **埋土**

底面は、中央部がやや低くなるが全体的には平坦面である。 **底面**

遺物はＣ層を中心に出土している。第43図１は、キャリパー形土器の口縁部片。口縁部には平行沈線が施文される。２は口縁の外傾するもの。縄文施文後に沈線を円形状に施す。３は口縁部が直立するもので、口縁上半は無文部である。上半の無文部と下半の縄文部の境には隆沈線を施す。４、５は縄文主体の土器。６は沈線間を磨消す。７、８、10～20は、磨消し技法と沈線により楕円形～曲線状の区画文を描くもの。11～14、17、18、20は同一個体と考えられるもの。口縁部がゆるやかに内わんし体部が直線的となる深鉢土器で波状口縁を呈する。無文に磨消した口縁部には２列の竹管による円形の刺突文を施す。体部文様は磨消し部と区画文が組み合わさった文様を描くものか。 **土器**

第20号土坑跡（第38、39図）

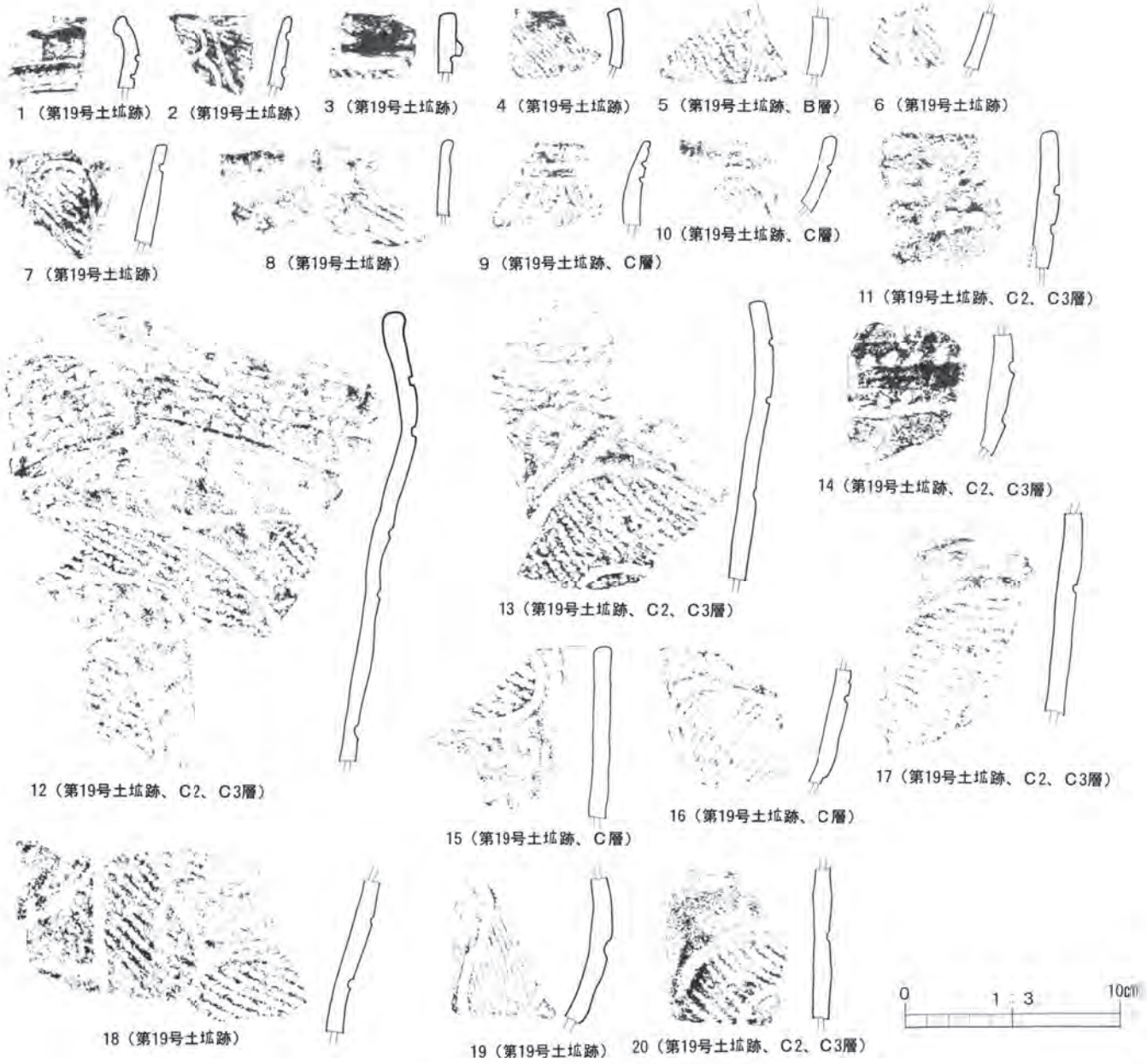
第17号～19号土坑跡と重複するが、これらのすべてに切られる古い時期のものである。 **重複**

平面形は、上場で楕円形、下場で円形を呈するものと推定される。規模は、下場で直径1.3ｍをはかる。壁は、フラスコ状に立ち上がり底面からの角度はきつい。検出面からの深さは、0.8ｍをはかる。

埋土は、Ａ層～Ｃ層に大別される。Ａ層は、暗褐色のやや砂っぽいシルト質土を基本土とし、比較的固くしまっている。Ｂ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とする柔らかくややしまった土層でＢ1、Ｂ2層に細分される。Ｂ1層はＢ2層よりもやや明るい土で黄褐色～黄橙色の真砂土を塊粒状に混入する。Ｂ1、Ｂ2層ともに炭化物粒を少量ながら含む。Ｃ層は、灰黄褐色のやや砂っぽい土を基本土とする非常に柔らかくしまりのない土層でＣ1～Ｃ3層に細分される。 **埋土**

底面は、固く比較的しまった平坦面である。 **底面**

遺物の出土量はあまり多くない。第44図が第20号土坑跡から出土した遺物である。１～５は口縁部がわずかに外反する深鉢形土器で、口縁部から縄文を施文する縄文主体の土器。口縁上９、10、12、14は縄文施文後に沈線を施文するもの。11、13、16は隆沈線文を施文するもの。 **土器**



第43図　第19号土坑跡出土遺物

15は、無文部に円形の刺突文を施文する。17は底部片。

石器

18、19は礫石器。18は円形礫の縁辺部を剥離したもの。19は背面に自然面を残す打製の石斧で、基部にのみ両面から剥離を加える。20は石製品で、両端部に穿孔を施す。下面部には擦痕が認められる。

第21号土坑跡（第38、39図）

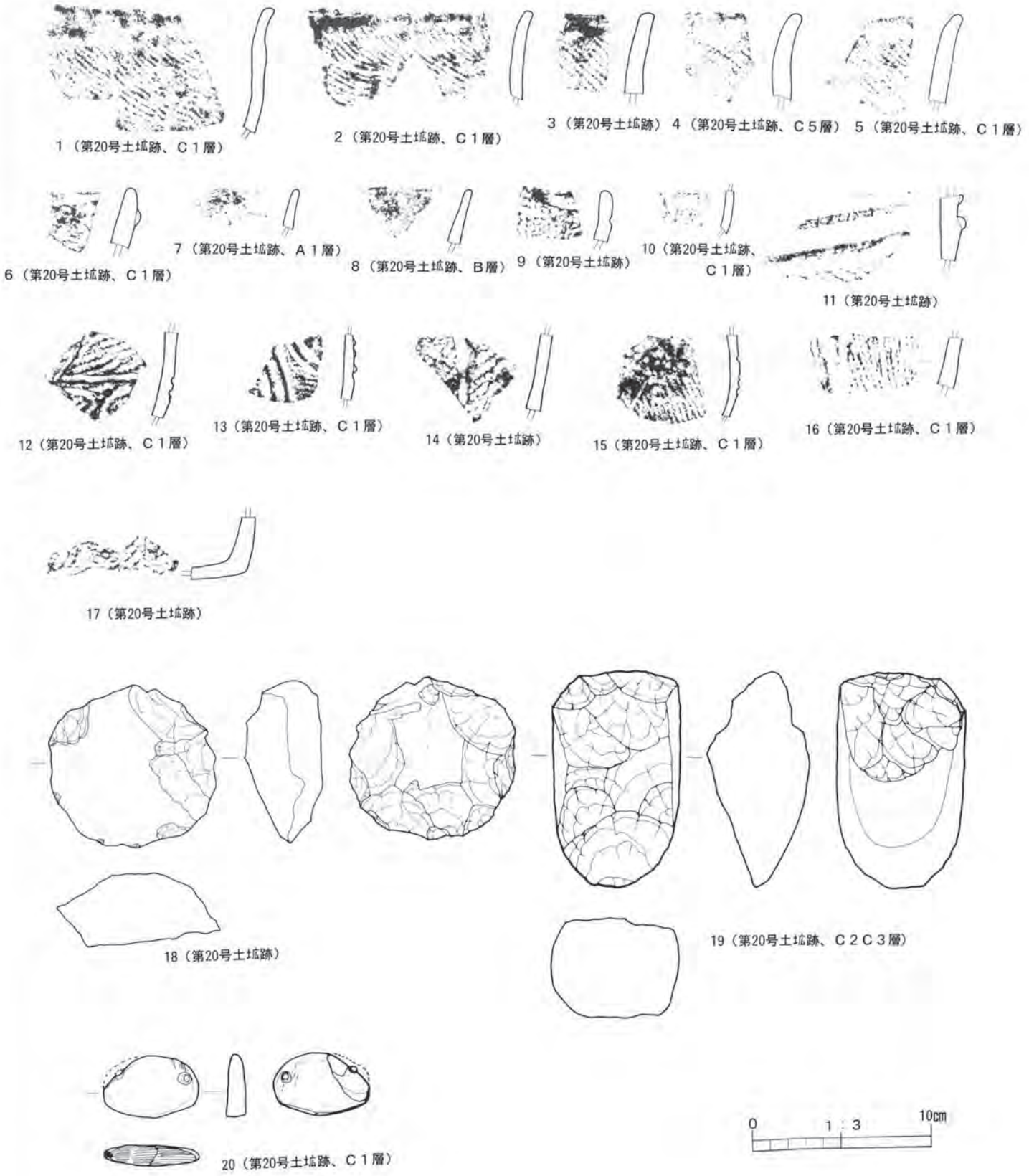
第18号土坑跡の東側に位置する。

平面形、規模

平面形は、上場、下場ともに円形を呈する。規模は、上場で直径1.2ｍ、下場で1.1ｍをはかる。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは0.35ｍをはかる。

埋土

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、暗褐色のやや砂っぽい土を基本土とする柔らか



第44図　第20号土坑跡出土遺物

くややしまった土層でＡ１～Ａ４層に細分される。Ａ２層はＡ層中最も明るい土で砂質の度合も強く、やや固さを持つ。Ａ３層は、黄褐色～黄橙色の真砂土塊を多く混入する。Ａ４層は一番暗い土を基本土とする。Ｂ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とする全く柔かくしまりのないもので、Ｂ１、Ｂ２層に細分される。Ｂ１層は、Ｂ２層よりも暗い土で真砂土塊を混入する。Ｂ１、Ｂ２層とも大～小礫が混在する。

底面　底面は、ほぼ平坦面で底面上の中央部と南壁際に扁平な大礫が存在する。

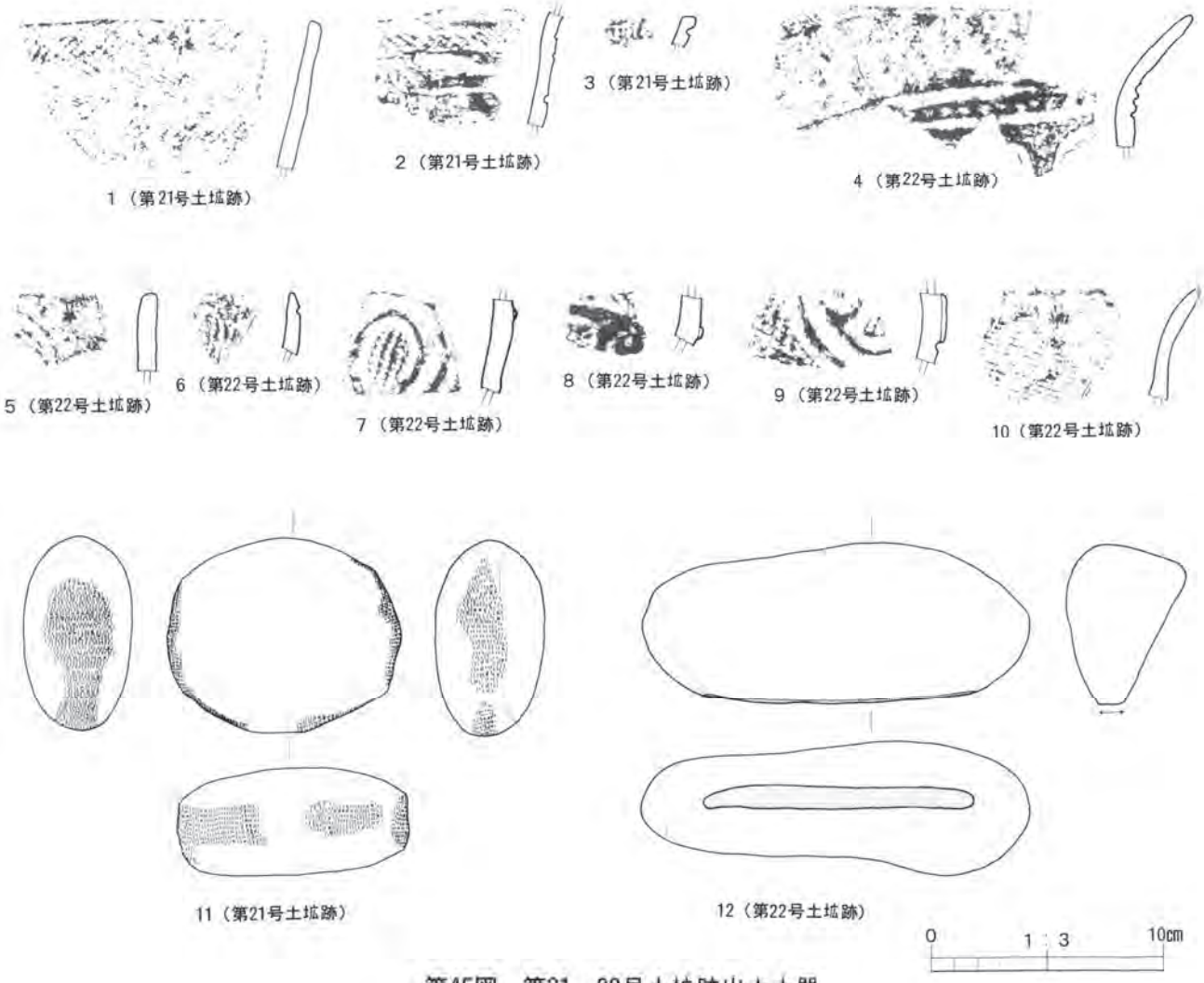
土器　遺物の出土量は少ない。第45図の１～３が土器、11が礫石器である。１は口縁直下より羽状縄文を施文する。２は磨消し技法が施され帯状に区画した縄文で文様を描くものか。３は刺突列が施されるもの。

石器　11は楕円形～円形に近い礫の側面部、下端部に敲打痕の認められるもの。

第22号土坑跡（第38、39図）

第20号土坑跡の南側に位置する。

平面形、規模　平面形は、上場、下場ともほぼ円形を呈する。規模は、上場で直径1.4ｍ、下場で1.7ｍを



第45図　第21、22号土坑跡出土土器

はかる。壁は、フラスコ状に立ち上がり、底面からの角度もややきつい。検出面からの深さは0.5mをはかる。

埋土

埋土は、G層、H層に分けられる。G層は、やや黄色味の強い暗褐色の砂質土を基本土とする比較的固くしまりのあまりないものでG1、G2層に細分される。G1層は真砂土粒を多量に含み、G2層は黒褐色のシルト質土を塊粒状に混入する。H層は、にぶい黄褐色の砂質のやや強い土を基本土とするやや固さ、しまりのある土層でH1～H3層に細分される。いずれも炭化物粒の混入が認められるが、特に床面を覆うH3層では塊状に多量に含む。

底面

底面は、多少の凸凹が認められるが概して平坦面である。

土器

遺物は破片を中心として出土している。第45図4～10が土器で12が礫石器である。4は、口縁部が大きく外反するもので口縁部は無文となる。頸部には2本の沈線を巡らしその沈線間に円形の刺突列を施す。体部は磨消しと楕円形ないしは円形の区画文を描くものか。5、6は、磨消しと区画文を施文する口縁部の破片。7～9は、隆沈線で文様を描くもの。10は口縁部から縄文を施文する縄文主体の土器。12は、長楕円形の礫を利用した敲打磨石で磨面の幅は0.1mとほぼ一定している。

石器

また、当土坑埋没後の埋土中にはP124～P216の小ピットが掘り込まれている。

P214は、直径0.2m、深さ0.05mの円形の小規模なピットである。埋土は、褐色のシルト質土を基本土とする全く固さ、しまりがない。

P215、P216は、どちらも柱痕跡の認められる柱穴ピット。P215は、直径0.2mをはかる円形プランを呈するもので、黒褐色土を基本土とするC層とにぶい黄褐色土を基本土とするD層から成る。P216は、直径0.25mの円形プランで暗褐色のやや砂っぽい土を基本土とするE層とにぶい黄褐色の砂質土を基本土とするF層から成る。

B　平安時代の遺構、遺物

第1001号竪穴住居跡（第46～第51図）

調査区の西壁際に位置し、遺構の半分以上は調査区外となる。

平面形
規模

平面形は、長方形ないしは方形を呈するものと推定される。規模は、長軸方向で6.9ｍをはかる比較的大型の住居跡である。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは、0.5ｍをはかる。カマドは、南東隅に存在するが大半が攪乱により破壊されており、わずかに礫が集石状態で残存しているのみであった。

埋土

埋土は、A層・B層・C層・D層に大別される。A層は、比較的固くしまりのある暗褐色のシルト質土を基本土とする土層でA1、A2層に細分される。A1は、竪穴上部全面を覆うものでやや暗い暗褐色土を主体とする。A2層は、竪穴の中央部にレンズ状に堆積するものでA1層よりは明るい暗褐色土である。黄褐色土を塊粒状に多量に混入し真砂土粒が多く含まれ全体的に白ぽい。B層は、竪穴中位に比較的厚く堆積するやや暗い黒褐色のシルト質土を基本土とする土層で、A層よりも固くしまっている。C層は、竪穴床面及び壁際に堆積する黒褐色のシルト質土を基本土とするものでC1～C3層に細分される。C1層、C2層は壁際に認められるもので、C1層は、柔らかくしまりがない。C2層は、黄褐色土塊を含む。C3層は、床面のほぼ全域を覆う比較的明るい黒褐色土で幾分粘性を有す。固くしまりがあり土師器、須恵器などの平安時代の遺物を含む。炭化物粒も比較的多く認められる。D層は、竪穴南壁中央部の壁際にのみ堆積するもので、粘性のある黒褐色シルト質土を基本土とする。黄褐色土塊をかなりの割合で混入する。

床面

床面は、壁際付近を除きほぼ全域に貼床が認められる。貼床は、粘性を有する明るい黄褐色土で構築されている。

カマド

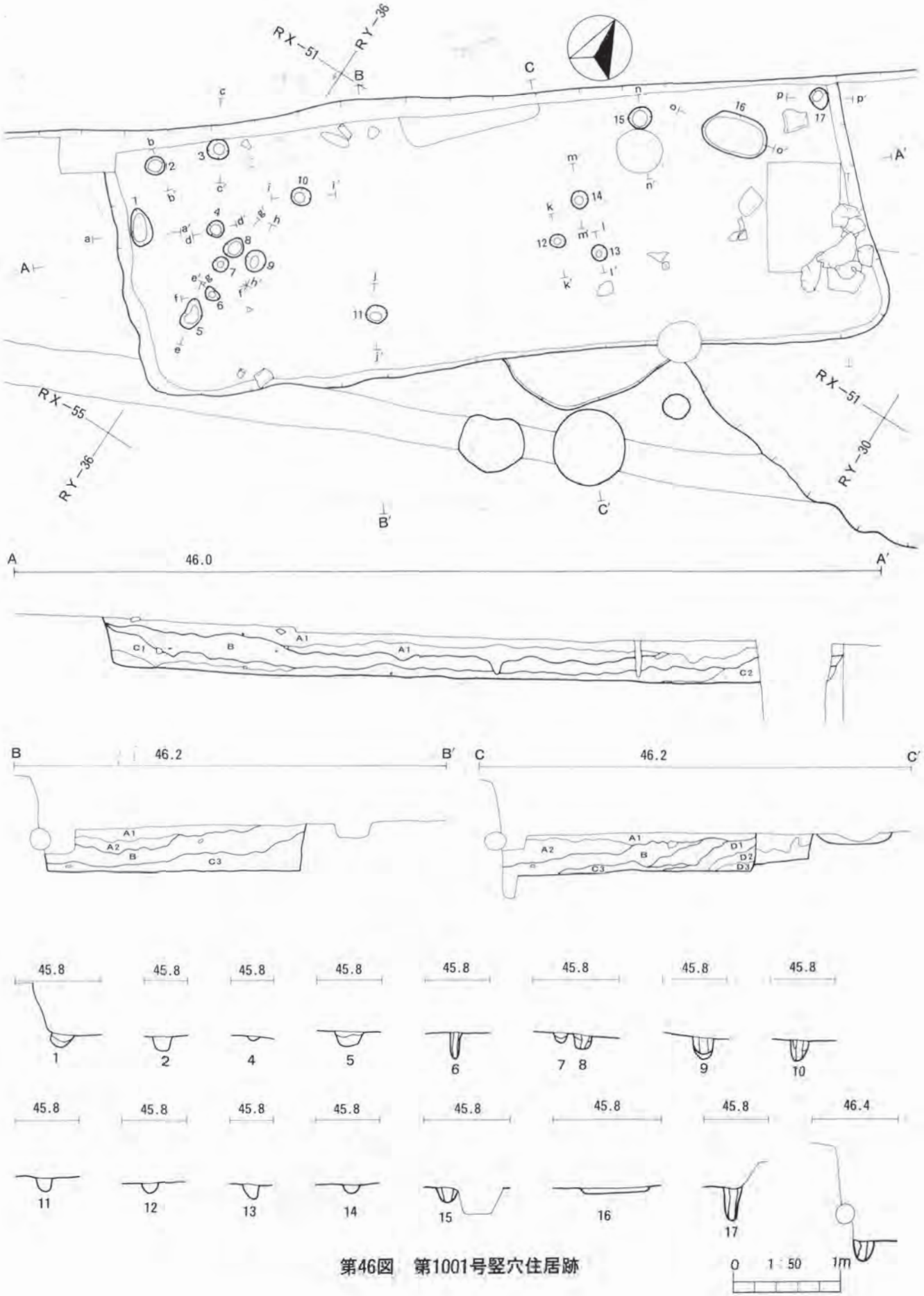
カマドは、南東隅に存在するが攪乱により破壊されており原形をとどめない。一部、燃焼を受けて黒礁げた礫が集石していることから、元々は石組みのカマドであったものと考えられる。煙道部は、攪乱により消失しており全く不明である。

柱穴

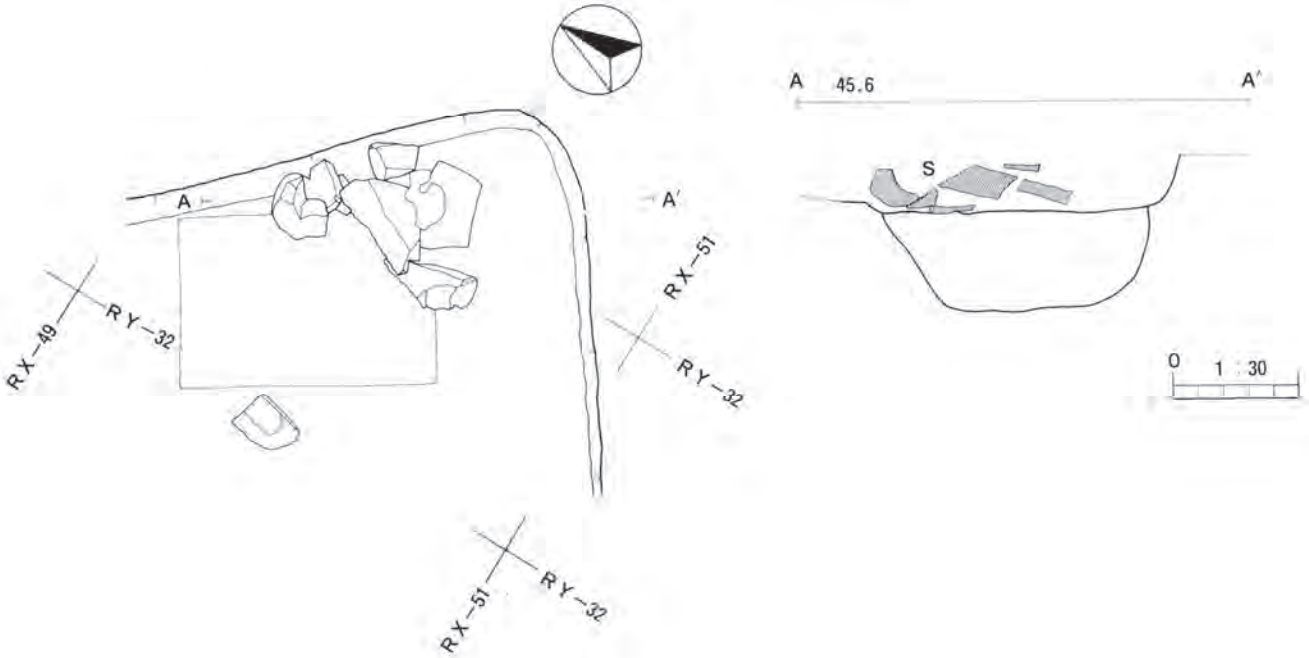
柱穴及び柱穴状のピットは、P１～P16までを検出した。いずれも円形～楕円形の平面形を呈す直径0.2ｍ内外の小規模なものである。P６とP17は床面からの深さが0.25～0.3ｍと比較的深いものだが、ほかは0.1～0.15ｍと浅い。遺構の半分以上が調査区外で精査できなかったため、具体的な柱穴配置等は不詳である。

須恵器

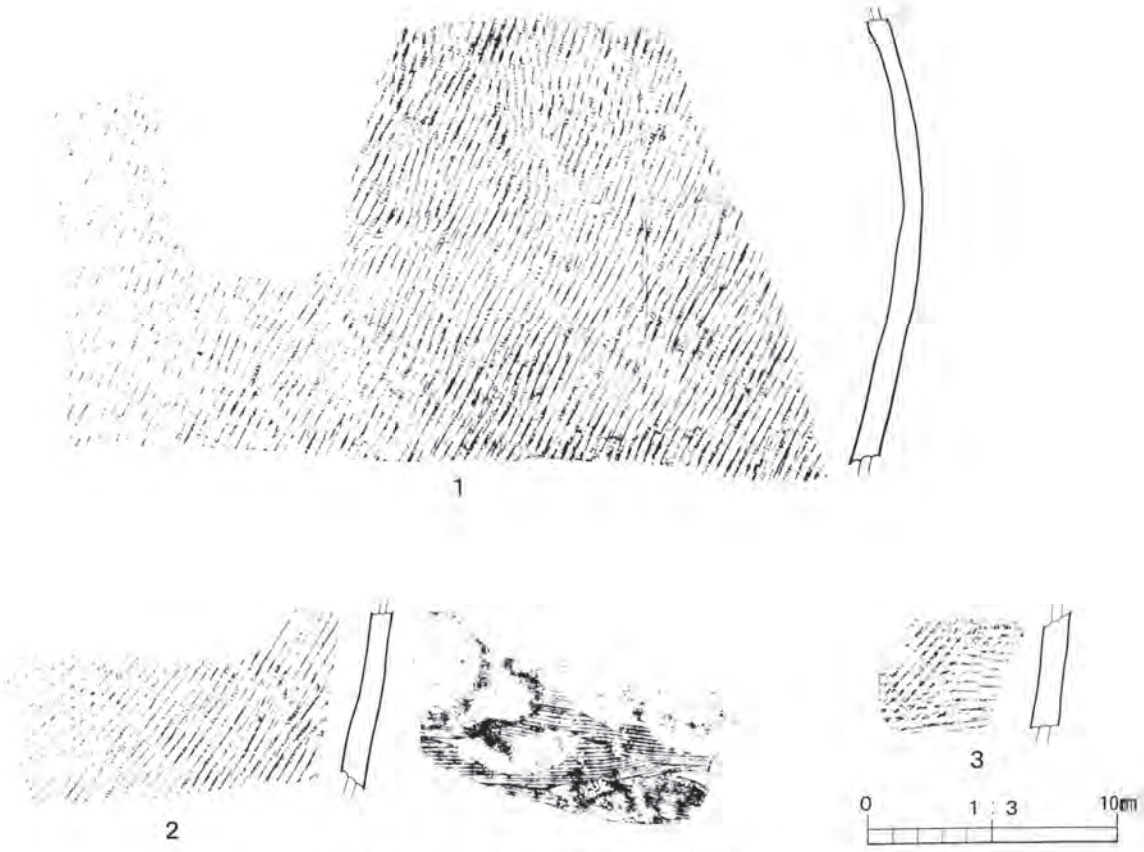
出土遺物のほとんどは、縄文時代の土器片が占めるが、カマド側の床面上からは、第48図１の様な須恵器の甕の体部片が出土している。固く焼きしまったくすべ色を呈し、外面にはたたき目、内面には所々に刷毛目痕が観察される。土師器片などの土器片は、ほとんど出土していないが、坏、甕の小破片が数点出土しているのみである。



第46図　第1001号竪穴住居跡



第47図　第1001号竪穴住居跡カマド跡

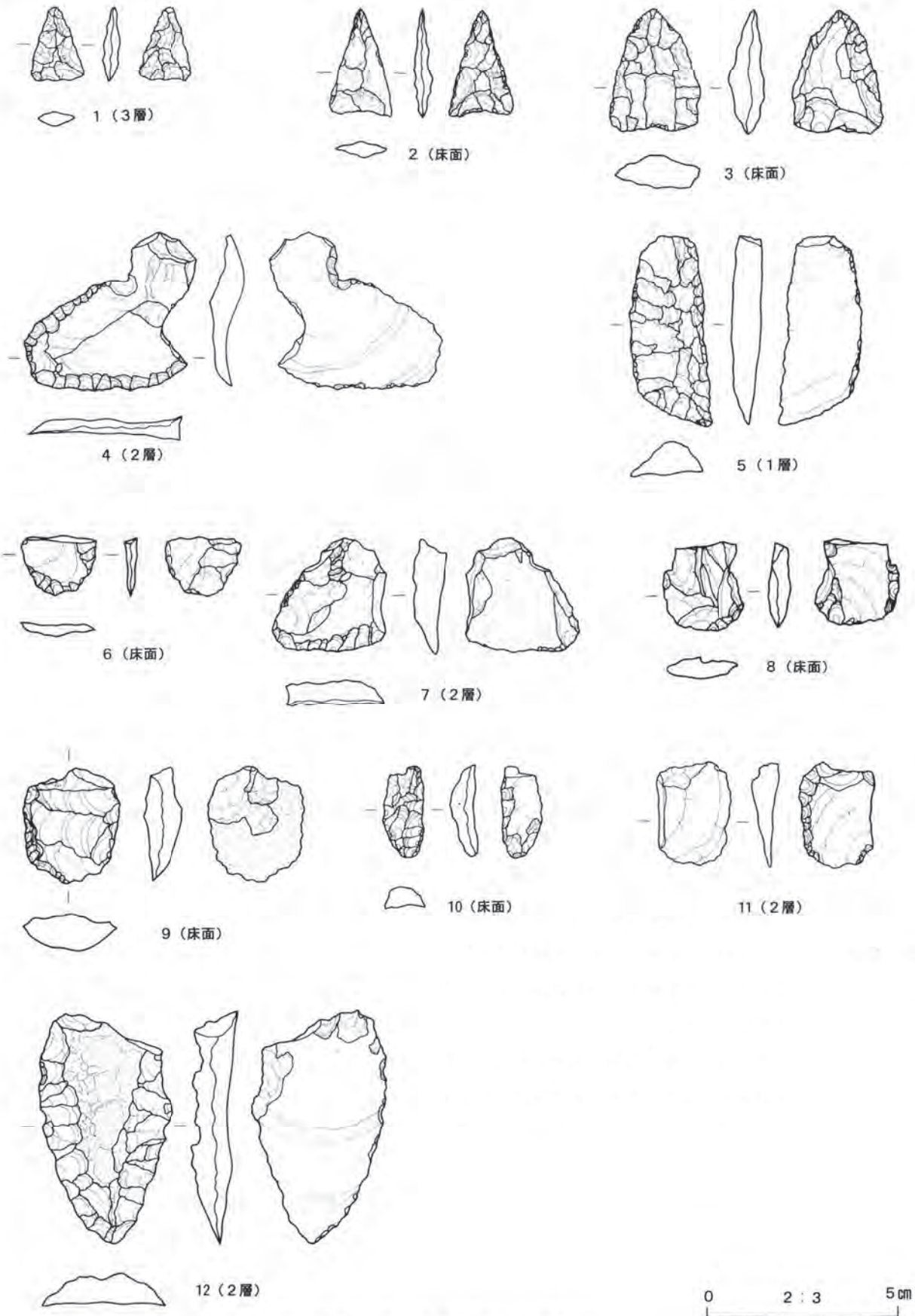


第48図　第1001号竪穴住居跡出土遺物(1)

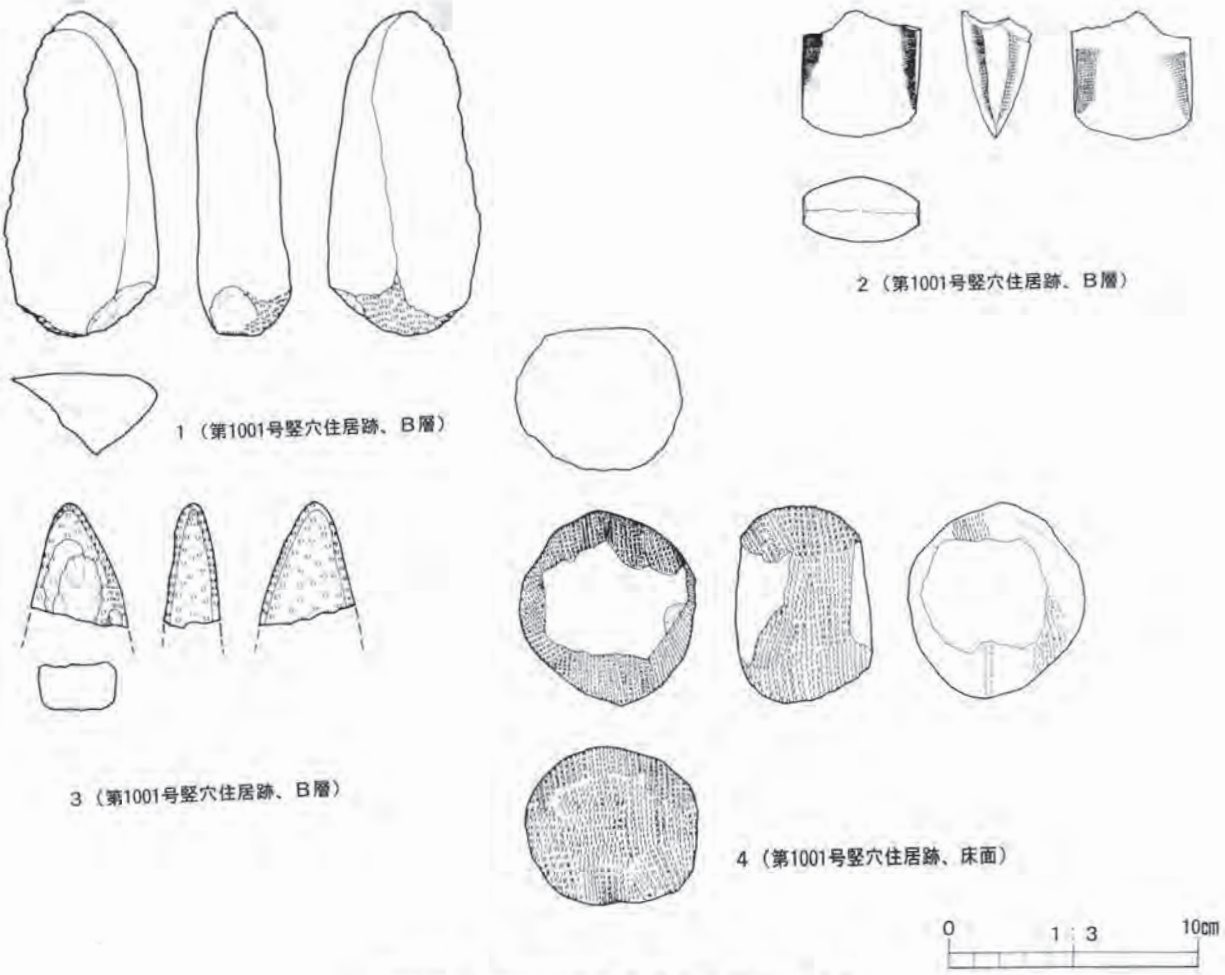
また、埋土から出土した土器片のほとんどは第49図～51図に掲載した縄文時代の遺物である。第49図１～５は、貝殻文を施文するもの。１～３は腹縁部を押し引き施文する。４．５は小型の貝殻を用いて施文する。６は、微隆起線文を施すもの。薄手で焼成の良好なものである。７～25は、胎土に繊維を含む。７は縄文－縄文土器。縄文は粗く太い。８～10は口縁部上端から縄文を施文するもの。８、９は補修孔が見られる。10は口唇部に回転縄文を施文する。11は横位の原体圧痕文が施されている。12は器厚が1.2㎝と厚いもの。13は、口縁上端に刻目を施し、渦巻状の原体圧痕文、横位、斜位の圧痕文、連続する刻突文・刻目文により文様を描くもの。14は、外面には横位の原体圧痕文を施し、内面には条痕を有すもの。15～23は、羽状縄文を施文するもの。15は、口縁部上端から羽状縄文を施文するもので口縁部が内削ぎする。16～19は太くて粗い原体を用いる。23は、所謂「ぴっちり縄文」と言われている原体による羽状縄文である。24は、横位の原体圧痕文を施文するもので口唇部に指頭圧痕を施す。25は、波状口縁を呈する口縁部片で沈線と圧体圧痕文を施す。28は、薄手の無文の土器。29～38は、隆沈線や沈線により文様を描くもの。31は、波状の隆線上に刺突を施すもの。33は、渦巻文を描くもの。39～44は、磨消しの伴うもの。39は、口縁部上半を無文にする。40は、無文部に沈線で文様を描く。41は、楕円形～長方形状の区画文を描くもの。42は、隆沈線で小渦巻文を施文するもの。43は、沈線と磨消しにより文様を描くもの。44は、縄文主体の土器。45は、口縁部の破片で、隆沈線により渦巻文を描くもの。

第50図１～12は、当竪穴住居跡埋土から出土した石器である。１～３は石鏃で、いずれも、平基の三角形状を呈すものである。２は、やや凹基気味となる。３は、比較的大型のもので、先端部にするどさを欠く。４は、石匙で横型を呈するもの。全体的にち密さを欠き、調整剥離にも粗さがみられる。５～12は、剥片を利用した削掻器と考えられる。

第49図　第1001号竪穴住居跡出土遺物(2)



第50図　第1001号竪穴住居跡出土遺物(3)



第51図　第1001号竪穴住居跡出土遺物(4)

第1002号竪穴住居跡（第52～55図）

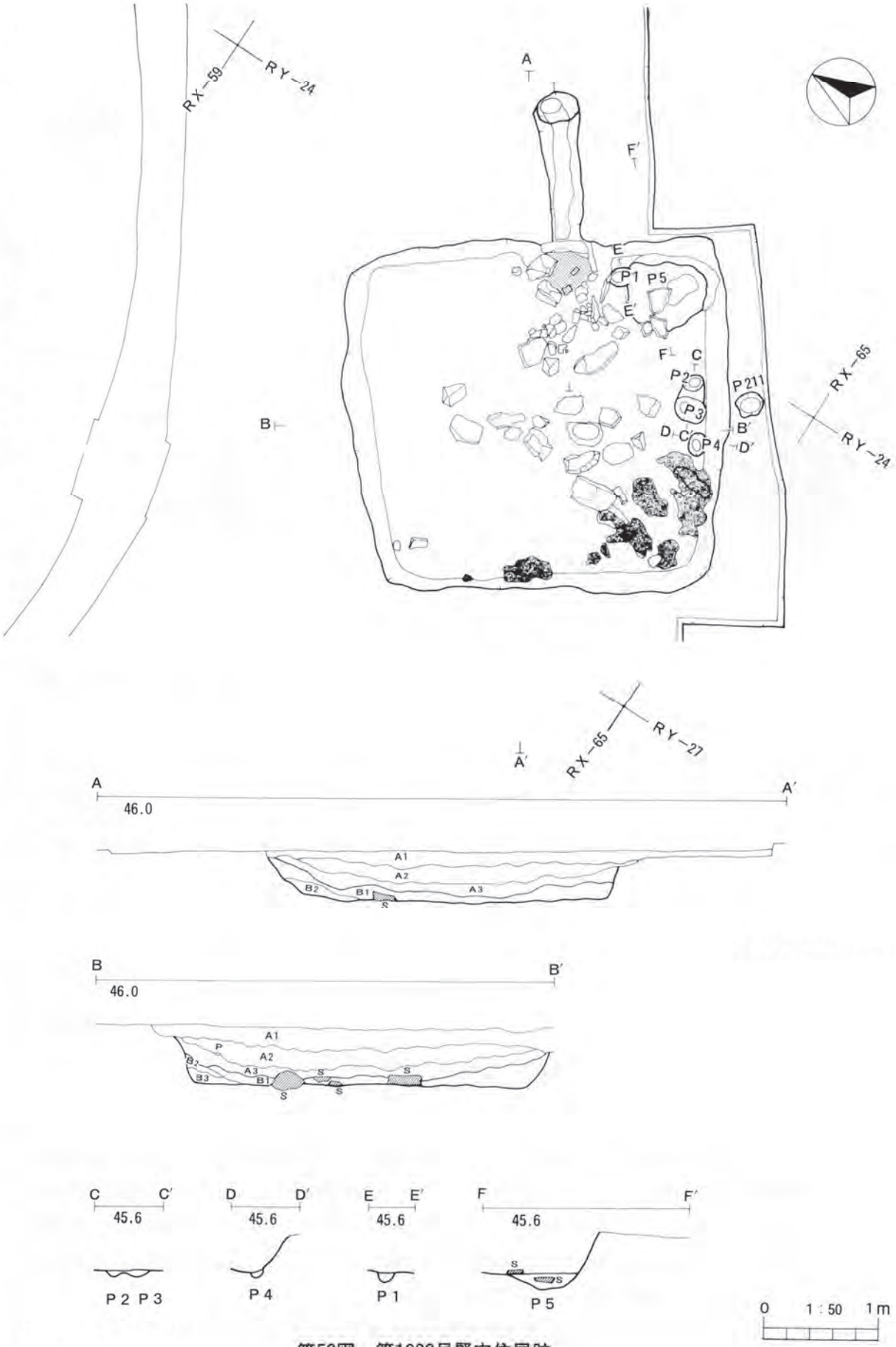
調査区の南壁際に第1001号竪穴住居跡と対峙する様に位置する。

平面形、規模

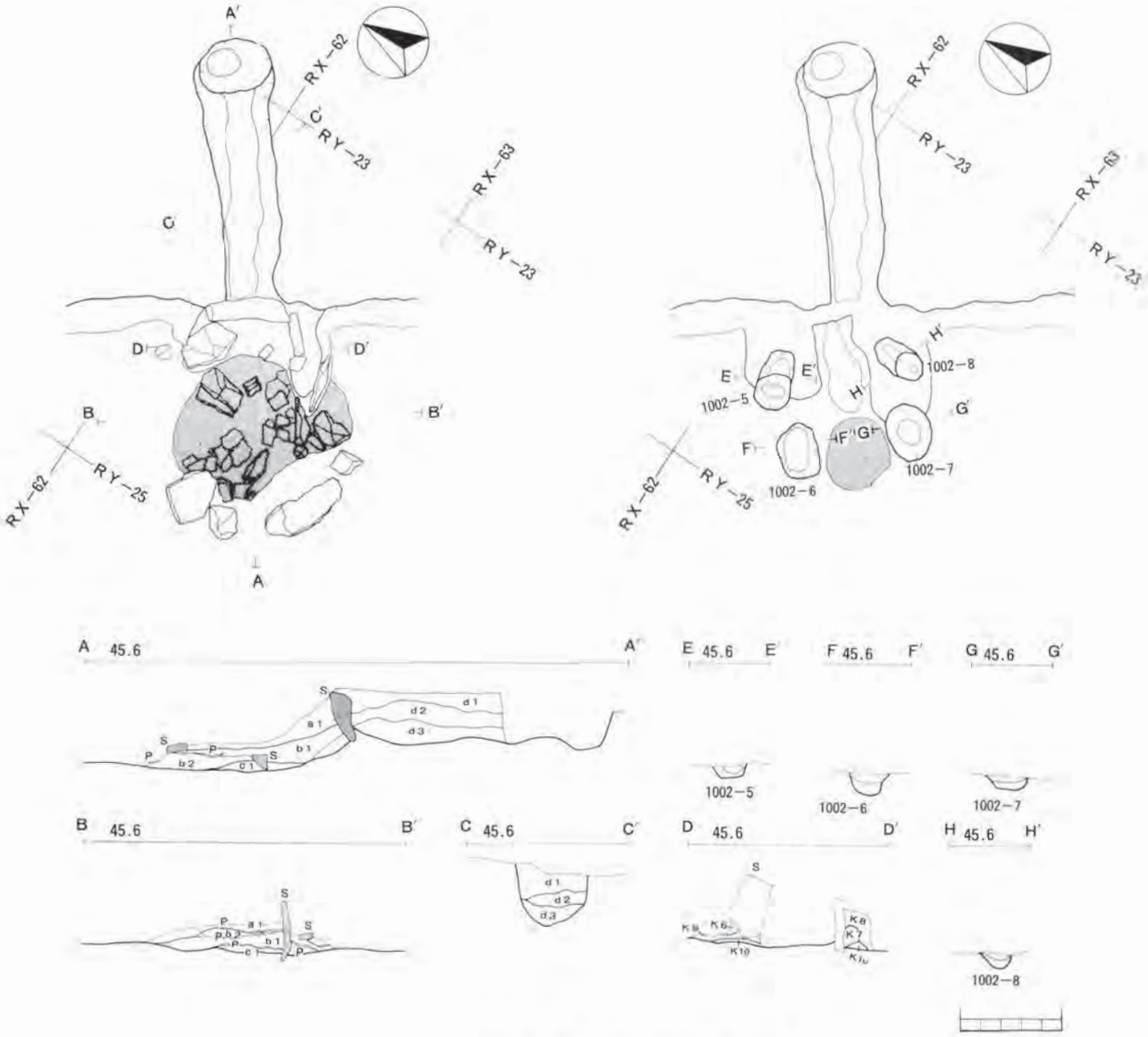
平面形は、長軸3.15m、短軸3.05mをはかるほぼ方形を呈する。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がり検出面からの深さは、0.55mをはかる。カマドは、東壁側の中央からやや南に寄った所に存在する。

埋土

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、やわらかくてあまりしまりのない黒褐色のシルト質土を基本土とする土層で真砂土粒子を多量に含む。A１～A３層に細分される。A１層は、竪穴上面を広く覆うもので真砂土粒が多く認められ全体的に白っぽい。A２層は、A層中最も明るい黒褐色を呈するが、炭化物粒・真砂土粒も含むがA１層よりは少なくなる。A３層は、やや暗い黒褐色を呈しにぶい黄褐色の砂っぽい土を塊状に混入する。B層は、やわらかくしまりの少ない黒色土を基本土とするものでB１～B３層及び自然遺物の包含層（ブロック）に細分される。B２層、B３層は、北～西壁際に堆積するもので黄褐色土を塊状に混入する。B１層は、床面全体を覆うもので多量の大～中礫が混入するが、これらの礫自体は完全に床面上には接していない。また、南西隅には自然遺物の包含層（ブロック）が認められたが、これらは、



第52図　第1002号竪穴住居跡



第53図　第1002号竪穴住居跡カマド

床直上に散乱する礫群よりも層位的には古く（礫の下まで自然遺物が広がる）、更に、この自然遺物層自体も床面にべったりと接するものではない（第56図参照）。つまり、土層断面観察用に設定した土層ベルトの観察結果に基づいて命名したＢ３層は、少なくとも礫を含む層、自然遺物層、そして床面上の層と３つの時間差が存在することになり、更に細分可能であったということになるが、層相観察時には明確に把握できなかった。

床面　　床面は、ほぼ平坦面で地山の花崗岩面を掘り込んだ固い面をそのまま利用している。

カマドは、大礫（主に石英粗面岩〈流紋岩〉）を使用して構築されたものである。カマド袖は扁平な礫を立て並べ更に、まわりを黄褐色の粘質土でかためている。本来は、天井部にも礫を横かけていたものと考えられるが、現状では煙道部入口にのみ残っていた。燃焼部は、幾分掘りくぼめられておりカマド袖支脚礫の最前列のものからやや住居内寄りに形成されている。比較的良く焼けており焼土の浸透層が認められた。煙道部は、住居外に東方向に約1.3m程のびており、煙出し部は0.35m×0.25mの楕円形状を呈する。煙道部底面は、U字形を呈し煙出し部までは多少凸凹するが、あまり傾斜せずに続く。また、カマドの東脇には0.7×0.6m規模をはかる不整楕円形状の浅い皿状のピット（P5）が存在する。

カマド

煙道部

カマドの崩壊土は、b層で多量の焼土や炭化物粒が含まれる。第54図1の土師器甕等の土器片が多く混入する。b層とc層の層理面が燃焼面である。煙道部の埋土は、やわらかくしまりのない黒色土を基本土とするd層でd1～d3層に細分される。d3層に多くの焼土・炭化物が認められる。また、カマドの焼土（b層）をサンプリングし水洗撰別したところ、焼けた魚骨の棘や貝殻の極小片が少量ながら検出している。

崩壊土

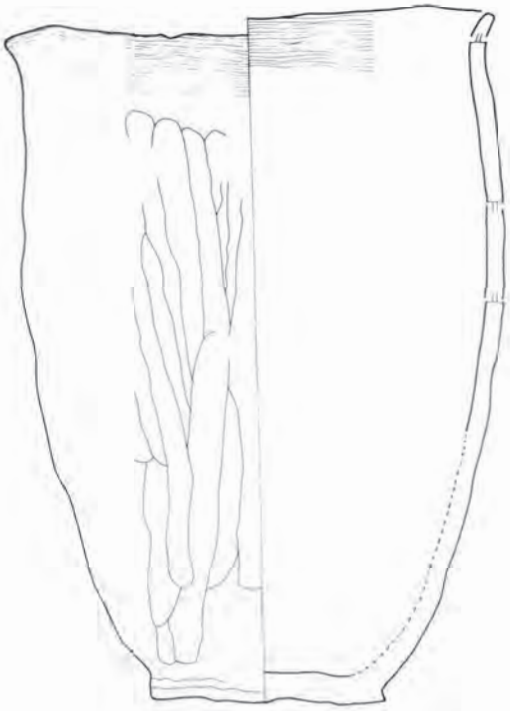
柱穴は、床面の各コーナーに直径0.2m前後の床面からの深さ0.1mをはかる小ピットを検出したが現場での作業ミスにより平面図の作成をしていなかった。P1～P4は、いずれも浅い小ピットである。

柱穴

遺物は、埋土～床面にかけて出土しているが量的には縄文時代の遺物が多い。土師器などの平安時代の遺物は、カマド周辺部、床面上から主に出土している。

第54図は、平安時代の遺物である。1は、カマド崩壊土から出土した土師器甕で口径19.5cm底径9.2cm、体部の最大径19.0cm、器高27.5cmをはかるものである。口縁部が短かく外反し底部に向って体部がすぼむ器形となる。ロクロ成形後に口縁部外面は横ナデ調整、体部から底部にかけては粗いヘラナデ調整を施している。内面の調整は、磨滅が著しくて不明である。2、3は、内面黒色処理を施した坏の口縁部を欠くもの。2は底径7cm、3は6cmをはかるものでどちらもロクロ成形で底面には、磨滅が著しいが糸切り痕が認められる。4、5は甕の体部下半から底部にかけてのもので、4は、外面にはヘラナデ調整、内面には粗いヘラナデ？調整が施されるもの。5は、外面にはヘラナデ調整、内面には刷毛目調整が施されるものである。6、7は、カマド崩壊土から出土したもので、外面の輪積み痕が顕著なものである。器厚0.7cmと薄いものだが焼成は比較的良好である。内面には一部刷毛目痕が観察される。6、7は同一個体片で製塩土器と考えられる。8は、穂摘み具様鉄製品とか穂切り具等と呼称されているものである。両端が半円状の長方形を呈し、薄手で両端部に目釘穴状の穿孔が認められる全長8cmをはかるものである。一方の端部の目釘穴には折れ曲がった目釘？が残っている。この鉄製品は、竪穴の床面上から出土したものである。

平安時代の遺物



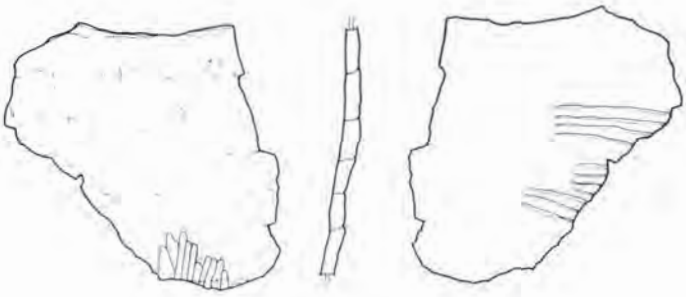
1（第1002号竪穴住居跡）

2（第1002号竪穴住居跡、カマド）

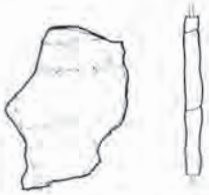
3（第1002号竪穴住居跡、カマド）

4（第1002号竪穴住居跡、下層）

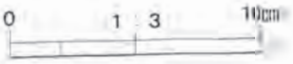
5（第1002号竪穴住居跡、カマド）



6（第1002号竪穴住居跡）

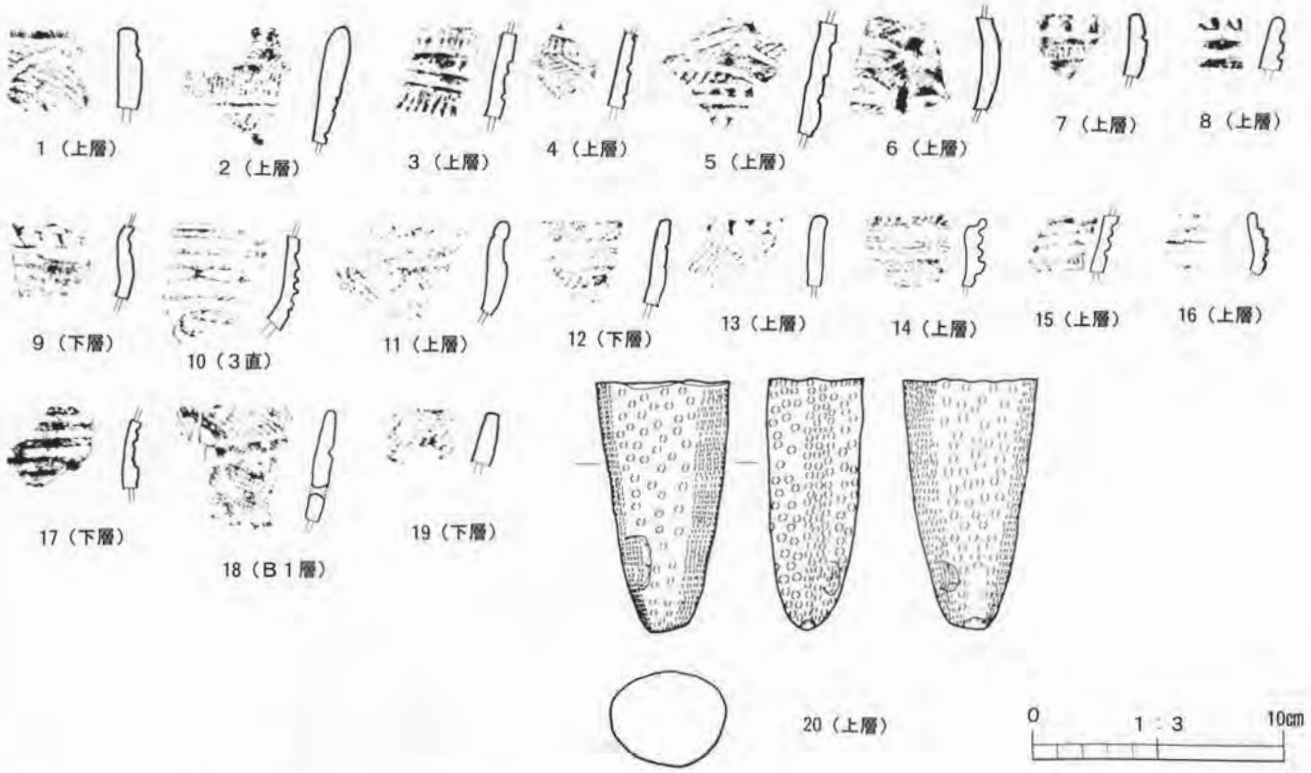


7（第1002号竪穴住居跡）



第54図　第1002号竪穴住居跡出土遺物(1)

第55図は、第1002号竪穴住居跡埋土中より出土した縄文～弥生時代にかけての遺物である。



第55図　第1002号竪穴住居跡出土遺物(2)

自然遺物ブロック（第56図）

第1002号竪穴住居跡埋没過程において形成されたもので、時期的には第1002号竪穴住居跡廃絶直後と考えられる。自然遺物ブロックは、大小含めて10のブロックに分けられる。出土した動物遺存体は、イガイを中心とする貝殻が主体を占めるが、土砂の水洗撰別によりアイナメ等の魚骨なども僅かながら含まれていることが判明した。以下、種の同定できたものの種名を記す。なお、種名同定に関しては陸前高田市立博物館の佐藤正彦氏及び同市在住の熊谷賢氏の多大なるご指導・ご助言を頂いた。

I　軟体動物門　Phylum　MOLLUSCA

(1)　腹足綱　Gastrpo

1.　エゾアワビ　Haliotis　discus　hannai　Ino

2.　レイシガイ　Reishia　bronni

3. チヂミボラ Nucella heyseana

4. ヒレガイ

5. リクサンマイマイ

(2) 二枚貝綱 Bivalvia

1. アカザラガイ

2. イガイ Mytilus corsucus Govld

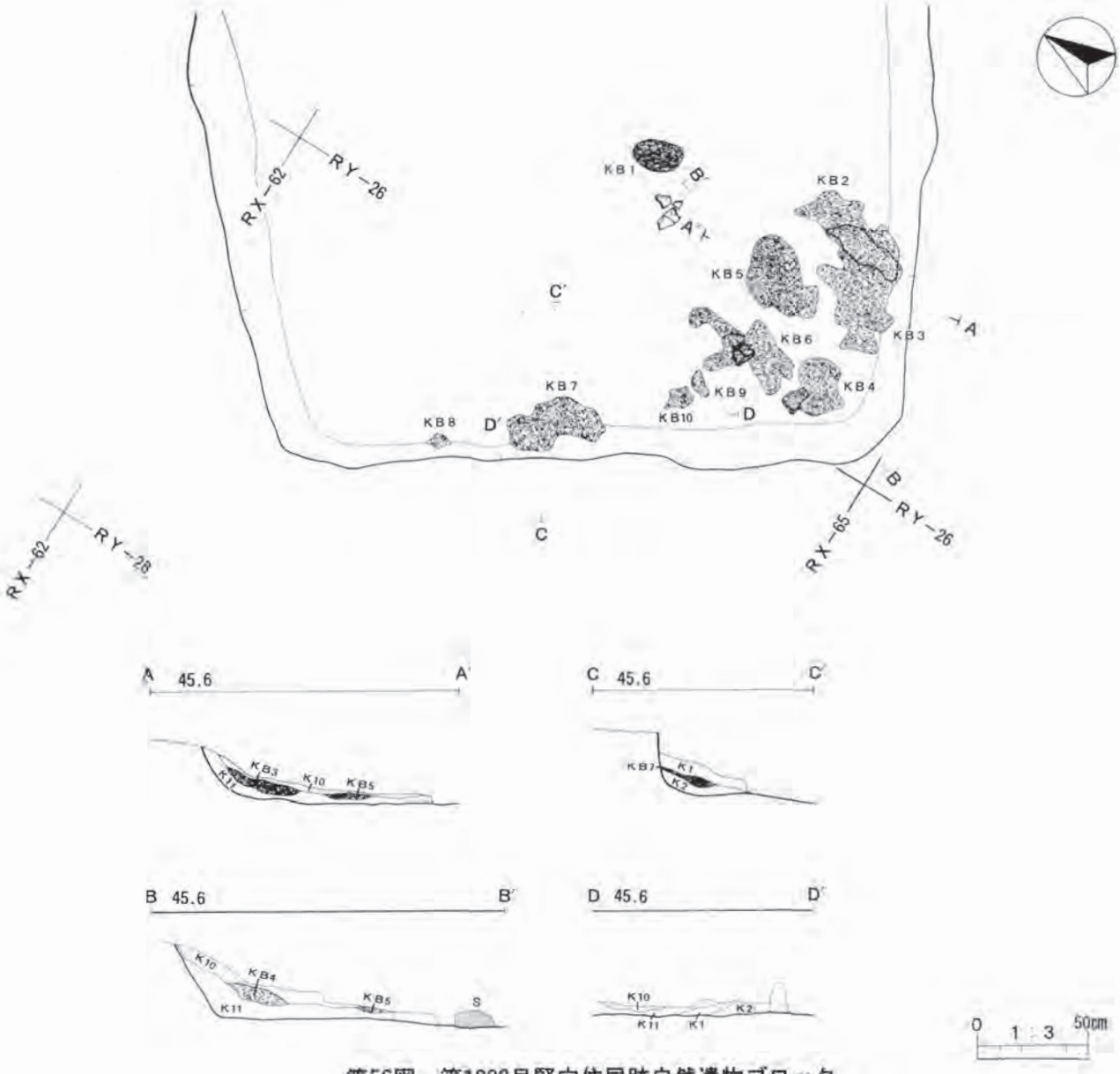
3. エゾイガイ Grenomytilus grayanus

4. ムラサキインコガイ Septifer virgatus

5. アサリ Ruditapes philippinatum

II 節足動物門 Phylum ARTHOPODA

(1) 蔓脚亜綱 Ciripedia



第56図 第1002号竪穴住居跡自然遺物ブロック

1. アカフジツボ Balauus tintinnabulum rosa PILSBRY

2. チシマフジツボ B. cariosus (PALLAS)

Ⅲ 棘皮動物門 ECHINOERMATA

(1) 海胆綱 ECHINOIDEA

1. バフンウニ Hemicentrotus pulcherrimus (A.AGASSIZ)

2. キタムラサキウニ Strongylocentrotus nudus (A.AGASSIZ)

Ⅳ 脊椎動物門 VERTEBRATA

(1) 硬骨魚綱 CHONDRICHTHYES

1. マイワシ Sardinops melanosticta (TEMMINCK et SCHLEGEL)

2. タイ類

3. カサゴ科 Scorpaenidae gen. et sp. indet.

4. アイナメ Hexagrammos ofakii JORDAN et STARKS

(2) 哺乳綱 MAMMALIA

1. 齧歯目

(a) 貝類(腹足綱、二枚貝綱)

貝類

貝ブロックを構成する基本的な貝類はイガイである。出土貝数のほとんどを占める。ブロック毎に見ればKB－2、3が圧倒的に多いが破砕～粉砕されたものが多い。逆に個数的には少ないKB－4、6、7は、破砕されずに形を残した大形のものが主体を占める。KB－7では推定最大長16cmをはかる大形のものも含まれていた。ムラサキインコガイは、KB－2、3で比較的まとまって出土している以外は、ほとんど出土していない。腹足綱のチヂミボラ、レイシガイ等もKB－2、3に多い。以上の貝類は、岩礁性のものだが砂泥性のアサリ、アカザラガイも少量ながら出土している。

(b) 節足動物、棘皮動物

フジツボの2種は、各ブロックから少量ながら出土しているが、ウニはKB2～6に多い。ウニの口顎骨は、KB－2、3、5から数個出土している。

(c) 魚類

魚骨

魚骨の出土量は少ない。アイナメ、カサゴ科は、沿岸部に生息する地魚で現在でも湾内で釣れるものである。出土量自体が少ないため詳細は不詳である。

(d) 齧歯目

牙及び歯が数点出土しているが、後世のまぎれ込みの可能性もある。

以上であるが、イガイを中心とした貝ブロックであったが、イガイのブロックが破砕されたもの、形を残すものと2通りに分けられる。

	アワビ	レイヒガイ	チヂミボウ	ヒレガイ	リクサンマイマイ	アカザラガイ	イガイ R	イガイ L	エゾイガイ R	エゾイガイ L	インコガイ R	インコガイ L	アサリ R	アサリ L	フジツボアカ	フジツボ	ウニ 口顎骨	ウニ 棘	ウニ 殻	マイワシ(椎)	タイ類(歯)	カサゴ科の一種 鋤骨	カサゴ科の一種 耳石	カサゴ科の一種 舷骨	カサゴ科の一種 主鰓	アイナメ 方骨	アイナメ 後側頭骨	アイナメ 腹椎	アイナメ 尾椎	不明椎骨	齧歯目
KB－1							+	+	1	3		1			+	+															
KB－2	(+) 3	11	6			1	63	52			5	6	1	2	+	+	+	+	+							1 (R)		1			
KB－3	(+) 1		6				52	46			2	1			+	+	+	+	+	3									1	3	1
KB－4			1				15	9					2	0	+	+		+				1	1 (L)	1 (R)				3			
KB－5		11					8	9	5	6					+	+	+	+	+										5		
KB－6			1				10	7							+	+		+			1				1 (R)						2
KB－7							14	11							+	+		+			1										
KB－8							1	1							+	+															
KB－9							+	+							+	+															
KB－10	1			1			2	3				1	1	2	+	+		+													

自然遺物ブロック毎の出土数

第1001号土坑跡（第57図）

第1001号竪穴住居跡の東南部に位置する。第1001号竪穴住居跡の貼り床下に検出した。

平面形は、楕円形を呈するもので1.05×0.7ｍ規模をはかる。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり検出面からの深さは、0.6ｍをはかる。 **平面形、規模**

埋土は、Ａ層、Ｂ層に大別される。Ａ層は、比較的固くしまった黒色のシルト質土を基本土とするものでＡ１、Ａ２層に細分される。Ａ１層には、褐色のやや砂っぽい土を塊状に混入する。Ａ２層には、明るい黄褐色の粘性を有す土が多量に小塊状に混入する。Ａ１層よりは固くしまる。Ｂ層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本土とするものでＢ１、Ｂ２層に細分される。Ｂ１層は、灰褐色～黄橙色の真砂土塊や黒色土塊を多く混入する。やわらかくしまってない。Ｂ２層は、暗褐色に近かい色でかなり砂質が強くなる。やわらかく全くしまりがない。 **埋土**

底面は、ほぼ平坦面で地山面そのままである。 **底面**

遺物は、土師器の甕の破片や縄文時代の土器片等が出土しているが小破片主体で出土量も少ない。

第1002号土坑跡（第57図）

第1001号土坑跡の南東部に位置する。北側の一部を第1001号竪穴住居跡に切られる。

推定で0.8×0.6ｍ規模の楕円形を呈する浅い皿状のピットである。埋土は、やや明るい黒褐色のシルト質土を基本土とするもので、比較的固くしまっている。焼土の小塊が少量ながら含まれる。

遺物は、埋土中から極小片が数点出土しているだけである。

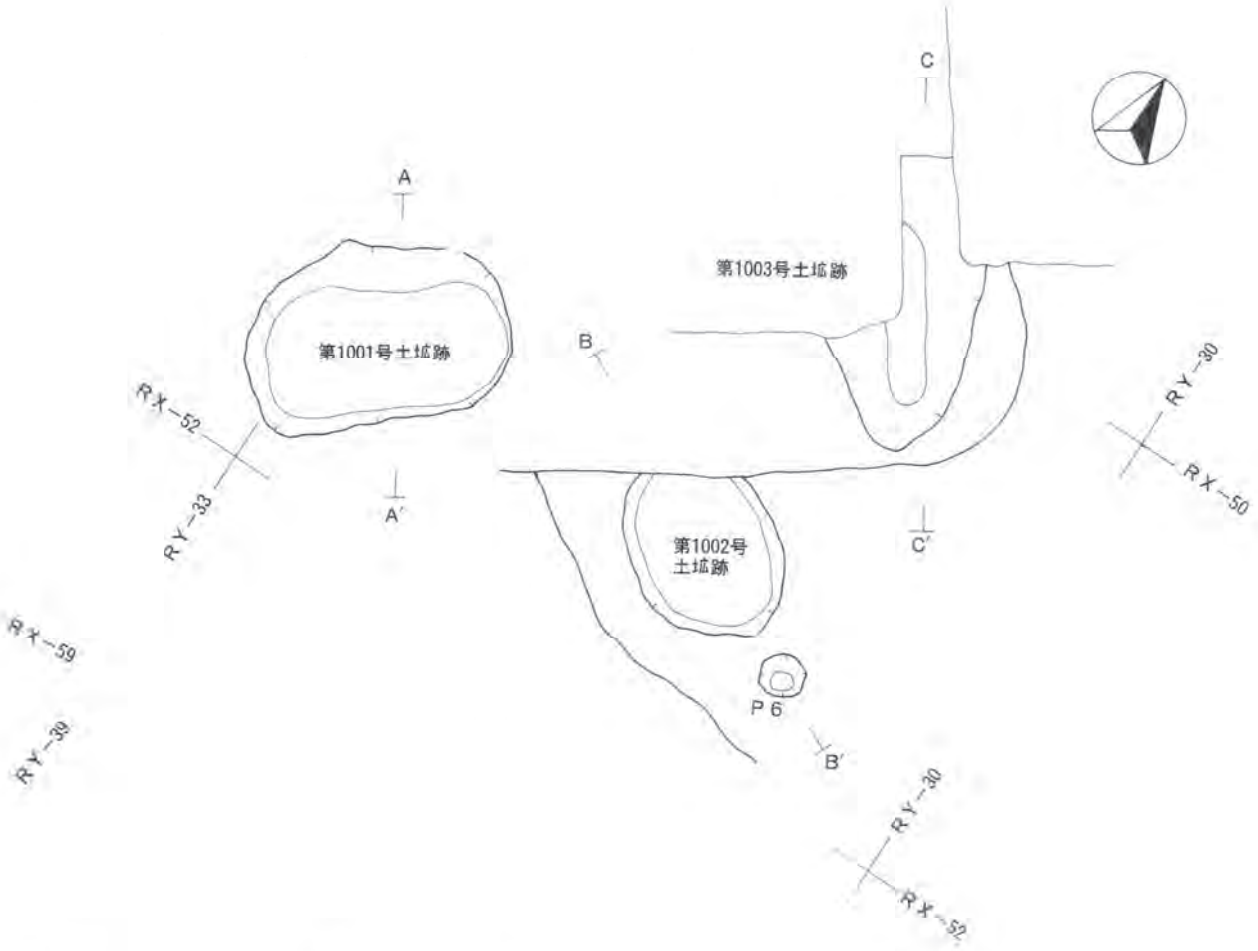
第1003号土坑跡（第57図）

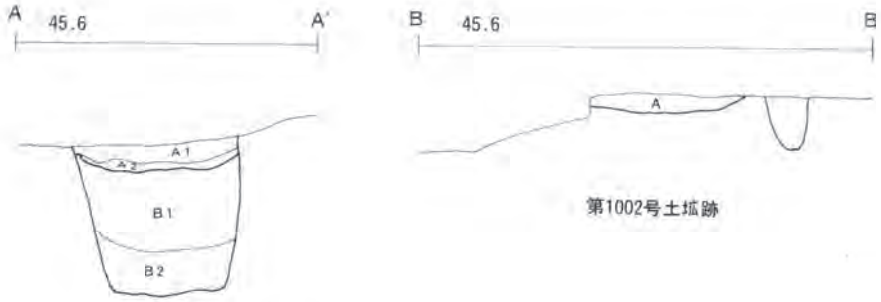
第1001号竪穴住居跡南東隅に存在するカマド跡の下に検出した。大半部分が攪乱により破壊されており、僅かに東壁～南壁にかけての一部分しか残っていない。

平面形、規模等は不明である。僅かに残った壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がっており、検出面からの深さは、0.4ｍをはかる。

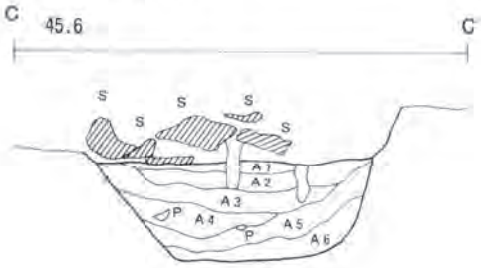
埋土は、黒色のシルト質からやや砂っぽい土を基本土とするものでＡ1～Ａ6層に細分される。比較的固くしまっている。Ａ2層、Ａ4層は、真砂土を多量に含むほとんど砂質の土層である。底面を覆うＡ６層は、黒褐色の砂っぽい土で褐色のやや粘性のある土を小塊状に比較的多く混入する。 **埋土**

遺物は、極小片が数点出土しているだけでほとんど出土していない。





第1001号土坑跡



第1003号土坑跡

第57図　第1001号〜1003号土坑跡

0　1：30　1m

C　遺構外出土遺物

今回の調査区は、既述の通り削平、盛土、攪乱が著しく表土及び遺構外からの出土遺物は、かなりの部分が後世の人たちにより動かされている。そのため、ここでは、比較的攪乱の影響が少なく、なおかつ、時期的にもある程度のまとまりを持ち、県内においても類似資料が少ないという意味も含め、第1001号竪穴住居跡貼り床下の遺物包含層から出土した土器について記述する。その他の表土及び盛土層等から出土した遺物（ほとんどが小破片で縄文時代中期～後期にかけてのものが主体）については、礫石器等の一部を除き後日何らかの機会に記すこととする。

(1)　**土器**（第58図～第60図）

貝殻文

第58図１～36は、貝殻文を施文する土器。１～４は、隆帯に絡条体圧痕を施文し体部には貝殻文を施文するもの。１と２は、口縁部片で口縁部上端に絡条体圧痕を施した隆帯を巡らし、その下には波状の沈線文を施す。１の口唇部には刺突文、２の口唇部には圧痕文を施す。３と４は、太い隆帯をＴ字状に貼り付け、その上に絡条体圧痕を施文している。貝殻文は、１－４すべて貝殻腹縁部を押し引いて施文したものである。１、２と３、４では、貝殻の大きさが異なる。５は、撚糸圧痕文と貝殻腹縁圧痕文を施すもの。口縁部上端の内面には、貝殻腹縁を押しつけた刻目を施す。６～21は、貝殻の押し引き文や圧痕文を施文するもの。６、21は、沈線間に貝殻文を充填し幾何学的な複雑な文様を描くものか。21には、細かい刺突列が伴っている。22～33は、極めて小さな貝殻、もしくは貝殻の小破片を用いて施文したと考えられる貝殻文を斜位もしくは交叉する様に施文するもの。各施文単位は細かい単位で空白部も見られる。33は、乳房状の尖底部で円心円状に３重の沈線を巡らし、沈線間には浅く細い線状の斜位の刻目を施す。体部下半には、細かい刺突列を巡らしその刺突列上部に22～32の様な細かい貝殻文を施文する。

35は、フレーク片の様な薄く鋭利なもので沈線文を施すもの。

微隆起線文

36～64は、微隆起線文を施文する土器で非常に薄手で胎土・焼成の良好なものである。37～43は、２～５㎜間隔に平行もしくは幾分斜位に微隆起線を施文する。44～48は、間隔も広く縦、横、斜めの格子目状に施文するもので何らかの文様を構成する様である。49～64は、無文あるいは条痕状の調整痕をそのまま残すものであり、胎土、焼成等が微隆起線文を伴う土器と類似する。

縄文―縄文土器

第59図65～86は、胎土に繊維の混入する縄文－縄文土器である。いずれも厚手で胎土、焼成は良好とは言えない。65～67は口縁部の破片。65は、口縁部と体部を隆起線で区切り、口縁部には横位の撚糸圧痕文、体部には縄文を施文するもの。口唇部には指頭圧痕文を施す。66は、口縁部が短かく僅かに外反するもので、65同様口縁部に粗い撚糸圧痕文を施文する。口唇部には撚糸圧痕文を施す。67は、口唇部を平坦に整形し口縁部上端がひさし状に突き出るもの。口唇部には磨滅が著しく不鮮明ながら撚糸圧痕文を施文している。66、67の繊維の含有量は多い。68～86は、体部の破片で繊維の含有量も比較的多く脆弱なものが多い。施文される縄文も太く粗いものである。87～90は、縄文－条痕の土器。88は口縁部の破片で口唇部を平坦に整形し、刺突文を施文する。縄文の原体や胎土・焼成等は、縄文－縄文土器に類似する。

91は、断面が三角形状を呈す隆線を施文するものである。内外面とも条痕の調整痕をそのまま残すもので、第58図36～64の土器に類似する。

繊維混入

第60図92～96は、口縁部上端から縄文を施文する縄文主体の土器でいずれも胎土に繊維が混入する。92～94の口唇部には、指頭圧痕文を施す。

97～106 は、原体圧痕文を施文するもの。97は、口唇部を平坦に強く整形しており口縁部上端外面がひさし状に突き出る。口唇部には、指頭圧痕文を施す。口縁部には、横位に原体圧痕文を強く施している。100 は、口縁部が短かく外反するもので口縁部上端に２条の横位原体圧痕文を施文する。101 の口唇部には刺突文が施される。104は、横位の原体圧痕文間に円形の刺突文を施している。

羽状縄文

107～112は、羽状縄文を施文するもの。107、108は、比較的節径の大きいＬＲ、ＲＬの原体を交互に施文し整然とした羽状縄文を施文するもの。111、112は、結束部を有す羽状縄文を施文するもので短かい原体を用いる。羽状縄文は、重なり合う様に施文されている。

113～115は、縄文主体の土器。

条痕文

116～121は、条痕文を施すもの。薄手で焼成も良く第58図の微隆起線文土器に類似する。

122の拓本は、内面のものである。外面は剥落し不明である。内面口縁部上端には、貝殻腹縁部を押し付けた刻目が施されている。

129、130は、ミニチュア土器と思われるもの。132、133は、底部の破片。

⑵ 石器（第61図、第62図）

第1001号竪穴住居跡貼り床下遺物包含層以外から出土したものも含めている。

① 剥片石器（第61図）

今回の調査では、剥片石器の出土量は極めて少ないが剥片自体の出土も少なかった。第61図の６以下は、表土及び遺構外から出土したものである。

石鏃

１、７～９は、石鏃で１は凹基、７、９は凸基、８は平基となるもの。９は全長2.7cmと比較的大型である。２～６、16は、楕円形ないしは三角形を呈する削掻器の類。２、３、16は薄手のもので縁辺部に細かい剥離を加える。10～13は、石匙で横型と縦型のものに分けられる。14、15は、先端の刃部を欠く石錐でつまみ部を残すだけのもの。

石匙

② 礫石器

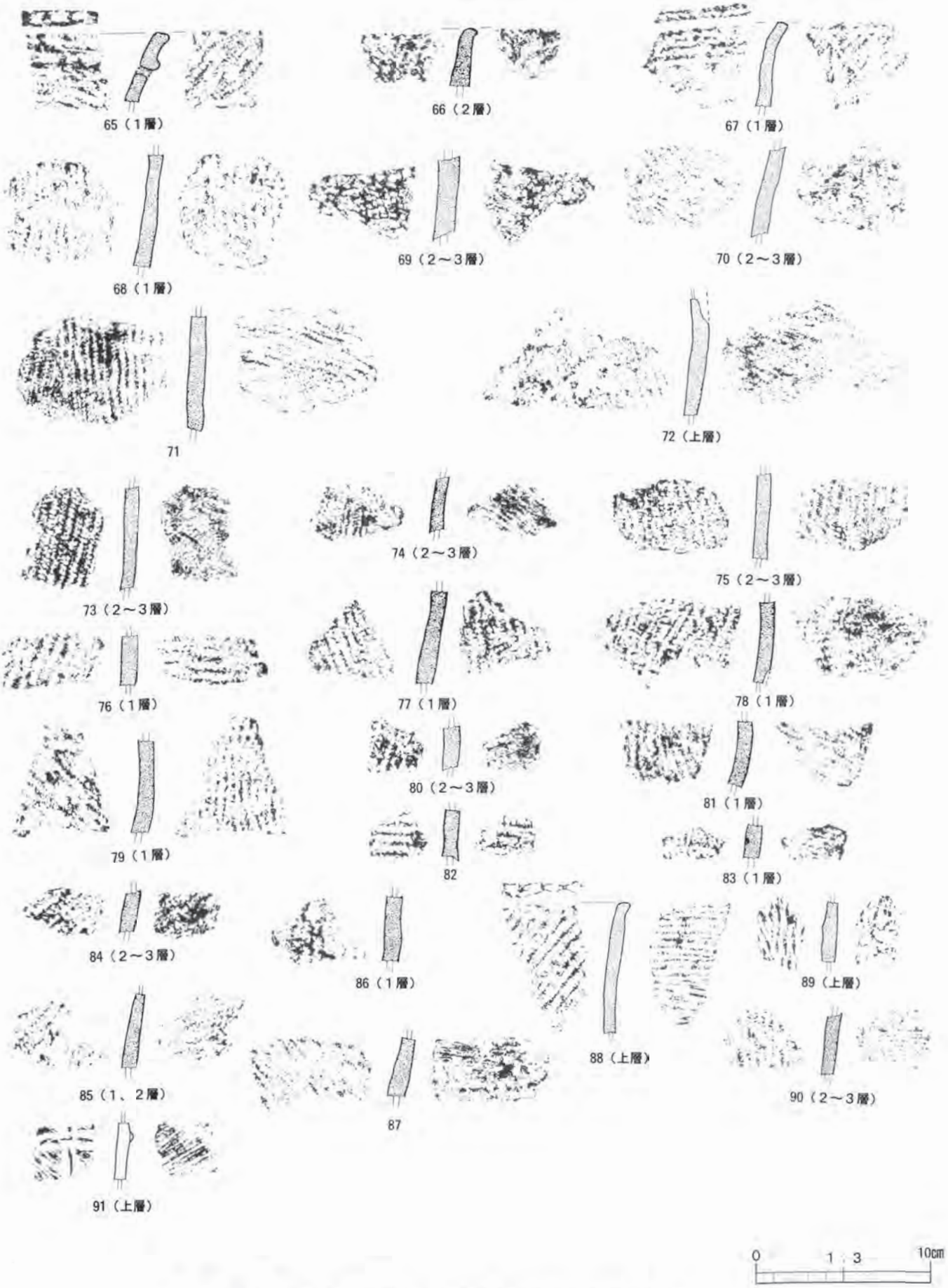
打製石斧

磨製石斧

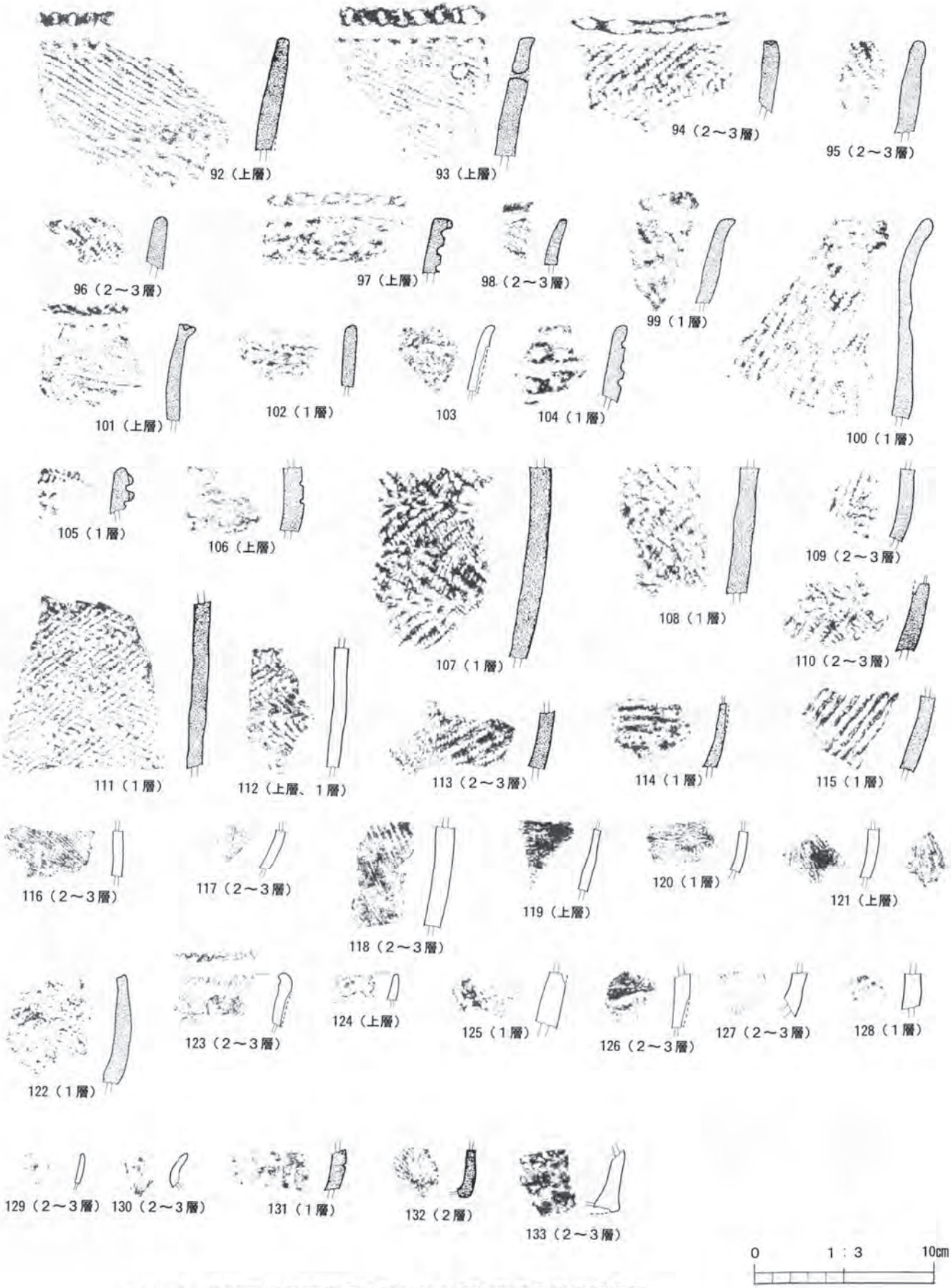
１～４以外は、表土及び遺構外から出土したものである。１は、撥形を呈する打製石斧で両側縁から剥離を施すもの。上端部と下端部に自然面を残す。２、９～14は、磨製石斧。９は全長4.5cmと小型のもの。11は、刃部に使用によるものと考えられる剥離が認められる。形態的には、基部幅がやや広く長方形状を呈すもの（２、13、14）と三角形を呈するもの（９～12）に分けられる。13、14には、整形のための敲打痕が認められる。それ以外のものは、研磨仕上げ時の擦痕が観察される。３、４、６は、敲打磨石類。７、８は、背面に大きく自然面を残す打製の石斧。５は、面取りした様な滑らかな面をもつもの。沈線上の凹みが認められる。

敲打磨石類

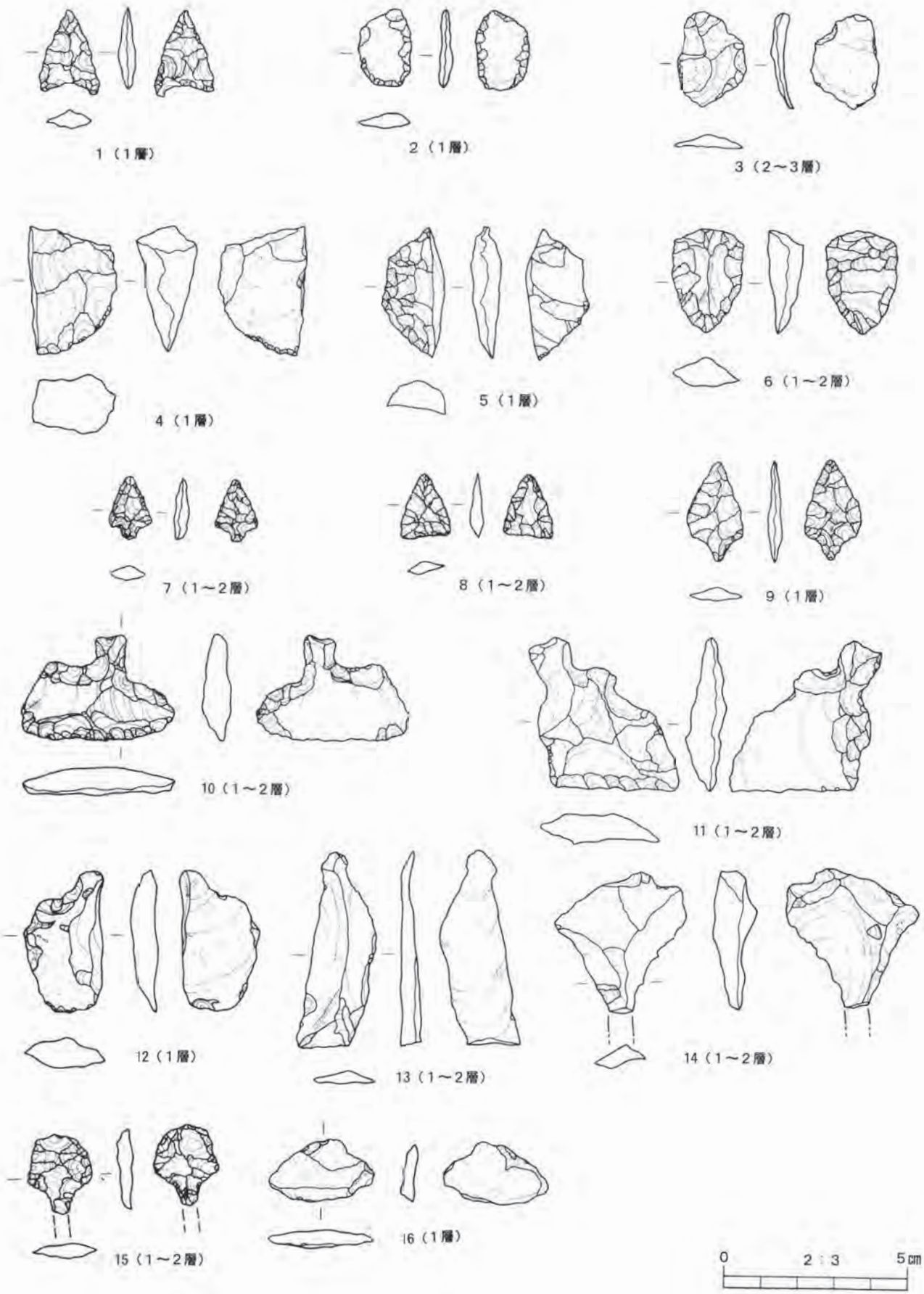
第58図　第1001号竪穴住居跡貼り床下遺物包含層出土遺物(1)



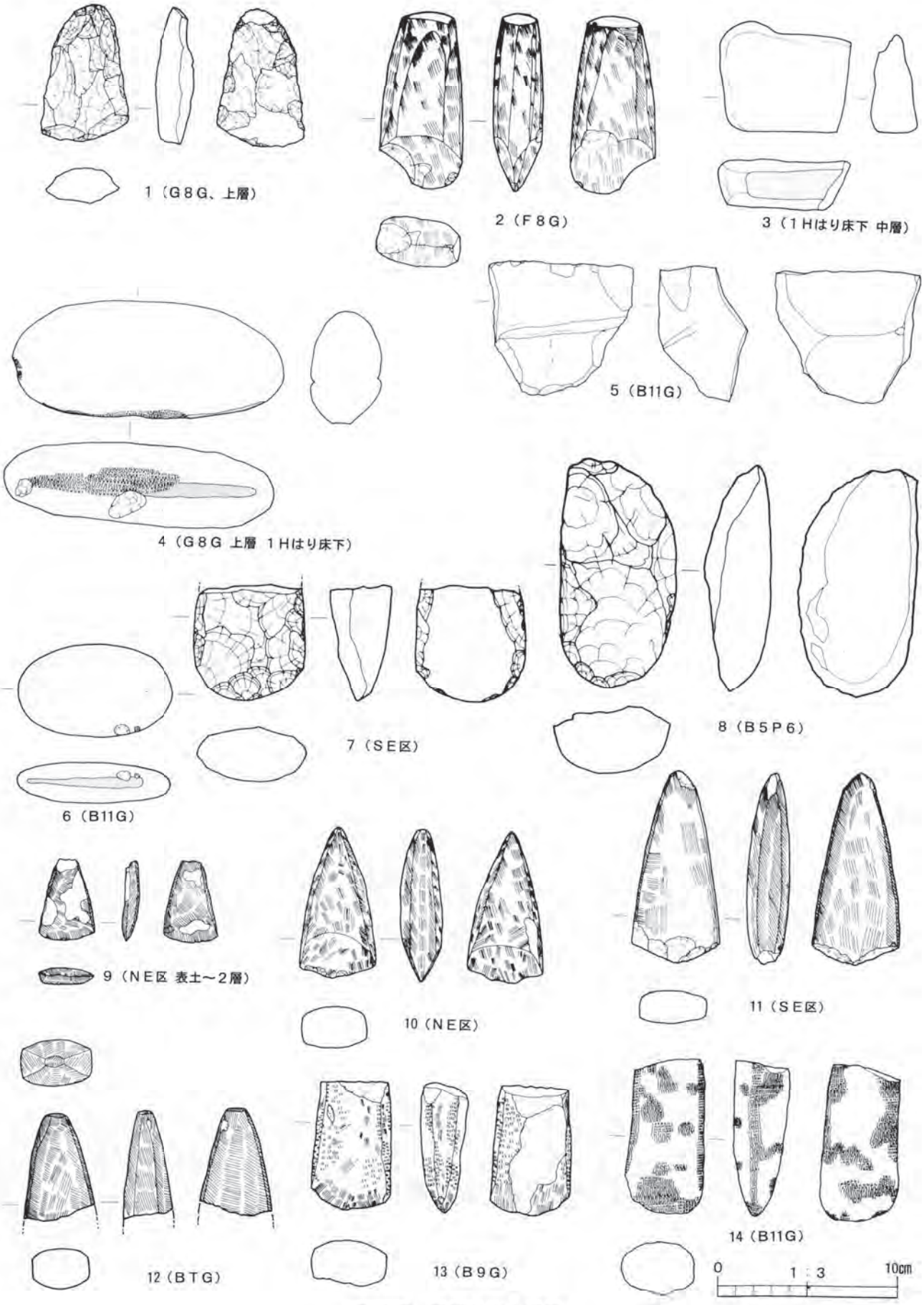
第59図　第1001号竪穴住居跡貼り床下遺物包含層出土遺物(2)



第60図　第1001号竪穴住居跡貼り床下遺物包含層出土遺物(3)



第61図　第1001号竪穴住居跡貼り床下遺物包含層出土遺物(4)



第62図　遺構外出土石器

Ⅳ　調査のまとめ

今回の調査では、縄文時代と平安時代の遺構と縄文時代早期から平安時代に至るまでの遺物を出土したが、今回の調査対象区は遺跡全体の中でも中世における城館構築による整地事業や現代における造成工事、建築物設置工事等などの攪乱が著しいものである。

以下、若干の考察も混じえもとめてみる。

1.　縄文時代の遺構について

検出された遺構は、本文中に記した様に竪穴７棟、石囲い炉跡２基、土坑跡22基であるが、竪穴については全容を知り得るものが少なく、また、炉跡も本来は竪穴住居跡に伴うものであろうと推測されるものだが、削平により上部を消失しており全容は把握できない。ここでは、比較的残存状況が良く検出数も多い土坑跡を中心に記述する。

土坑跡は、すべてフラスコピットである。時期的には、出土土器から縄文時期の大木８ｂ式期から後期初頭期にかけてのものと推測されるのが大部分である。

第２表は、今回の調査で検出・精査された土坑跡の一覧表である。形態的には、円形ないしは楕円形、規模的には底面（下場）径で１.５～２ｍ前後のものが多い。底面からの角度（壁の立ち上がり）は、第４号、15号、16号、20号、22号のように45°～55°ときつく、所謂、フラスコ状を呈するものもあるが、大方は、70°～90°とゆるやかな、ビーカー状を呈するものである。

22基の土坑跡の中では、第15号土坑跡が注目される。これは、底面の東隅に小～中の円形、楕円形礫が集中してみられ、作業場的？なものを想定させる。

土坑番号	平面形		規模		底面からの角度	土坑番号	平面形		規模		底面からの角度
	上場	下場	上場	下場			上場	下場	上場	下場	
１号	楕円形	円形	1.8×1.45	直径1.9	70°	12号	不整円形	不整円形	直径1.65	直径1.65	80°
２号	楕円形	円形	1.20×0.85	直径1.0	70°	13号	円形	円形	直径2.0	直径2.0	90°
３号	楕円形	円形	1.35×1.15	直径1.55	70°	14号	円形？	円形？	不詳	不詳	90°
４号	楕円形？	楕円形？	不詳	不詳	45°	15号	円形	円形	直径1.7	直径2.1	45°
５号	円形	円形	直径1.7	直径1.95	75°	16号	円形？	円形？	不詳	不詳	50°
６号	楕円形	円形	1.65×1.50	直径1.7	80°	17号	円形	円形	直径1.6	直径1.6	90°
７号	円形	円形	直径1.45	直径1.3	90°	18号	楕円形	円形	1.4×1.1	直径1.9	70°
８号	円形	円形	直径1.6	直径1.75	75°	19号	円形？	円形？	直径1.7	不詳	90°
９号	円形？	円形？	不詳	不詳	90°	20号	楕円形	円形	不詳	直径1.3	55°
10号	円形	円形	直径1.2	直径1.2	75°	21号	円形	円形	直径1.2	直径1.1	90°
11号	円形	円形	直径2.2	直径2.45	80°	22号	円形	円形	直径1.4	直径1.7	50°

2　縄文時代の遺物について

今回の調査で出土した遺物の大半は、縄文時代のものである。縄文時代の土器は、早期から晩期までの各期のものが含まれているが、一番多いのは中期のものである。以下、今回出土した縄文時代の土器を分類する。

縄文時代早期

Ⅰ群土器　縄文時代早期に属する土器群を一括したもので、今回の調査区内では第1001号竪穴住居跡貼り床下の遺物包含層の１層～３層にかけてのみ出土している。以下、施文要素等により細分される。

Ａ類　貝殻文を施文するもの（第58図１～36、第49図１～５）

Ａ種（第58図１～４）

絡条体圧痕文を施文した隆帯を貼るもの。第58図１、２と３、４は類似するが、隆帯の太さの違い、沈線文の有無等の相違点も見られる。類例としては、岩手県一戸町大久保遺跡第Ⅲ群土器や青森県東通村下田代納屋Ｂ遺跡等がある。

Ｂ種（第58図５、６、21）

第58図５、６は、口縁部上端の内面に貝殻腹縁部を押し付けた様な刻目を施すもので、21は、沈線と貝殻文を組み合わせて文様を構成し刺突列を伴うものである。これらは、物見台系に属するもので類例としては、大久保遺跡、岩手県二戸市上里遺跡や青森県八戸市鳥木沢遺跡、売場遺跡第Ⅴ群Ｂ類土器などがある。

Ｃ種（第58図22～33、第49図４、５）

小さな貝殻もしくは小貝片で貝殻文を施文するもの。Ａ種、Ｂ種とは全く異なった貝殻の使い方をする。第58図33のように乳房状の突起を有す尖底部を中心に同心円を描くものは、大久保遺跡Ⅱ群土器４類Ｃの中にあるが、これは、同心円でなく方形状を呈するものである。

Ｂ類　微隆起線文を施文するものとそれらに含まれると考えられる条痕文を施すものや無文の土器（第49図６、第58図36～64、第60図116～121）

本類土器は、箸状の棒状工具を用い平行沈線を引くことにより生じる粘土のまくれあがりで微隆起線文を表出しているものである。胎土、焼成が極めて良好で焼きしまった感じで、しかも器厚の薄いものである。すべてが破片のため全体の器形・文様構成等を知ることはできない。類例は、上里遺跡（細隆起線文と記述している）や売場遺跡等で出土している。上里遺跡では一個体復原され全体の器形が推測されるものが出土している。

Ｃ類　縄文－縄文、縄文－条痕の土器（第49図７、14、第59図65～90）

胎土に多量の繊維を含むもので、焼成も脆弱なものである。宮古市内では、千鶏遺跡から若干量出土しているが、繊維の含有量や焼成等に差異が認められる。

以上が早期に属すると考える土器群だが、これらを層位的には混在状態で出土しており、また平安時代の竪穴住居構築時にも攪乱されている可能性もある。

縄文時代前期

Ⅱ群土器　縄文時代前期に属する土器群を一括したもの。数量的には多くなく、やはり1群土器群と同じ地点から出土している。

A類　上川名Ⅱ式、千鶏遺跡Ⅱ群土器等に相当するもの

a種

撚糸圧痕文、刻目文等を施文し文様を構成するもので、類例としては千鶏遺跡Ⅱ群A類、岩手県滝沢村湯舟沢遺跡、雫石町桜松遺跡等で出土している。

b種

異なる原体で羽状縄文を表出するもの

B類　千鶏遺跡Ⅲ群土器に相当するもの

a種

短かい原体で結束する羽状縄文を施文するもので、類例としては千鶏遺跡の外、宮城県塩釜市桂島貝塚、名取市宇賀崎貝塚第から出土している。

b種

いわゆる「ぴっちり縄文」と言われているもので前段多条、前々段反撚の縄文原体で施文するもの。第60図111は、羽状縄文となっている。類例としては、滝沢村仏沢Ⅲ遺跡、二戸市沢内B遺跡、上里遺跡、宮古市赤前Ⅳ遺跡、崎山貝塚等から出土している。

縄文時代中期

Ⅲ群～Ⅵ群土器は縄文時代中期に伴うもので、大木8a式～大木10式に併行する。遺構の多くもこれらの時期に伴うものが多い。

しかし、前述したように遺構からの遺物の出土量は、さほど多いとは言えず、器種も出そろっていないために系統的な変遷を示すには至らなかった。

大木8a式

Ⅲ群土器　大木8a式に伴うもので、遺構毎のセットにより次の2小群に細別される。

Ⅲa群――第1号土坑跡出土土器

器形はキャリパー形深鉢、口縁部の外反する深鉢、浅鉢などがある。施文技法は隆起線文と沈線文を主体とし、浅鉢に縄文原体の側面圧痕文が残る。モティーフは、キャリパー形深鉢の口縁部に波状文の展開が見られるものの、下端部への連結が縦位2条の隆起線によりなされることなどから、やや不定形の感を受ける。

また、口唇部に無文帯のみられることも特徴としてあげられる。

Ⅲb群――第1号竪穴跡出土土器

器形は小型のキャリパー形深鉢と、口縁部の外反する深鉢のほかは小片であり不明瞭であるが、キャリパー形が多い様である。

施文技法は隆起線文のみである。モティーフは、キャリパー形深鉢の口縁部に長方形？の区画文がみられる。また、口唇部には文様帯や無文帯を有するものと無いものの2種がある。

以上のⅢａ群とⅢｂ群には型式的な差位が見られ、前者が古い可能性があるものの器種が出そろっていないために、可能性を示すのみに留める。 **型式的な差位**

Ⅳ群土器　大木８ｂ式に伴うものでやはり遺構毎のセットにより２小群に細別される。 **大木８ｂ式**

Ⅳａ群――第17号土坑跡出土土器

器形は、口縁部の外反する深鉢と内湾する深鉢及びキャリパー形深鉢（破片）などがある。

施文技法は、平行沈線文と隆沈線文がみられる。モティーフは、口縁部の内湾する深鉢の体部下半に平行沈線による懸垂文や有棘の施文などがみられるものの渦巻文はあまり発達していない。更に、体部の上半にも横位の平行沈線文が施される。

また、キャリパー形深鉢の口縁部には、横方向に展開する施文がみられるものの上下の境界線への連絡はあまり見られず、開放的なものとなっている。

Ⅳｂ群――第１号土坑跡出土土器

第１号土坑跡は、今回調査した遺構の中では、最も遺物の出土点数が多く、しかも、埋土上層（Ａ層）に遺物が集中している。この層は、暗褐色土を基本土とし多量の焼土、炭化物粒及び少量の魚骨片等を含み、日常生活により出る残滓等を廃棄したものと考えられる。更に、Ａ層の土量から比較的短期間のうちに堆積したものと思われる。このことは、出土する土器が型式的にひとつのまとまりを持つこととも符号している。

器形は、キャリパー形深鉢が最も多く口縁部の内湾する深鉢がこれにつぐ。口縁部の外反する深鉢はあまり多くない様である。また、口縁部の内湾する粗製深鉢も伴うが、浅鉢等の器形は欠落している。

施文技法は、隆沈線文と平行沈線文が主体となり、磨消技法によるものは伴わない。モティーフは、キャリパー形深鉢では、口縁部文様帯に隆沈線による横位長楕円形の区画文を施し、これらの中間部に渦巻文や円形文を配すという比較的定形的な施文となる。前型式に比して、かなり閉鎖性が強くなるという特徴を有する。頸部は、無文帯を有するものが多いが隆沈線を施したのみで、口縁部文様帯と体部文様帯が接続するものもある。体部文様帯は、平行沈線により懸垂文を主体とした施文がみられるが、隣接する文様要素との連結が著しく、結果的に多くの区画文を作り出している。なお、この連結部分には小渦巻文を配する例がある。

口縁部の内湾する深鉢では、器面全体に隆沈線による流麗な大渦巻文を描くものの、やはり、小渦巻文や短かい隆沈線により他の文様要素との連結があり、閉鎖的な施文となる。

口縁部の外反する深鉢は、平行沈線文により大渦巻文や懸垂文等を施すものの、いずれも破片であり、モティーフの全容は不明である。

Ⅳ群土器は、以上の通りであるが、Ⅳａ群土器は、盛岡市大館町遺跡ＲＡ102竪穴住居跡の埋土遺物に類似し、大木８ｂ－１式～大木８ｂ－２式に位置づけられる。本群もこのどちらかの型式に伴うものであるが、器種の組成を論ずる程の遺物量ではないので、これ以上の細分を避ける。 **大館町遺跡**

大地渡遺跡
柿ノ木平遺跡

一方、Ⅳｂ群土器は、石鳥谷町大地渡遺跡の遺構から出土した遺物や盛岡市柿ノ木平遺跡のＩｂ群土器に類似し、大木８ｂ－３式に位置づけられる。

大木９式

Ⅴ群土器　大木９式に伴うもので、第13号、14号土坑跡などから出土している。第13号土坑跡は、第14号土坑跡を切るが、両方の遺構から類似した遺物が出土しているため一括する。

器形は、口縁部が内湾し頸部が屈曲するキャリパー形深鉢のほかに口縁部の外反する深鉢がある。

施文技法は、いずれも磨消技法によるが刺突文等を充填するものである。口縁部から体部にかけて、ひとつの文様帯を形成することを特徴とし、モティーフは、縦位の長だ円形区画文を主体とし、一部に凸字形の区画文が伴う。

大木10式

Ⅵ群土器　大木10式に伴うもので、第19号土坑跡などから出土しているが、いずれも破片である。

器形は、口縁部付近でわずかに内反する深鉢がある。施文技法は、沈線による磨消技法を中心とする。モティーフは、曲線的な縄文区画を施すものの全容は不明である。

また、一部、キャリパー形深鉢片や隆沈線文により施文されるものの破片がみられるが、本群より古い型式が混入したものと思われる。

縄文時代後期

Ⅶ群土器　縄文時代後期に伴うものであるが、破片が中心となるため全容は不明である。

第６号土坑跡などから出土している。器形は、口縁部のわずかに外反するものが多い様である。施文技法は、幅の狭い平行沈線文を主体とし、一部磨消しが伴うようである。モティーフは不明であるものの、後期中葉に伴うものと思われる。

縄文時代晩期

Ⅷ群土器　縄文時代晩期に伴うものであるが、破片が中心で全容は不明である。

第1002号竪穴住居跡埋土などから出土している。器形、モティーフ等は不明であるものの、大洞Ｂ式～Ｃ２式に伴うと思われるものである。

弥生時代の土器

Ⅷ群土器　弥生時代の土器だが、量的には少ない。

第1002号竪穴住居跡埋土などから出土しているが、器形・モティーフ等は不明である。交互刺突列を施す天王山式に併行するものなどがみられる。

平安時代の遺構・遺物について

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡２棟を検出しているが、ここでは、その全容を知り得た第1002号竪穴住居跡に注目して記述する。そもそも、当遺跡に平安時代の遺構・遺物が存在することが判明したのは、今回の調査がはじめてである。

竪穴は、一辺が約３ｍ強の方形を呈するもので、カマドは東壁際に位置する。規模的には、むしろ小規模な部類に入るものである。当遺跡においては、平安時代の竪穴の方が縄文時代の竪穴よりも掘り込みが深くなっている様で、今回の調査区外にも平安時代の竪穴住居跡が存在すると考えられるため、縄文時代の遺構・遺物は、相当攪乱されている可能性がある。

宮古市内においては、近年、泉町狐崎遺跡、赤前遺跡群、青猿Ｉ遺跡、磯鶏館山遺跡、上村遺跡等で平安時代の竪穴住居跡が検出されているが、宮古市内では、平坦地が少ないという地形的な制約のためか、尾根上に立地する場合が多い様である。特に、磯鶏館山遺跡では、尾根上や斜面上に35棟もの平安時代の竪穴住居跡が検出されているが、残念な事には未整理・未報告のためその全容は、把握されていない。当遺跡の場合も、中世の城館跡として整備される前は、丘陵の突端部に位置する尾根状の地形を呈していたと考えられる。また、直接海に面する所に位置する集落としても注目されるものである。

土器は、カマド跡付近を中心に出土しているが、出土量は多くない。特に、坏は、ほとんど破片のみで量的にも少ない。

坏は、ロクロ成形後に内面黒色処理を施した底部回転糸切り離しのものだけである。

甕は、第74図１の様に、ロクロ成形後に内外面を粗いヘラナデ、横ナデ、刷毛目等の再調整を施したものが多い。

この様な土器群の様相は、大むね９世紀末から10世紀代に位置づけられるものと考えられ、内陸部では当該期の遺跡は多いが、沿岸部では、調査事例も少なく宮古市内においては、赤前遺跡群の土器群に相当するものと思われる。

また、土器の中で注目されるのは、外面に粘土輪積み痕がそのまま残っているのが観察されるものが出土している事である。これは、製塩に用いた土器（製塩土器）と考えられるものである。体部の破片しか出土しなかったため、全体の器形等は不明であるが、実際の使用に供された形跡がないことから、未使用のものであったと思われる。元々、宮古地方は、海に面しているので製塩を行っていたことは容易に考えられるが、実際に製塩土器が出土したのは初めてである。未使用であったと思われる事から、実際の製塩作業場は、竪穴住居跡の立地する当台地上ではなく、もっと海に下った海岸部であったという事も考えられる。

次に、竪穴住居跡の床面から検出した両端に目釘穴状の穿孔が認められる鉄製品は、「穂摘み具」とか「穂切り具」等と言われている農具の一種と考えられるものである。実際に、当竪穴に形成された自然遺物ブロックからは、穀物の種子らしきものが検出されており、その関連が注目される。この様な鉄製品は、宮古市内では、赤前遺跡から３点出土しており形態的にもほぼ類似するものである。また、青森県の津軽地方では比較的多く出土しており、青森市三内遺跡のＨ－44号竪穴住居跡床面からは、16点が一括して出土している。

自然遺物ブロックは、直接的には、竪穴住居跡に伴うものではないが、当竪穴住居跡廃絶後

イガイ
魚骨

間もなく形成されたものである。その主体は、岩礁性の海岸部に生息するイガイであるが、砂泥性のアサリやアカザラガイの貝類の他、アイナメやカサゴ科等の魚骨も極く少量ながら出土している。出土状況を細かくみると、10に分けられたブロックでもイガイが破砕されたものが多いブロックと形状をとどめたままのものが多いブロックに分けられるが、何か目的のちがい等があったとも考えられる。

磯鶏館山遺跡

この様な平安時代の比較的大きな自然遺物ブロックは、磯鶏館山遺跡でも確認されているが、磯鶏館山遺跡の場合は、直径1m程の円形土坑内に形成されたもので、この様な土坑跡3基を検出している（未報告）。両者を比較した場合、貝類（特にイガイ）を中心としている点や貝類以外の獣魚骨が極端に少ない事、穀物の種子（種不明）が含まれている事等共通点が多いが磯鶏館山遺跡が未整理、未報告のため比較・検討には至っていない。

以上、第1002号竪穴住居跡についてまとめてみたが、製塩、漁撈、農耕にかかわる遺物が出土しており、当時の生業活動、食生活等の一面が反映されているものと思われる。海岸部に立地する遺跡という特質を表わしており、それが半農半漁という集落全体の生活パターンなのか、各々専門化した生業活動の表われなのか等という様々な問題を換起してくれるものである。また、宮古地方では、当時の生業活動として製鉄という鉄に関した遺跡（青猿Ⅰ遺跡等）も有り、それぞれがどのように関わっていたのか等、今後の資料の蓄積により明らかにされていくものと考えられ、より具体的な当時の宮古地方の社会・文化が解明されていくものと思われる。

Summary

Miyako,with the population of about 60,000,is a coastal city situated in lat.35 45 N,long. 20 15 E the eastern end of Honshu.

KUWAGASAKI TATEYAMAKAIZUKA (fortification and shell mound) ,now the Miyako weather station,is located in the north-east of Miyako,on the eastern end of the hill (about 100 meters avove sea-level)formed on the end of the low mountain region(200-500 meters above sea-level),facing the Pacific Ocean.

This site,only 200 meters away from the seasbore,has been well-known as a remain rich in trash heaps,bone tools and so on. Thatis the reason why this remain has long attracted attention of many researchers and has been investigated by them. Kamakichi Kishinoue (a professor of agriculture at Tokyo Teikoku University at the time) was among them, who wrote 『Pre-historic Fishing in Japan』 (1911) in which he shows many relics collected in this site. Their study,on the other hand, stimulated a local researcher,Kichibei Nakajima(a elementary school teacher at the time) to energetic search,resulti ng in his excellent work 『Memoir on the Prehistoric relics』(1912),but not yet published.

The excavation for rebuilding of the Miyako weather station was made from August to November in 1989. It revealed anew that people have settled here for a long period of time from the Jomon period to the present age. Main remains are pit dwellings,a hearth encircled by the stones,pits of the Jomon period and pit dwellings,a trash heap of the Heian period.

The pits of Jomon period are what we call flask-shaped pits, generally supposed to be storage pits. Some of the pits at this site, however, have many pebblls over the floor and some have small round or oval pebbles on the edge of the floor, leading us to imagine that they might have served another purpose.

The Jomon potteris range from the Early period to the Late period. The Early Jomon potteries,dcorated with the impression of cords or shells and with the spatula groovings, can be classified into three types based on the technique of decoration or on the motif. The type I-A-C and those with the groovings,scarce in Iwate Pre.,are valuable materials. A l arge number of potteries of the Middle Jomon,unearthed in the pit no. 1,are mostly the Daigi 8b-3 type,also important materials for comparative study.

The pit dwelling no. 1002 of the Heian period,a type dwelling with one side 3 meters long, stone furnice on the earstern wall,produced interesting relics. They are fragments of pottery serving for salt manufacture, found in the soil forming the furnice, an iron tool believed to have used for gathering ears of crops, found on the floor of the dwelling and a trash heap formed in the soil burying the pit dwelling.

We have some examples of a trash heap of the Heian period both in and out of Miyako. The trash heap at this site ,consisting mainly of mussels,can be divided into several blocks

according to their contents. Fish bones and seeds were also found through the screening with water.

The pit dwelling no. 1002 provided us with very valuable materials for study of agriculture, fishing and salt manufacture of the Heian period.

写　真　図　版

第１図版

鍬ヶ崎館山貝塚航空写真

第２図版

遺跡景観

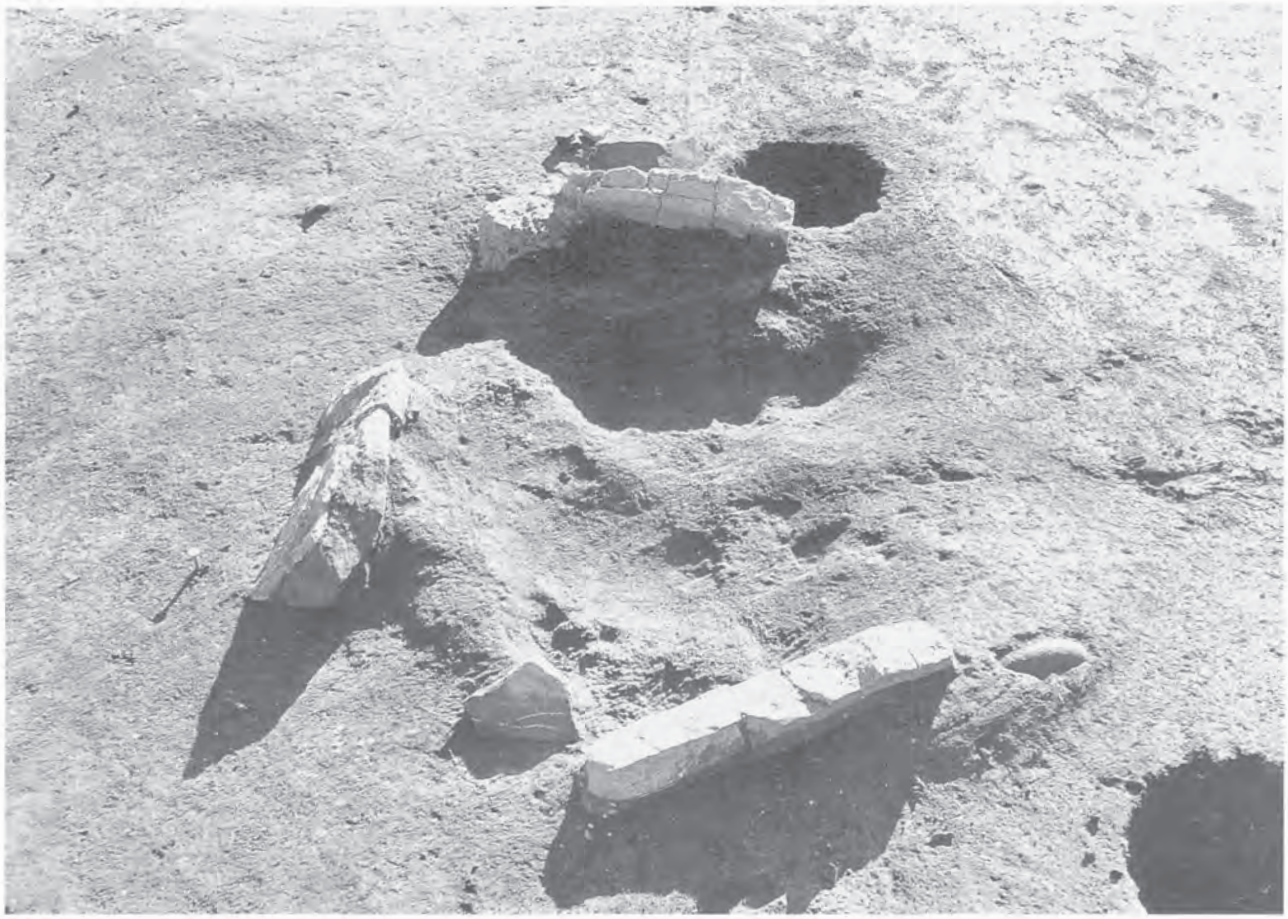
完掘状況①

第３図版

完掘状況②

Ａトレンチ断面

第４図版



第１号炉跡

第２号炉跡

第５図版

第１号土坑跡掘り上がり

第１号土坑跡断面

第６図版

第１号土坑跡遺物出土状況①

第１号土坑跡遺物出土状況②

第７図版

第５号土壙跡遺物出土状況

第17号土壙跡遺物出土状況

第８図版

第15号土坑跡掘り上がり

第15号土坑跡底面の集礫状況

第９図版

第1001号竪穴住居跡掘り上がり

第1001号竪穴住居跡断面

第10図版

第1002号竪穴住居跡断面

第1002号竪穴住居跡掘り上がり

第11図版

第1002号竪穴住居跡カマド跡

第1002号竪穴住居跡カマド跡断面

第12図版

第1002号竪穴住居跡製塩土器出土状況

穂摘み具様鉄製品出土状況

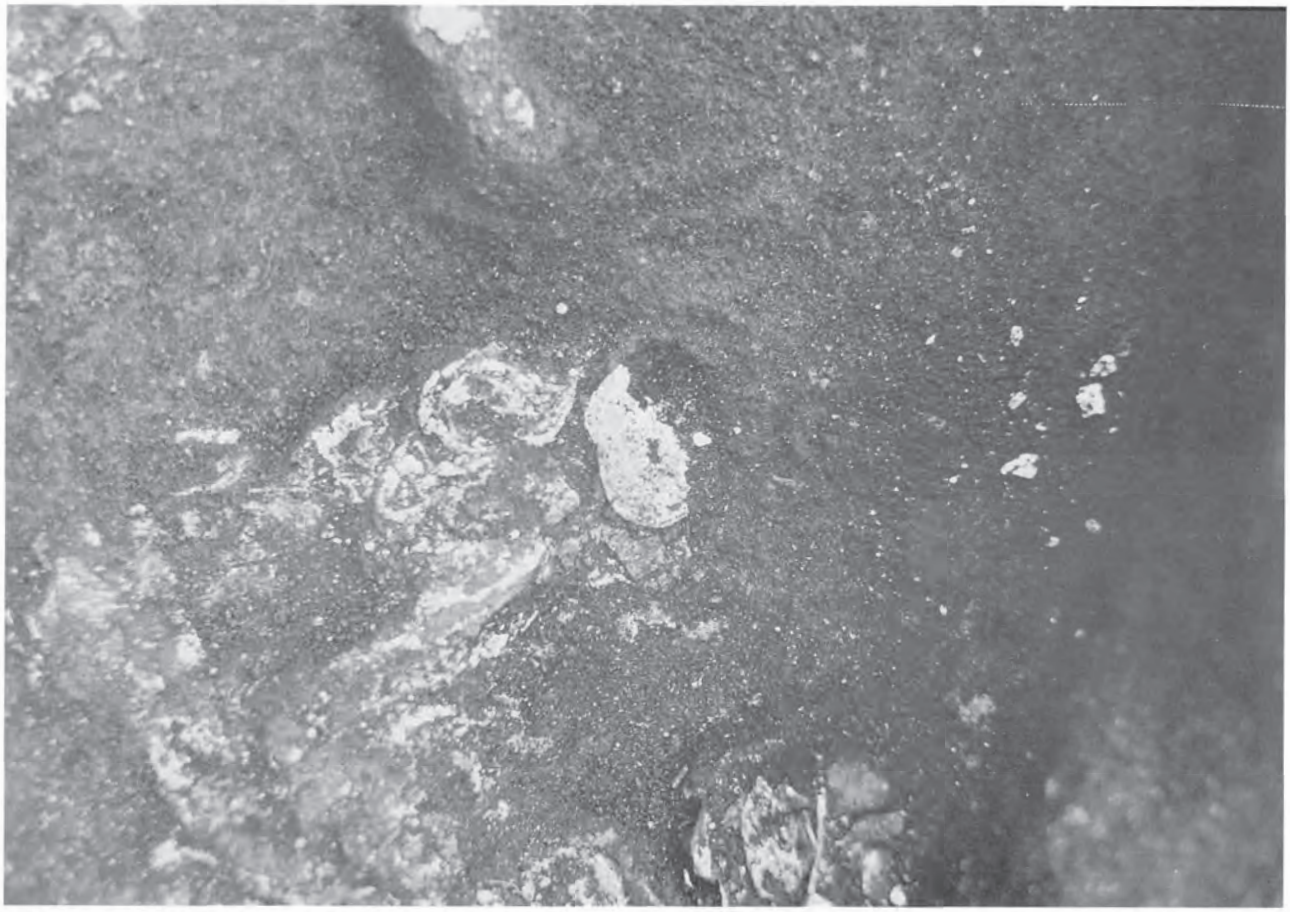
第13図版

自然遺物ブロック全景

自然遺物ブロック断面

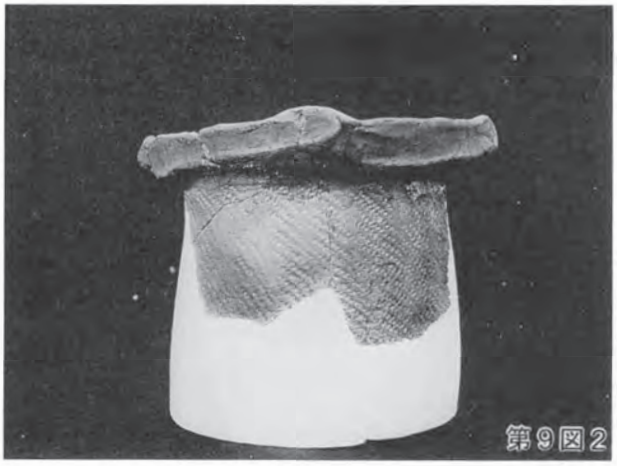
第14図版

自然遺物①



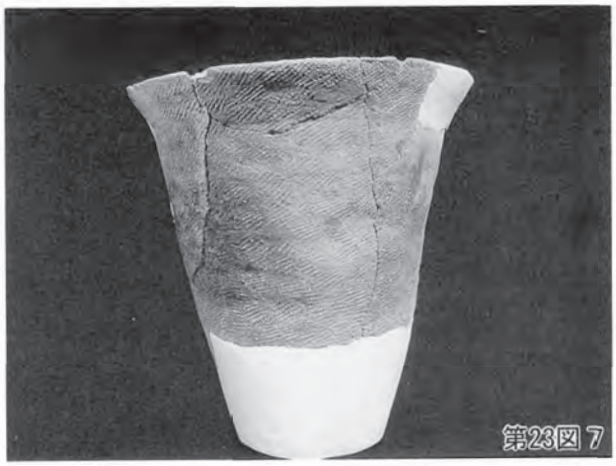
自然遺物②

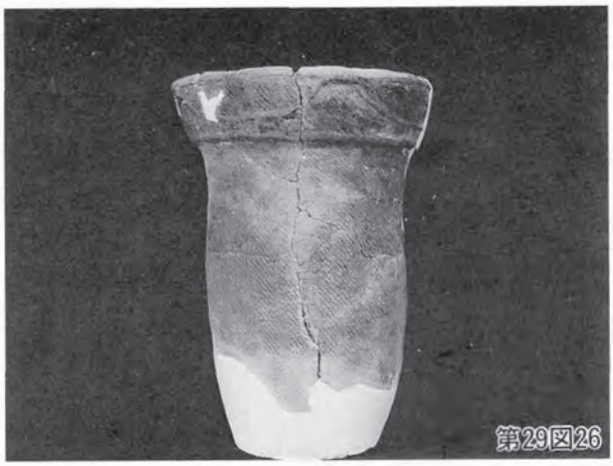
第15図版



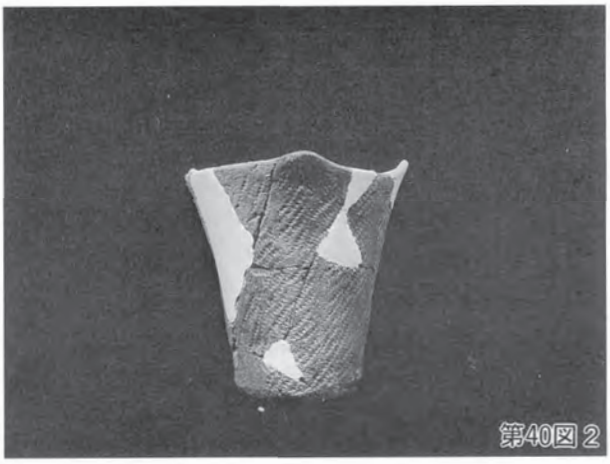
第１号竪穴跡、第１号土坑跡出土土器

第16図版

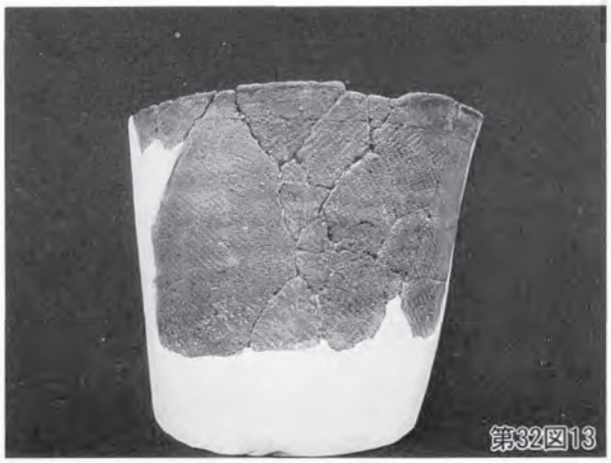

第23図 7


第29図26

第40図 1


第40図 2

第41図 1


第32図13

土坑跡出土土器

第17図版

第１号土坑跡出土土器①

第１号土坑跡出土土器②

第18図版

第１号土坑跡出土土器③

第１号土坑跡出土土器④

第19図版

第1002号竪穴住居跡出土土器

穂摘み具様鉄製品

第20図版

第1002号竪穴住居跡出土製塩土器（表）

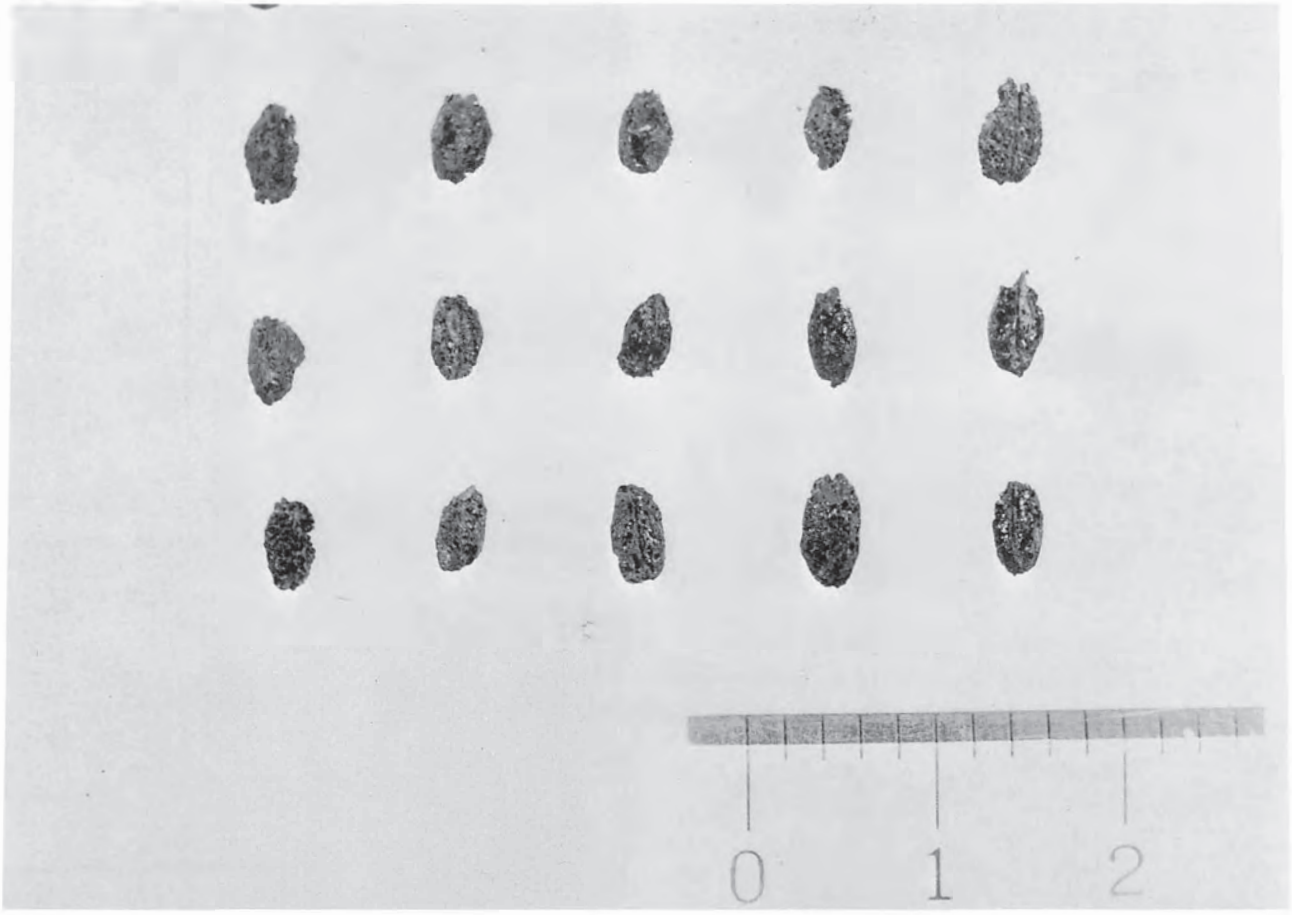
（裏）

第21図版

自然遺物ブロック出土遺物①

自然遺物ブロック出土遺物②

第22図版



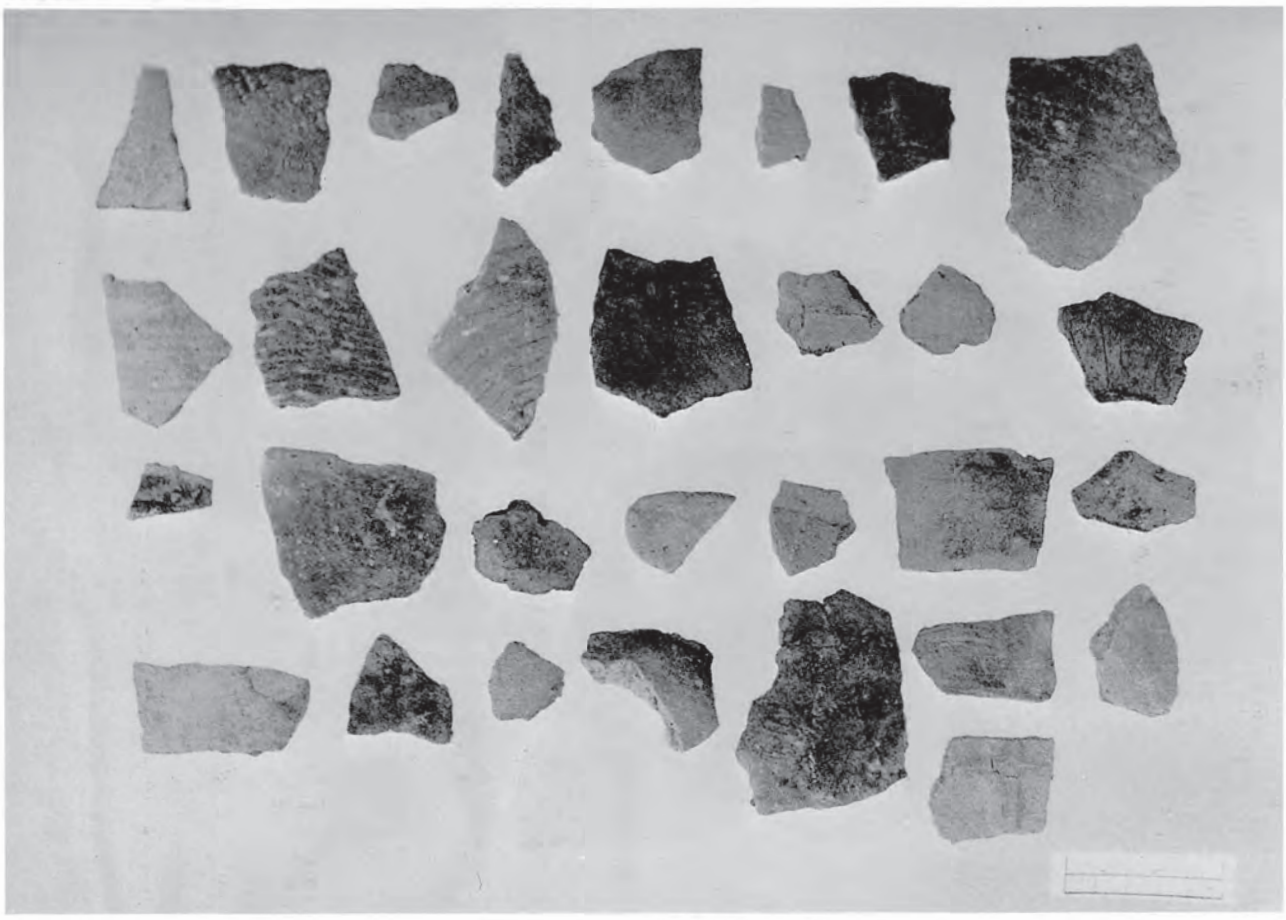
自然遺物ブロック出土遺物③

第23図版

遺構外出土土器①

遺構外出土土器②

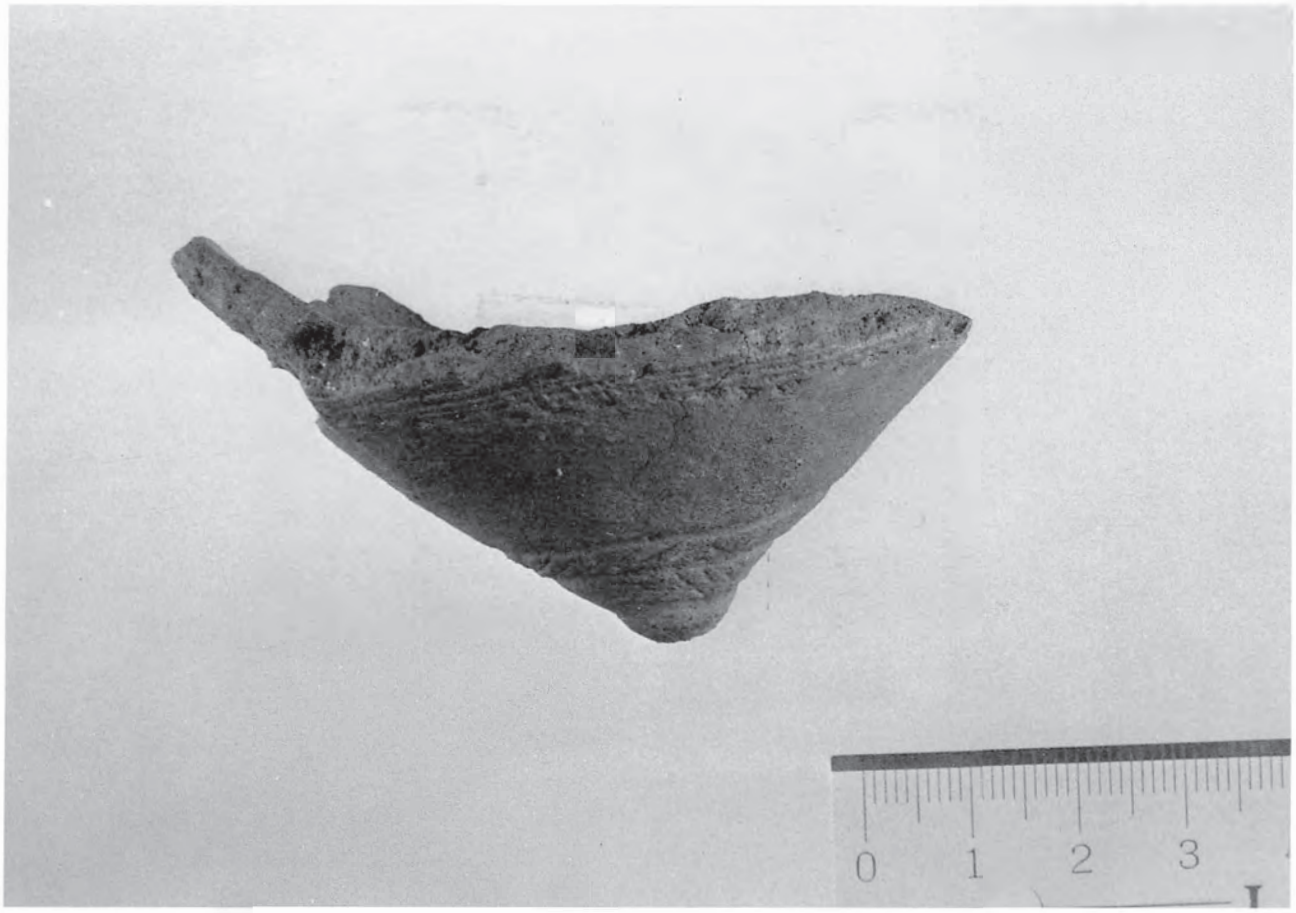
第24図版



遺構外出土土器③

遺構外出土土器④

第25図版



遺構外出土土器⑤

遺構外出土土器⑥

第26図版

遺構外出土土器⑦

遺構外出土土器⑧

宮古市埋蔵文化財調査報告書25

鍬ヶ崎館山貝塚

くわ が さき たて やま かい づか

—平成元年度発掘調査報告書—

1990.11

発行　岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町２番１号

印刷　ショウジ印刷株式会社
宮古市末広町４－10